
日本ルワンダ学生会議
第 15 回本会議 活動報告書

2016 年 8 月 1 日 (月) ~ 8 月 16 日 (火)

はじめに

「日本ルワンダ学生会議 第15回本会議 活動報告書」を手にとってくださり、ありがとうございます。この報告書を通じて、皆様に日本ルワンダ学生会議の今夏の活動を報告できることを大変嬉しく思っております。本書は2016年8月1日から8月16日までの16日間、ルワンダ人学生4名と日本人大学生18名が共に行った事業「第15回本会議 日本招致事業」の活動内容をまとめたものです。

第15回本会議では東京都（前半・後半）、群馬県の二都市を訪れました。例年に比べ、開催期間が1週間ほど短いものとなりましたが、ルワンダ人メンバーはもちろん、日本人メンバーにとっても非常に密度の高い、充実した時間となりました。

東京都前半では、現在国際的に注目を集めているLGBT（セクシュアル・マイノリティ）について考える時間を設けました。LGBTトークセッションを行い、また渋谷男女ダイバーシティセンター〈アイリス〉を訪問させていただきました。ルワンダを含むアフリカ諸国では未だにLGBTに対してマイナスなイメージを持つ人々が多く存在しています。その中でルワンダ人、日本人間でLGBTについて学べたことは非常に有意義なことだと思います。後半ではSonyに関する施設訪問、国立ハンセン病資料館訪問、水族館訪問等を行い、多角的な視点から日本の歴史、未来について考えることができました。

群馬県では、多文化共生をテーマに人口の約15%が外国人である大泉町に滞在しました。観光協会の方にお話を伺い、多文化共生を目指すうえでの課題など教えていただきました。

ルワンダ人メンバーと衣食住を共にし、活動をしていくことで、両国文化の差異や共通点にも気づくことができ、メンバー間の絆がより一層深まったということを実感しています。第15回本会議を通じて、私達の活動理念である「相互理解」にまた一步近づくことができたと確信しています。

最後となりましたが、本招致事業は多くの方々のご協力とご支援なくしては実現することができませんでした。日頃から私たちの活動を応援してくださっている皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

本書が日本とルワンダ、そして世界について視野を広げるきっかけとなれば幸いです。

2016年10月

日本ルワンダ学生会議 メンバー一同

日本ルワンダ学生会議 第 15 回本会議 活動報告書

目次

はじめに.....	3
-----------	---

序章

日本側責任者挨拶.....	8
ルワンダ側責任者挨拶.....	9
関係者挨拶.....	10
日本ルワンダ学生会議団体紹介.....	11
ルワンダ共和国基礎情報.....	15

第 1 章 第 15 回本会議 事業概要

第 15 回本会議 概要・活動日程.....	20
------------------------	----

第 2 章 日本招致活動報告書

ルワンダカフェ.....	24
--------------	----

アイデンティティ企画

LGBT を通してアイデンティティについて考える.....	27
東アフリカの LGBT 写真展・トークセッション.....	29

群馬企画

労働面から考える多文化共生～勉強会・丘山産業訪問.....	33
観光協会訪問ー多文化共生の現状と行く先ー.....	36
NPO 法人 No-borders 訪問.....	38
多目的教育施設「まなばる」訪問.....	40

東京企画

ハンセン病から「差別・偏見」を考える.....	42
水族館から学ぶ生物多様性.....	45
ソニー歴史資料館・ビル見学.....	48

第3章 学生会議活動報告

学生会議 概要	51
---------------	----

日本側プレゼンテーション

ユマニチュード	52
豊かな高齢社会	55
障害と出生前診断	57
リーダーシップ	59

ルワンダ側プレゼンテーション

WOMEN IN RWANDA POLITICS	61
Immigration and Residence in Rwanda	64
THE MIGHTY DRUM	66
Rwanda	68

第4章 参加者感想

板谷美沙	日本大学経済学部4年	71
岩垣梨花	早稲田大学人間科学部4年	73
宇田川藍佳	国際基督教大学教養学部2年	75
栞原千華	同志社大学法学部3年	77
田中瑞幹	同志社大学政策学部3年	79
堤谷季里	早稲田大学人間科学部2年	80
西野由花	青山学院大学国際政治経済学部2年	81
林 陸	上智大学経済学部2年	82
美崎絢香	同志社大学商学部2年	85
水口あすか	東京女子大学現代教養学部2年	86
安居綾香	同志社大学グローバル地域文化学部4年	88
柳田瑞季	上智大学文学部2年	90

山崎 建	早稲田大学社会科学部 3 年.....	91
吉田萌子	早稲田大学人間科学部 2 年.....	94
渡邊 伶	早稲田大学教育学部 4 年.....	95

Jean Berchmans IMANISHIMWE	ルワンダ国立大学薬学部.....	99
Nadia NIYONIZEYE	ルワンダ国立大学理工学部.....	102
Blaise P. SHYAKA	ルワンダ国立大学理工学部.....	106
Léandre BERWA	ルワンダ国立大学理工学部.....	113

メディア掲載.....	121
後援・助成金団体様・ご協力いただいた方々.....	122
おわりに.....	124

序章

日本側責任者挨拶	8
ルワンダ側責任者挨拶	9
関係者挨拶	10
日本ルワンダ学生会議団体紹介	11
ルワンダ共和国情報	15

日本側責任者挨拶

初めに、日本ルワンダ学生会議第15回本会議開催にあたって、ご支援・ご協力を頂きました皆さまにこの場を借りて改めて御礼申し上げます。第15回本会議はメンバーの半数以上にとって初めての本会議であったため直前まで緊張感がありました。しかし、こうして無事に第15回本会議という形で日本ルワンダ学生会議に新たな歴史を刻むことができ非常に嬉しく思います。皆さま、お一人お一人の支えがなければ実現することが非常に難しかったと思います。

さて、私たちが熱い16日間を過ごした2016年夏。日本の裏側、ブラジル・リオデジャネイロではオリンピック・パラリンピックが開催されました。オリンピック開会式の当日、私はたまたまルワンダメンバーと各国代表選手の入場をテレビで見っていました。民族衣装を身にまとい入場する代表選手、一国から数え切れないほど多い代表選手、たった一人で代表として参加している選手など、今回は200を超える国と地域から参加がありました。また、今回のオリンピックでは、歴史上初めての難民オリンピック選手団を結成し、シリアやコンゴ民主共和国、エチオピア、南スーダン出身の10人の選手が出場しました。色んな人々がこの地球に住んでいて、スポーツを通して一つになる、スポーツは一人ではできない、相手がいるからこそできる、フィールド上では選手はみな対等です。また、フェアプレーの精神でプレイする選手の姿に、世界中が熱狂し、誰もが感動したことでしょう。

今回の本会議ではLGBTから考えるアイデンティティ、多文化共生社会、ハンセン病から考える差別と偏見、生物多様性など本会議全体でみると「共生」が大きなテーマになっていました。スポーツにおけるフェアプレーの精神のように、地球上に住むみんなと共に生きていくには「相互理解」が欠かせません。「相互理解」、言うのは簡単ですが、果たしてどれだけの方が「相互理解」について考えたことがあるのでしょうか。私たちは、学生だからこそ学術・文化交流に焦点を充てて、じっくりお互いに寄り添い、ルワンダ人メンバーと共に「相互理解」を理念に活動することができます。ジェノサイドからの平和と共生の継続が求められるルワンダ、共生において世界的に見ても多くの問題を抱える日本。当報告書は、16日間にわたる共同生活や学生会議、フィールドワークを通して日本人・ルワンダ人メンバーの記録です。私たちが2016年夏、何を学び、感じ、考えたのか、ぜひご覧いただけますと幸いです。

日本ルワンダ学生会議 日本側代表
水口 あすか

ルワンダ側責任者挨拶

みなさん、こんにちは。私は日本ルワンダ学生会議第15回本会議ルワンダ側責任者のナディアです。本会議開催にあたって、行政・企業の方々をはじめ、日本人メンバーやOBOGの方々等、たくさんの方々からご支援いただきました。携わっていただいたすべての方に感謝申し上げます。

日本ルワンダ学生会議は、日本・ルワンダの学生が2006年に発足された団体です。日本とルワンダの学生が学術・文化交流を通じて、相互理解を深めています。

私たちは今回の渡航でたくさんのことを学びました。LGBT企画では、日本人が性的少数者にどのような理解を示し、どのような制度を備えているのかを学びました。群馬企画では、教育現場や職場での国境のない、多文化共生について学びました。東京企画では、ハンセン病の歴史、生物多様性、世界的な日本の科学技術を学びました。学生会議では、お互いの国や、お互いの経験や将来の話を共有し、たくさんことを学び、相互理解に努めました。このすばらしい時間を、すばらしい仲間と共に過ごすことができたことに感謝しています。

最後に、日本ルワンダ学生会議が日本・ルワンダの相互理解だけでなく、ルワンダがアフリカの中心として、日本、ひいてはアジア地域、そしてアフリカ全体の相互理解に繋がることを強く願っています。ありがとうございました。

日本ルワンダ学生会議 ルワンダ代表

Nadia NIYONIZEYE

関係者挨拶

2016年8月、日本ルワンダ学生会議（JRYC）によるルワンダ大学生日本招致が行われた。ルワンダを訪れたことがない方々の中には、「アフリカは暑い」と考える人も多いと思うが、ルワンダは標高が高い国で、湿度は低く日陰は涼しい（直射日光下はもちろん暑い）。そして朝晩は長袖を着ないと肌寒いくらいだ。そんなルワンダに暮らす大学生たちは、記録的猛暑で高温多湿な日本に、さぞ驚いたことだろう。

さて「日本ルワンダ学生会議」の英語名称は“Japan-Rwanda Youth Cooperation”であるが、この“**Youth**”-日本語訳すると「青年」という概念とその社会的役割については、日本社会ではあまり意識されることがないと思う。「青年」を年齢的範囲でとらえる場合には色々な線引きがあるだろうが、たとえばJICAの「青年海外協力隊」は20歳から39歳を対象としている。まあ年齢層としてはその辺が「青年」なのだろう。ではこの年齢層の「青年」の社会的役割が日本社会で意識されることはあるだろうか？日本では青年世代は「大学生」と「若手社会人」にばっさり寸断されていて相互の交流はほとんどない（就活の際のOB訪問くらいか？）。

一方、ルワンダや他のアフリカ諸国では、「青年」が社会を構成するひとかたまりの主体と認識されているところが少なくないと感じる。何をもち「青年」とするかは国や地域によって様々であろうが、学生も社会人も一緒に「青年」というくくりで協働する場面を目にすることがある。

「理想」や「青臭さ」を持つ大学生と、それなりに世の中がどういう仕組みでどう動いているか、またあまり美しくない世間の現実が分かり始めてきた若手社会人（そして「理想」や「青臭さ」も残っている）の両者の協働は、大きなポテンシャルを持っているはずなので・・・と一人の「元・青年」として今だからこそ思う。

JRYCの大学生メンバーの熱意や能力は素晴らしいものがある。それゆえに「大学を卒業したらもうおしまいー！」となってしまっはもったいない。今一度、「**Youth**」について一緒に考えてみよう。

アフリカ平和再建委員会（ARC） 事務局長
立教大学異文化コミュニケーション学部 助教
小峯茂嗣

日本ルワンダ学生会議 団体紹介

JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION

日本ルワンダ学生会議とは？

日本ルワンダ学生会議（JAPAN-RWANDA YOUTH COOPERATION）は、「相互理解」を活動理念にルワンダの大学生と学術・文化交流を行う学生団体です。異なる背景を持つ彼らとどうやって顔の見える関係を築くのか。日本人同士で分かり合うことさえ決して容易なことではありませんが、日々試行錯誤して活動しています。

主な活動内容

- ・本会議の実施（日本人メンバーがルワンダへ渡航、ルワンダ人メンバーを日本へ招致）
- ・週1回の定例ミーティングの開催
- ・日本とルワンダに関する勉強会
- ・講演会や出張授業の実施
- ・活動報告会の開催や報告書の作成
- ・各種イベントへの参加による周知活動…等

構成人数

日本側メンバー19名、ルワンダ側メンバー19名（2016年8月現在）

活動理念

虐殺が行われた教会の壁に掛けられている1枚の布には、次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかっただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目を背けたという自責の念に対し、相手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかり考えていては、依

存関係をつくり、かえって進展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自立し、主体的に自らの豊かさを築いていくには、共に社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの” Never again” に対し当事者意識を養うばかりではなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまいました。ルワンダの悲劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き、寛容な『人間同士』の関係づくりが、ひいては平和な社会を構築するという信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では、日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し、双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っています。

団体理念の継承

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保します。

ユネスコ憲章には以下のような文言があります。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまいました。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流を行っています。実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えています。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意して頂くものとしています。

略歴

2005年10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年9月	ルワンダにて第1回本会議を開催
2009年3月	団体名を「ルワンダ・プロジェクト」から「日本ルワンダ学生会議」に改称
2009年9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
2009年12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
2010年8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
2010年12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
2011年12月	日本にて第7回本会議を開催
2012年8月	日本にて第8回本会議を開催
2013年2月	ルワンダにて第9回本会議を開催
2013年12月	日本にて第10回本会議を開催
2014年8月	ルワンダにて第11回本会議を開催
2015年1月	日本にて第12回本会議を開催
2015年8月	日本にて第13回本会議を開催
2016年2月	ルワンダにて第14回本会議を開催
2016年8月	日本にて第15回本会議を開催

2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員教授の小峯茂嗣氏が設立した「ルワンダ・プロジェクト」が母体となり、2008年から学生が主体の運営を開始しました。以後、日本・ルワンダ間の学生交流を中心に精力的に活動しています。

平成28年の活動実績

(2015年12月)	学生会議合同説明会
2016年1月	勉強合宿
2月	ルワンダにて第14回本会議実施
7月	アフリカ平和再築委員会(ARC)主催報告会 登壇
8月	日本にて第15回本会議実施
11月	第15回本会議活動報告会

公認

- ・ 駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・ アフリカ平和再築委員会（ARC） 事務局長 小峯茂嗣氏
- ・ 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

連絡先

メールアドレス：japan.rwanda@gmail.com

ホームページ：jp-rw.jimdo.com/

フェイスブック：<https://ja-jp.facebook.com/japanrwanda/>



ルワンダ共和国情報

ABOUT RWANDA

ルワンダ共和国基礎情報

ルワンダはアフリカ中東部に位置する小さな内陸部です。「千の丘の国」と称されるほど自然豊かな国であり、治安もよく、ビジネスがしやすい国として知られています。



- 首都：キガリ
- 人口：1,210 万人（2014 年、世銀）
- 面積：2.63 万平方キロメートル
- 言語：キニアルワンダ語、英語（2009 年、公用語に追加され、仏語に代わって教育言語となった）、仏語
- 宗教：キリスト教（カトリック、プロテスタント）、イスラム教

略史

年月	略史
17世紀	ルワンダ王国建設
1889年	ドイツ保護領 (第一次大戦後はベルギーの信託統治領)
1961年	王制に関する国民投票(共和制樹立を承認) 議会在カイバンダを大統領に選出
1962年	ベルギーにより独立
1973年	クーデター(ハビヤリマナ少佐が大統領就任)
1990年10月	ルワンダ愛国戦線(RPF)による北部侵攻
1993年8月	アルーシャ和平合意
1994年4月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに「ルワンダ大虐殺」発生(～1994年6月)
1994年7月	ルワンダ愛国戦線(RPF)が全土を完全制圧、新政権樹立 (ビジムング大統領、カガメ副大統領就任)
2000年3月	ビジムング大統領辞任

2000年4月	カガメ副大統領が大統領に就任
2000年8月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003年9-10月	上院・下院議員選挙(与党 RPF の勝利)
2008年9月	下院議員選挙(与党 RPF の勝利)
2010年8月	カガメ大統領再選
2013年9月	下院議員選挙(与党 RPF の勝利)

政治体制・内政

- 元首：ポール・カガメ大統領
- 議会：上院（26議席、任期8年）、下院（80議席、任期5年）
- 政府：首相 アナスタズ・ムレケジ（Rt. Hon. Anastase MUREKEZI）
外相 ルイーズ・ムシキワボ（Hon. Louise MUSHIKIWABO）
- 内政：

1962年の独立以前より、フツ（全人口の85%）とツチ（同14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツが政権を掌握し、少数派のツチを迫害する事件が度々発生していた。1990年に独立前後からウガンダに避難していたツチが主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ政権との間で内戦が勃発した。1993年8月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994年4月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ過激派によるツチ及びフツ穏健派の大虐殺が始まり、同年7月までの3ヶ月間に犠牲者は80～100万人に達した。

1994年7月、ルワンダ愛国戦線がフツ過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ）、カガメ副大統領（ツチ）による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999年3月には、1994年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001年3月には市町村レベル選挙を実施、2003年8月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。以後行われた上院（2003年、2011年）・下院議員（2003年、2008年、2013年）選挙の全てで、与党RPFが勝利した。

世銀の「Doing Business（投資環境ランキング）2015」では、全世界189ヵ国地域中46位、アフリカ第3位、東アフリカ共同体（EAC）1位という高い順位を占めている。

二国関係

●政治関係

(1) 日本は、ルワンダが独立した1962年7月に国家承認。2009年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010年1月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは1979年5月に在京大使館を開設。2000年9月に閉鎖したが、2005年1月に再開。

(2) 1994年4～6月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年9～12月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国（当時、現コンゴ民主共和国）のゴマ等に約400名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

●経済関係（対日貿易）（2014年、財務省）

(1) 貿易額

輸出：1億8,877万円

輸入：15億7,837万円

(2) 主要品目

輸出：コーヒー、雑貨

輸入：自動車、二輪、医療関連機械

（上記内容は外務省ホームページより引用 2016年9月現在）

第 1 章

第 15 回本会議 事業概要

第 15 回本会議 概要・活動日程.....	20
------------------------	----

第13回本会議 概要・活動日程

ABOUT 15th CONFERENCE

開催日時・場所

日程：2016年8月1日（土）～8月16日（火）

場所：東京都、群馬県

活動内容

日本ルワンダ学生会議ルワンダ側メンバー4名を日本に招致し、学術・文化交流事業を実施する。日本・ルワンダ両国の学生が共同生活をしながら、各地でフィールドワークや学生会議、一般市民を巻き込んだ交流イベント等を行うことで、両国の草の根レベルの相互理解を促し、また友情・信頼関係の構築を目指す。

今回の事業では、東京・群馬を訪問する。

東京では、「LGBTを通してアイデンティティを考える」と「多角的な視点から日本を視る」の2つの企画を実施する。

「LGBTを通してアイデンティティを考える」では、ジェンダー・セクシュアリティに関する基礎的な知識や、また日本ルワンダ両国におけるジェンダー的価値観（所謂「女らしさ」「男らしさ」）、性的マイノリティの置かれている現状やそこから生じる問題などを学び、比較する。そのうえで、ジェンダーに関するアイデンティティが人々の生活とどのように関係しているのか、そもそもアイデンティティとはなにか、そしてすべての人が自分らしく生きるためにはどうすればよいのか、といったテーマについて、ディスカッションを行う。

「多角的な視点から日本を視る」では、ハンセン病から“差別”“偏見”を考え、「なぜ、差別・偏見が生まれてしまうのか」について、日本、ルワンダ両メンバーで議論、考察する。水族館から学ぶ生物多様性では、水族館を訪問し、海洋生物との触れ合いや海洋生物によるショーを鑑賞する。ルワンダ人メンバーに海洋生物への関心を持ってもらい、生物多様性について日本、ルワンダ両メンバーで議論、考察する。また、ソニー歴史資料館・本社見学をし、日本が世界で戦える分野日について学習する。

群馬県大泉町では、「多文化共生社会」をテーマに活動する。現在日本で最も外国人の居住率が高い大泉町を訪問し、日本の多文化共生の現状を多角的に見て学べる場所は学

び、また問題点も見つけ出し今後の多文化共生社会に向けて私達が何をできるのかルワンダ人学生と共に考える。

事業目的

- ①日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相を紹介することで、両国についての深い理解を得る。また、これは両国の学生が自国について再認識し、理解を深めることでもある。
- ②日本とルワンダの学生が約20日間の共同生活をする中で、友情を育み、信頼・協力関係を構築する。豊かな人間関係を築くことによって、相互理解の第一歩とする。
- ③お互いの国の社会問題に対して理解を深め共に考えることで、主体的に行動できる人材を育むきっかけを作る。
- ④異なる価値観や文化的・歴史的バックグラウンドを持つ日本とルワンダ両国の学生が、学生会議や共同生活等を通じて、異文化を理解・尊重する姿勢や寛容性を身につける場を設ける。
- ⑤当団体内部間での交流だけではなく、市民の方を対象にしたルワンダ人学生との交流イベントや高校生を対象にした合宿型交流プログラム等を行うことにより、日本の幅広い層を対象とした交流と相互理解の促進を実現する。
- ⑥事業終了後の報告書・ドキュメンタリー映像の作成、報告会の開催を通して日本における市民レベルでのルワンダへの理解を促す。また、ルワンダ側メンバーも事後活動を行い、ルワンダにおける日本への理解を促す。

第 15 回本会議 全体スケジュール

実施日	事業内容	実施場所
8月1日(月)	ルワンダ側メンバー日本到着	成田空港
2日(火)	ルワンダカフェ 全体オリエンテーション	東京
3日(水)	学生会議①	東京
4日(木)	アイデンティティ企画オリエンテーション 渋谷男女平等・ダイバーシティセンターアイリス訪問	東京
5日(金)	東アフリカのLGBT 写真展・トークセッション	東京

6日(土)	学生会議②	東京
7日(日)	学生会議③	東京
8日(月)	移動(東京→群馬) 群馬企画オリエンテーション	群馬
9日(火)	丘山産業・商事、大泉観光協会、NO MORDERS 訪問	群馬
10日(水)	まなばる訪問	群馬
11日(木)	群馬企画リフレクション	群馬
12日(木)	休息・東京観光	東京
13日(木)	ハンセン病企画	東京
14日(金)	水族館企画 Future of JRYC	東京
15日(土)	ソニービル見学 ソニーコンピューターサイエンス研究所見学・講話	東京
16日(日)	ルワンダ側メンバー帰国	成田空港

第2章

日本招致活動報告

ルワンダカフェ 24

アイデンティティ企画

アイリス訪問-LGBTを通してアイデンティティについて考える- 27

東アフリカのLGBT写真展・トークセッション 29

群馬企画

労働面から考える多文化共生～勉強会・丘山産業訪問 33

観光協会訪問－多文化共生の現状と行く先－ 36

NPO 法人 No-borders 訪問 38

多目的教育施設「まなばる」訪問 40

東京企画

ハンセン病から「差別・偏見」を考える 43

水族館から学ぶ生物多様性 46

ルワンダカフェ

担当者:美崎絢香

企画概要

日時:8月2日(火)

場所:早稲田大学ボランティアセンター

参加者:日本ルワンダ学生会議メンバー、一般の方17名

企画目的

たいていの方が、ルワンダに対しジェノサイドというイメージを持たれているのではないだろうか。今回はそのようなイメージからではなく、流行や趣味、好きなこと、お気に入りの場所など話しやすいテーマでルワンダについて話し合い、知ってもらうことを目的とする。

日本の学生がルワンダを多角的に知ることで、ルワンダにより一層、関心を持ってもらい、また、同世代のルワンダ学生が現在何を考えているのか、どのような想いで日本と交流しているのかについても感じてもらいたい。

ルワンダ人学生が日本ルワンダ学生会議のメンバー以外の学生とも交流することで、文化や歴史及び日本人の様々な価値観に触れる機会とする。

企画経緯

本企画は第15回本会議における唯一の団体外との交流企画である。弊団体は「相

互理解」を理念に活動しており、本企画もその理念を具現化したものだ。まず、第15回本会議の幕開け企画であり、ルワンダ人学生がより日本のことを知りたくなるようなものにしたいと考えた。また、多くの日本人はルワンダについてジェノサイドのイメージが先立ちし、現在のルワンダの明るい姿やそこで生きる人々についてはあまり知らないように思う。そこで、実際に日本人学生が同世代のルワンダ人学生と交流することで、ルワンダについてより理解を深められる機会にしたいと考えた。

活動報告

企画スケジュール

13:00	開場
13:30	開会
14:00	ルワンダ紹介(学生会議メンバー)
14:30	ルワンダカフェ
	ルワンダ人学生によるルワンダ紹介のプレゼンテーション
15:30	写真撮影

活動内容

開会式の後、それぞれのグループで様々なトピックについて話し合う。その際、ルワンダのお菓子やコーヒー、お茶、日本のお菓子を楽しんでもらう。その後、ルワンダ人学生によるルワンダ紹介のプレゼンテーションへと移る。

テーブルの上には、会話のヒントとしてトピ

ックスを書いたカードや、ルワンダでの写真のアルバムを用意してある。

感想

ルワンダのジェノサイドというイメージとは離れた話し合いをしてもらうためにどのような場を設ければいいのか考えた結果、普段友達と話すような内容を話し合ってもらいたいと考えた。どんなことが好きなのか、ルワンダの学生の中で流行っていることは何なのかなど、こういった場でしか話せない話題を会話してもらうことを目的にすることにした。コンセントの不一致などで計画通りにはことが運ばなかったが、カフェでは参加者がルワンダンとの会話楽しんでいて、トークの交代時にはルワンダン学生が席を交代することを惜しむ方もいらっしやり、ルワンダン学生含め、参加者の方もトークイベントを楽しんでいただいていることを感じた。第15回本会議のオープニングイベントということで、どうなるか心配していたが、参加者やメンバー一同楽しんでもらえて安心した。

初日にして、ルワンダン学生も一般の方との交流を楽しんでくれたようでうれしく感じる。

いろいろと思うように進まないところがあったものの、結果的に参加者全員にこの企画を楽しんでもらえたようで安心した。このカフェを機にルワンダへの新しい価値観を持ってもらえたら嬉しい。



(カフェの様子)



(参加者の皆さんと)

アイデンティティ企画

ABOUT IDENT

活動スケジュール

日時	活動内容
8/4(木)	基礎知識勉強会 アイリス訪問
8/5(金)	東アフリカのLGBT 写真展・トークセッション

活動内容

LGBTQ と呼ばれる性的マイノリティの置かれている現状やそこから生じる問題を、日本ルワンダ両国の文脈で学び、比較する。またそのうえで、ジェンダーに関するアイデンティティが人々の生活とどのように関係しているのか、そもそもアイデンティティとはなにか、そしてすべての人が自分らしく生きるためにはどうすればよいのか、といったテーマについて、ディスカッションを行う。

企画経緯

近年、国際的にLGBTQ と呼ばれる性的マイノリティの存在が社会問題としてとりあげられるようになってきた。日本においては、2015 年、東京都渋谷区にて同性パートナー条例が初めて成立し、大阪府淀川区や愛知県名古屋市などでは性的マイノリティに配慮した独自の政策が施行されるなど、徐々にLGBTQ 理解は進みつつあるものの、政治家による差別発

言や学校教育現場におけるいじめなど、LGBTQ の置かれている状況は決して楽観的であるとはいえない。

一方、隣国ウガンダなどではホモフォビアが起り、反同性愛法が制定されるなど、性的マイノリティを排斥する動きの強いアフリカに位置するルワンダでは、どうだろうか。関心を抱いても、それを発信するメディアは、この場合も少ない。

このような状況にある両国の文化を持つそれぞれの生徒が、それぞれの価値観を共有しあい、客観的に問題をとらえることで、新たな発見はあるはずである。また、ルワンダ、日本という異なる国籍・文化的バックグラウンド、またある意味ではアイデンティティを持つ学生が、国際的に「マイノリティ」だとされている人々の持つアイデンティティについて学び議論することで、つまり、人間としての普遍的な問題について意見を共有することで、相互理解が促進されるのではないかと。このような理由から本企画を提案した。

アイリス訪問

—LGBTを通してアイデンティティについて考える—

担当者:宇田川藍佳

企画概要

日時:2016年8月4日(金)

場所:渋谷ダイバーシティセンターアイリス(〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町23-21)

参加者:日本ルワンダ学生会議メンバー

協力:渋谷ダイバーシティセンターアイリス

企画目的

勉強会においては、企画全体を開催するにあたり必要な知識を日本側・ルワンダ側メンバーで共有する。渋谷ダイバーシティセンターアイリス(以下アイリス)訪問においては、勉強会で共有した知識をもとに、実際に日本施行されている政策について学び、意見を交わす場を設ける。

活動報告

■勉強会

アイデンティティ企画の一日目午前は、LGBTについてディスカッションをするための基本的な知識を日本側学生によるプレゼンテーションによって、またルワンダ人のLGBTに関する意識調査(インタビュー)の結果をルワンダ側学生によるプレゼンテーションによって

共有した。また、最後に不明瞭な点に関して質疑応答を行った。

まず、日本側学生によるプレゼンテーションの内容は、ジェンダー・セクシュアリティ・LGBT(またLGBTはセクシュアリティの一部に過ぎないこと)といった概念や、LGBT政策の国際的な動向、また日本とアフリカのLGBT政策について焦点を当てた。ルワンダ側学生のなかにはLGBTという言葉を目にしたことがなかった学生もあり、質疑応答においてはルワンダ人学生から多くの疑問が寄せられた。例えば、ジェンダーとセクシュアリティの違いはなにか、みずからのジェンダーを形成するものはなにか、といった疑問である。

また、ルワンダ側学生によるプレゼンテーションでは、事前にルワンダ人学生が行ったLGBTに関する意識調査の結果が発表された。意識調査とは、事前に日本側学生が依頼した質問9つに対して、ルワンダ側学生の知人が回答したものである。質問内容は、たとえばLGBTについてどれほどの知識をもち、どのような印象を抱くか、について尋ねるものであった。回答では、データの母数がすくなかったため社会全体に適応可能な結果ではないが、同年代のルワンダ人が、LGBTについて関心がない、またはLGBTのことを知ってはいても理解できないと考えている、ということがわかった。このことより、日本とルワンダの相違点のひとつは、LGBTが社会問題としてとりあげられているかいないかに起因する、この問題に関する関心の有無であると考えられる。

■アイリス訪問

午後は、男女平等ダイバーシティセンターアイリス(渋谷区役所)に訪問し、センター職員の方二名からセンター設立の経緯やその取り組みなどについてお話を伺った。その後、主にJRYCメンバーの質問にアイリス職員の方が答えていただく形での質疑応答の時間を設けた。

まず、男女平等ダイバーシティセンターアイリスとは、渋谷区の運営する「男女平等と多様性社会を推進するための学習・活動・交流および情報提供の拠点となる施設(ホームページより)」である。具体的にはアイリス講座(講演会やワークショップなど)や電話対応を含む相談室の開設、団体活動のための施設の貸し出し、図書館の開設、また広報誌の発行などを行っている。

センター職員の方からは、主に以下の4点についてお話を伺った。:①アイリスの設立経緯(渋谷区パートナーシップ協定の説明と、その制定による施設の目的の変化を含めて)。②LGBTの方が暮らしやすい社会づくりのため、アイリス様が行っていらっしゃる具体的活動の説明。③LGBTの方の反応(活動が実際にどのような効力をもっているか)。④活動のなかで感じる社会の変化、またはまだ解決されていない問題。

その後の質疑応答では、ルワンダ側学生から積極的な質問が相次いだ。例えば、渋谷区の取り組みと政府の政策がどのような関係をもつのか、また渋谷区以外にも多様性社会を促進する政策を行っている行政府が存在するのか、などといったものである。

感想

アイリスへの訪問を通して、ルワンダ側学生からは活発な質問がされ、日本の行政レベルでどのような「ダイバーシティ推進」の動きが行われているのかについて両サイドの学生とも理解を深めることができた点で意義がある活動であったと感じた。



(アイリス職員の方と)

東アフリカの LGBT 写真展・

トークイベント

担当者: 堤谷季里

企画概要

日時: 2016 年 8 月 5 日 (土)

場所: 早稲田大学ガーデンハウス1階

参加者: 日本ルワンダ学生会議メンバー、ダイ
バーシティ早稲田メンバー

協力: 藤元敬二様

企画目的

1. 藤元敬二さんの写真展、トークイベントにより、アフリカの LGBT の現状を知る。
2. ルワンダ人と日本人の LGBT に対する意見を共有し、比較する。
3. 現状を理解することで、個々が問題意識を持ち、これからの LGBT のあり方について考える。
4. 一般の方がルワンダ、さらにはアフリカについて興味を抱けるような機会とする。

活動報告

当イベントの流れは、最初に開会の言葉や団体の説明から入り、まずルワンダメンバーによるプレゼンテーションから始まる。このプレゼンテーションでは彼らに事前に調べていただいた、ルワンダにおける LGBT の現状を発表していただいた。次に、藤元敬二さんのト

ークイベントを行った。このトークイベントは一部と二部に分かれており、一部は藤元敬二さん自身の生い立ちや経験について、二部では藤元敬二さんが東アフリカで写真を撮る際に実際に経験した事、感じた事を「若者」に焦点を当ててお聞きした。イベント終盤には、早稲田大学に LGBT センターを設置する活動をしているダイバーシティ早稲田さんに、大学における LGBT の現状についてプレゼンテーションを行っていただいた。途中で休憩時間、またイベント前後に自由な写真展覧時間を設け、その際にルワンダコーヒーやルワンダのお菓子を振る舞った。

■ルワンダメンバーによるプレゼンテーション

このプレゼンテーションではルワンダの LGBT に関する現状についてルワンダメンバーから発表してもらった。ルワンダでも LGBT は新しい現象ではなく、高齢の方の中には LGBT が存在する事を知っていたと言う人もいたようだ。しかし、宗教や文化的思想により、ルワンダでは LGBT は受け入れられないことが多く、病気や、不道徳的な事であると認識される事が多いようだ。一方で LGBT 当事者の権利は確率されつつあり、性の問題は私的な事であり、国の関連するところではない、と言う者もいるようだ。

ルワンダで具体的に LGBT 当事者を罰する法律はないが、LGBT 当事者が生きやすい環境とはかけ離れている。しかし、LGBT 当事者の権利を求める声も増えてきてはいるようだ。

■藤元敬二さんのトークイベント

このトークイベントは、藤元敬二さんと我々日本ルワンダ学生会議の二者で行った。藤元敬二さんは、発展途上国に暮らす人々の肉体的、精神的な影を主題とした数々のドキュメンタリープロジェクトを作成しており、その中で東アフリカの LGBT に関してのお写真も撮られた。(公式ホームページより一部抜粋)上記の通り、トークイベントは二部に分かれており、それぞれ違った点に焦点を置いた。また、トークイベントは藤元敬二さんのお写真をスクリーンに写しながら、そのお写真に関するエピソードをお聞きする形式で行った。

上記の通り、一部では、藤元敬二さんの生い立ちや自らも当事者である彼の経験をお聞きした。藤元敬二さん自身が自らの性に違和感を感じ初めた頃について、中学生時代であると語り、成長と共に性が芽生え始める小学校高学年から、中学校の頃に自分の性に違和感を覚え始める子が多いのではとおっしゃった。また、藤元敬二さんは大学時代をアメリカで過ごしているが、その理由として、外の世界ももっと見てみたい、知りたいと思った事を挙げた。大学時代をアメリカで過ごした事で、日本とは違う環境に触れ、自身が当事者であることは何も恥ずべきことではない、隠す事ではないと考えるようになり、現在のようにカミングアウトするようになったそうだ。また、ドキュメンタリー写真家を志すきっかけは、自身が様々な国を旅していく上で、メディアに出ていない、注目され

ていない問題に直面し、それを伝えていかなければ、と感じた事だそうだ。実際に藤元敬二さんが現地で感じた事として、メディアと現実との差を挙げられた。実際の LGBT 難民キャンプでは、他の問題のために他国へ移りたい人が、LGBT だと嘘をついている事があり、本当に困っている当事者が助けられない現実があるそうだ。また、ウガンダは以前、反同性愛法があったことから注目があがり、優先して助けられる事が多く、ルワンダ人やブルンジ人などが後回しにされる事もよくあるそうだ。

二部では、藤元敬二さんが現地で見られた事の中で、私達大学生の同じ世代の「若者」について主にお聞きした。現地の LGBT の若者は、家族や友人にもカミングアウト出来ない状態であり、それは家族に知られた場合、家族からもひどい扱いを受け、警察に連れていかれることもあるからだそうだ。大学に通っている当事者のほとんどは友人にもそれを隠し、難民キャンプ内など当事者同士のコミュニティの中でしか公表しないそうだ。また、その背景には、貧困などの問題もあるだろうと藤元敬二さんはおっしゃった。

トークイベントは終始穏やかに進み、藤元敬二さんの明るい性格から、会場が笑いに包まれることもあった。終盤に一般の方からの質問タイムを設けた際には、お写真に関する事、アフリカに関する事などたくさんの質問が上がり、藤元敬二さんもたくさんの質問に快く答えてくださった。

■ダイバーシティ早稲田によるプレゼンテーション

ダイバーシティ早稲田さんは早稲田大学に、「LGBT センター」を作ろうと活動している学生団体で、WASEDA VISION150 Student Competition で「早稲田大学にLGBT センターを！」と提案し総長賞を受賞したところから、その活動は始まった。このプレゼンテーションでは早稲田大学内のLGBTの現状を、クイズ形式を交えてお話いただいた。早稲田大学に通っていないながらも、知らない事ばかりで、大学内の状況を知る事ができた。

感想

このイベントを通して、また藤元敬二さんのお話を聞いた上で私が感じたことは、環境は大きく違っても、LGBTに関する問題は共通点も多いという事だ。日本ではLGBTという理由で警察に連れていかれたりする事例はないかもしれませんが、勉強していく上で、日本でも学校や職場などでいじめや差別を受ける事があったり、家族や友人にカミングアウトしづらい環境があったりすると知り、その点は同じではないかと感じた。実際に東アフリカのLGBT 難民キャンプなどを訪れた藤元敬二さんにお話を伺う事で、日本では情報を得ることが難しい東アフリカのLGBT 環境を知り、比較することができた。

また、ルワンダメンバーにとっても、LGBTは身近な話題ではないので、これを考える良い機会になったと思う。メンバー達が直接藤元敬二さんとお話しすることもでき、イベントの休憩時間を延長したり、退場時間ギリギリになる程一般の方とお話しできたりした事で、一般の

方に少しでもルワンダに興味を持っていただけた。また、ルワンダメンバーも団体以外の日本人と話す事ができていい経験になったのではと感じた。

事前の勉強とこのイベントを終えて、日本、東アフリカ共に、LGBTの方々が暮らしやすい環境には少なくともお互いを知り、理解し合うことが必要だと感じた。まさに相互理解である。受け入れる事ができなくても、まずは理解する、しようとする事で少しでも変わるのではないかと考えた。



(トークセッションの様子)



(お話して頂いた藤元さんと)

群馬企画

ABOUT GUNMA PROJECT

活動スケジュール

日時	活動内容
8/8(月)	事前勉強会
8/9(火)	丘山産業・商事、大泉観光協会、NO BORDERS 訪問
8/10(水)	まなばる訪問
8/11(木)	リフレクション

活動内容

現在日本で最も外国人の居住率が高い群馬県大泉町に訪問し、日本の多文化共生の現状を多角的に見て学べる場所は学び、また問題点も見つけ出し今後の多文化共生社会に向けて私達は何をできるのかルワンダ人学生と共に考える。

企画経緯

「アフリカの奇跡」と言われるまでのルワンダの発展には、ジェノサイド後の和解と共生が鍵となり、今後は平和や共生の継続が課題となる。一方、日本では在日外国人が増え続け、教育や言語、偏見の目などヘイトスピーチを代表とする様々な問題が生じ、共生という観点から日本社会の見直しが叫ばれている。今回は、外国人居住比率が日本で最も高い群馬県大泉町で「多文化共生社会」について考える。大泉

町は10に1人が外国人と言われるほどインターナショナルな町である。そのため、多文化共生に対する取り組みを文化面や教育面、労働面等々で行っている。しかし、それに伴う課題も多く抱えている。

先述の通り、群馬県大泉町は今日の日本で一番の「多文化共生社会」であるが、100%の成功とは程遠い。そこで今回はルワンダ人学生とこれからのあるべき「共生」を現在の多文化共生社会から学びつつ、ディスカッションを通して私達日本人学生、そしてルワンダ人学生から現在大泉町が抱える課題に対する提案もしたい。

労働面から考える多文化共生

～勉強会・丘山産業訪問

担当者:水口あすか

企画概要

日時:2016年8月9日(火)

場所:丘山産業株式会社(〒370-0523

群馬県邑楽郡大泉町吉田 1221

<http://www.okayama-ind.co.jp/>)

参加者:日本ルワンダ学生会議メンバー

協力者:丘山産業株式会社 代表取締役社長

原田良一様、丘山産業株式会社 経営管理部 取締役部長 米澤洋司様、
丘山商事株式会社 取締役業務部長 米澤孝史様、丘山産業株式会社 社員の皆様

企画目的

日本の外国人雇用について実際に外国人の直接雇用を行っている企業を訪れ、労働面から多文化共生社会についてお話を伺う。日本の近い未来の縮図とも言われる群馬県大泉町で外国人雇用の取り組みを受けて、ルワンダ人と労働面から見る「共生」について議論する。

活動報告

■丘山産業株式会社とは

主に新幹線のグリーンシートを一貫生産して

いる会社である。

117名の従業員のうち約10%が外国人と、非常に外国人の労働者の割合が高い。また、外国人労働者の約10%がブラジル人である。

■会社の沿革

1987年 人材派遣会社経由で外国人の雇用を開始

1989年 入国管理法が改正され、日系人の直接雇用が開始。丘山産業株式会社が事務局となり、東毛地区雇用安定促進協議会を発足。

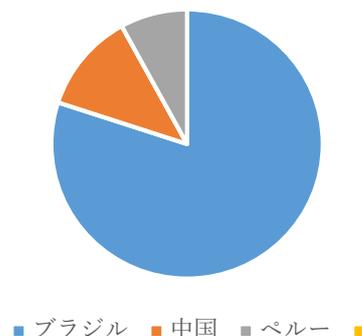
1999年 東毛地区雇用安定促進協議会を解散。

2007年 中国人技能実習生の受け入れ開始。

東毛地区雇用安定促進協議会とは、大泉町の中小企業経営者を中心とし、32社が集まり1989年に設立された団体。慢性的な労働不足を解消するために作られた。

■数字から見る丘山産業株式会社

全社員における外国人労働者の国籍別の割合



上の表からも分かるようにほとんどがブラジル人である。そのため、服装のポスターが日本語に加えて、ポルトガルでも表記されていた。また、組み立てが合っているか確かめるチェックシートもポルトガル語バージョンが用意されていた。

7年3カ月 直接雇用外国人の平均勤続年数。

23年10カ月 直接雇用外国人の中で最も勤続年数が長い方。

41歳2カ月 直接雇用外国人の平均年齢

13% 直接雇用外国人社員の役職者率

8% 会社内の女性の割合

2/11人 日本の公立学校へ自分の子どもを通わせている外国人社員の割合

2/13人 日本で家を建てた外国人社員の割合

■外国人雇用の際に重視していること

→スキルや技術よりも、日本語能力を最も重視している。

■給料に日本人と差があるのか

→日本人労働者は固定だが、外国人労働者は時間給。そのため、25歳の場合日本人労働者より外国人労働者の方が給料は高くなる。しかし、日本人労働者は年齢とともに給料が上がり、ボーナスもあるので結果として日本人労働者の方が給料は高くなる。

■外国人労働者の方のお話し

17歳で丘山産業株式会社に就職し、溶接や

オペレーターを行う社員さん。両親はブラジル人だが、日本の方が暮らしやすいためこのまま住み続けたいと話していた。ほとんどの外国人労働者は日本の技術を学びに来たのではなく、出稼ぎとして来ているようだ。

統括

現在、外国人の直接雇用を行っている丘山産業株式会社様の取り組みについてお聞きすることができ非常に興味深かった。新幹線のシートを製造している工場まで見せて頂き色んな人が共に働いていることがよく分かった。多くの企業が外国人に対して間接雇用を用いている一方、丘山産業株式会社様は直接雇用を用い、日本の先進的な雇用を行っていると分かった。丘山産業株式会社様では、会社へのモチベーションを上げるために直接雇用を行っているという。労働面においては法律の問題が絡みなかなか日本人、外国人が対等な立場で働くことはまだまだ難しいが、丘山産業株式会社様のような考えを持つ企業が増えたら嬉しく思う。また、ブラジル式のバーベキューイベントを開くなどし、家族を巻き込んで交流の機会を設けていることにも魅力を感じた。

最後に、今回の企画の承諾をしてくださり、準備段階からご協力くださった全ての方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

感想

■日本人学生 A

直接雇用でなるべく外国人との壁をなくす努

力をなさっていたが、給料や保険制度、また職場環境が思った以上に日本語が多く、外国人労働者にはなかなか厳しい状況だと感じた。日本語ができなければ雇ってもらえないというのも一つは当然のことではあるが、彼らには大きな壁であると思う。

■日本人学生 B

日本が海外に誇れる新幹線の座席を外国人移住率の高い大泉町でブラジルや中国、ペルーからの移住者を雇用し製造しているという事実を多くの日本人は知らない。そのため、もっともっと発信していく必要があると思った。ルワンダ人の学びと同様、それ以上に勉強になる時間だった。親切な対応をして頂いた丘山産業株式会社様、米澤孝史様には心から感謝したい。

■ルワンダ人学生

多文化共生社会について初めて考える機会になった。日本では多文化共生社会の実現がまだまだ難しいとわかった。しかし、国籍にとらわれず、異なる国の人と共に生きていくことは以上に大事だと思う。日本は人口が減っているので将来的には外国人の力を借りる必要がある。だからこそ、丘山産業株式会社様の取り組みは広げていくべきだ。



(丘山産業株式会社の皆様と)



(講義の様子)

観光協会訪問

—多文化共生の現状と行く先—

担当者:林陸

企画概要

日時:2016年8月9日(火)

場所:カサ・ブランカ(〒370-0532 群馬県邑楽

郡大泉町坂田 4-18-1)

大泉町観光協会(〒370-0523 群馬県

邑楽郡 大泉町吉田 2467)

参加者:日本ルワンダ学生会議メンバー

協力:大泉観光協会 副会長 小野修一様、

事務スタッフ 富樫ジュリアナ様、上毛新

聞社記者 寺島努様

企画目的

1. 日本一多文化共生が進んでいるという、大泉町の多文化共生の現状・課題を知る。
2. 大泉町の現状を踏まえて、今後の多文化共生社会の在り方、またその社会へと私たちが出来るアプローチを考える。

活動報告

■概要

日本国全体の外国人比率、1.3%。特にアメリカ系の国民は非常に少なく、ルワンダ人メンバーと町を歩いているだけで時々住民の方の視線を感じることも少なくない。外国籍を持つ住民への参政権、ヘイトスピーチなど今でも在

日外国人に関する問題は山積している。その一方で多文化共生をまさに体現している町が大泉町である。2016年5月末の時点で、町全体の外国人比率は全国の市区町村の中で1位の16.7%。町を歩けばその数字にも納得がいく。南米・アジア各国を中心に、総人口4万人の小さな町に54カ国の国民が同居している。この企画では、数万人規模のサンバイブなどを通じて大泉町の多文化共生を牽引している大泉町観光協会の副会長の小野修一氏に話を伺った。

■大泉町観光協会

2007年に大泉町商工会と併設するかたちで設立された。長らく続く不景気に対する地域振興の起爆剤としてブラジル文化を「観光資源」として活用し、観光客を増やすために民間によって運営されている。毎年開催している「大泉カルナバル」は観光協会設立のこの年、来場者を昨年約7倍に増やしている。ほとんど毎月「活きた世界のグルメ横丁」も開催しており、これらのイベントは観光客の誘致だけでなく、住民同士のつながりの創出にも一定の役割を果たしている。

■小野氏のお話しの概要

大泉町が多文化共生の成功例と言われる所以は歴史的に外国人居住率が高かったことが大きい。第二次世界大戦中は中島飛行場があり、在日朝鮮人が少なからず兵役のために大泉町に在住していた。戦後、富士重工や三洋電機の工場の誘致に成功するとこれらの企業は高度経済成長期に人手不足に陥り、新たな

若い労働力として日系ブラジル人に白羽の矢を立てた。以来大泉町とブラジルとのパイプはとて強固なものとなり一番多い時には 5000 人ものブラジル人が大泉町に居住していた。このようにして外国人居住率はかなり高いが、だからと言ってそれが多文化共生社会とは言えない。日本人と外国人の居住地は文字通り「棲み分け」られているし、住民とのトラブルもないわけではない。大泉町は多文化共生を達成した町ではない。多文化共生の道の中にいる町なのである。

そもそも「多文化共生」という言葉を使っている時点で「多文化共生」は達成されない。外国人と認識することで壁を作ってしまうのが根本的な問題なのである。外国人犯罪が起こると殊更大きく取り上げられ、外国人は危険だというイメージが作り出されてしまう。何々人と区別するのでなく、同じ人間として。個人レベルでの人間関係の構築が近来軽視されがちだが、このような人間関係を築けるかどうか、次の世代の多文化共生の可否を分ける要因の大きな一つになるだろう。わざわざ「共生」するのではなく、ただ、共に生きるのが本当に「多文化共生」を目指すのなら重要になるのではないだろうか。

感想

多文化共生社会を目指そう、という目標の立て方自体がナンセンスなのかもしれないと小野氏の話をして感じた。国籍を抜きに一人の人間として扱うのは簡単なことではないであろうが、個人レベルでの人間関係を通じてその

輪を徐々に広げていくこと。それが究極の共生であり、大泉町観光協会のゴールであると思う。私たち日本ルワンダ学生会議の理念である相互理解もこのようなかたちでの共生の中で達成されるのではないだろうか。

NPO 法人 No-borders

訪問

担当者: 田中瑞幹・安居綾香

企画概要

日時: 2016年8月9日(火)

場所: NPO 法人 No-borders

参加者: 日本ルワンダ学生会議メンバー

協力: NPO 法人 No-borders 様、大泉町観光協会 様

企画目的

日系ブラジル人の住民が多く、第二世代、第三世代と住民のアイデンティティも様々になってきている大泉町において、日系ブラジル人の子供たちが置かれている状況について交流を通して理解すること。

活動報告

■NPO 法人 No-borders について

大泉町、太田市をはじめとするその周辺の住民(国籍問わず)の生活の質の向上を目指して2016年に設立され、様々なイベントや地域交流会に参加することで地域活性化に貢献していらっしゃる。特に大泉町に多く住む日系ブラジル人の子供たちに向けての活動が多い。具体的には、言語の違いから学校の授業についていけない子供たちの勉強の補習や宿題

のサポート、翌日の学校の準備をされている。また、日本語の補習授業、ポルトガル語、英語、その他の語学クラスを設置している。

■交流内容

私たちが伺ったときは、夏休み期間であったため、子どもたちは夏休みの宿題を頑張っていた。その後のレクリエーションの時間の中で子供たちと交流することになった。

まず、ルワンダ人メンバーによるルワンダ観光PRビデオを使ったルワンダ紹介を行った。子どもたちはみな千の丘が広がる雄大な景色や迫力満点のマウンテンゴリラに惹かれていた。その後は自由に遊ぶ時間を取っていただき、子どもたちとの会話の時間を設けた。ポルトガル語のみ話す子、両言語話す子、少し英語もできる子、子どもによって使用言語は様々だが、子どもたち同士ではポルトガル語で会話している場面が多かったように思う。言葉は通じなくとも、遊びやお土産のルワンダキャンディーを通じてコミュニケーションを図ることができた。そして最後には、子どもたちが一生懸命「WAになって踊ろう」のダンスを披露してくれた。

■宮崎様とのお話し

交流後、No-borders 代表の宮崎マルコ様にお話しを伺った。ご本人も No-borders に通う子供たちと似たようなバックグラウンドを持っていらっしゃる、伺った内容はいずれもリアリティ溢れるものだった。

大泉町の小学校では日本語サポートクラスが授業時間に設けられているが、そのクラスに参加した時間分の通常授業にはおいていか

れてしまうなどの課題、また日本の国籍主義に関するお話を伺った。No-borders に通う子供たちはそれぞれ夢を持っており、中には大泉町役場職員、警察官などの身近な公務員になりたい子もいる。しかし、日本で育っても国籍の問題からなることができなく、高校・大学に進む子も少ないため、大泉町の工場に勤める道を選ぶことが多い。そこで、宮崎様をはじめとするNo-borders 様が子供たちの可能性を少しずつ広げていらっしゃるのお話をいただいた。



(No-borders に通う子供たちと)

感想

今回私たちは、外国籍の子供たちの将来の選択肢の幅を狭めている日本の現状を学ぶことができた。私たちが交流した日系ブラジル人の子供たちは2か国語を話し、ブラジルと日本の両国をよく知っている。将来、彼らこそが日本における多文化共生社会の大きな担い手となるのではないだろうか。



(活動の様子)

多目的教育施設

「まなばる」訪問

担当者: 西野由花

企画概要

日時: 2016年8月10日(水)

場所: 多目的教育施設「まなばる」(群馬県高崎市山名町1581)

参加者: 日本ルワンダ学生会議メンバー、まなばるに通う生徒、保護者の方々

協力: 「まなばる」代表 太田琢雄さん、国際比較文化研究所職員の方々

企画目的

本企画の目的は異なる文化、生活習慣を持つ人々がどのように分かり合い、協力しあうきっかけとすることができるのかを考えることである。

「まなばる」は国際交流を主軸に据え、英語教育を行う多目的教育施設である。実際に新しい言葉や文化にふれ、寛容さを養うその姿勢は日本ルワンダ学生会議の理念と共通するものがあり、そのような理念を実際に教育の現場で行う人々のお話を伺い、自らも教育に触れることで、実践的な課題としての多文化共生に向き合うために、この企画を提案した。

文化やアイデンティティの差異はそれだけでは大きな争いを生まないが、時に悲劇的な結果を生むこともある。そのような結果を生み出

す要因としてあげられるのがプロパガンダや教育である。

今回、この組織への訪問を通して教育の必要性と危険性を学ぶことで、ルワンダ人側にはジェノサイドの要因やジェノサイドを知らない後世への影響や今後広がるだろう。グローバル化への対応を考えてもらうきっかけとして、また日本人側参加者にも従来の単一民族国家的価値観の残る日本社会において、どのように多文化共生を実現していくべきかについて再考してもらいたいと思う。多文化共生において最も大切なものは相互的な信頼、尊重の関係と考えるが、それを持つ手段の一つとして交流、教育の観点から力を入れている国際比較文化研究所と教育機関「まなばる」のお話を聞くことで、ルワンダ人と日本人という異なる文化を持つ者同士で文化共生プロセスについて議論を交わす機会をつくる。

活動報告

■事前準備

まず、群馬企画初日にまなばるについての基礎知識の共有と、当日行うミニレッスンのための準備を行った。ミニレッスンでは参加者の英語の習得度に左右されず、生徒たちが実際に参加でき飽きさせることのないものでかつルワンダ特有の文化として、ルワンダ語の英会話をを行うこととした。

実際に企画内で使う文章から学生会議メンバー内で作成をしたが、参加者の年齢を考慮し、複雑な文章や文法を使うものは避け、日本国内での日常生活でも気軽に使える簡単なフ

レーズなども盛り込むという作業を共同しておこなうことによって、文化を伝える対象を意識しながら、より効果的に相手にこちらの文化を受け入れてもらうための工夫の必要性を実感した。

■運営、組織面から多文化教育について考える

群馬企画当日はまず生徒たちを招く前にまなばるを運営する国際比較文化研究の職員であり、またまなばる代表の太田琢雄さんと、国際各文化研究所に所属する二名の方、そして日本ルワンダ学生会議メンバーで多文化教育を推進することの教育面での課題や意識についての質疑応答を行った。質疑応答では、日本の伝統的な減点方式の義務教育が子供に与える精神的影響が今日の日本の異文化への対応にも表れているのではないかという意見や、日本人の respect の精神は果たして十分なものといえるのかといった面でルワンダ人側の認識と日本人側の認識の違いが出るなど、活発な議論が展開された。

■昼食

昼食はまなばるの近隣に店を構えるパン屋のパンを食べる立食形式で行い、この時間からまなばるに通う生徒や保護者の方々にも参加していただいた。いきなり授業形式の企画にするのではなく、初めに会話の時間を設けることで、ルワンダ人メンバー、日本人メンバー、まなばるの子どもたちとの垣根もなくなり、話を聞いてくれる姿勢がみられるようになったことは、一方的な伝達のみではなく、対話するという機

会が多文化教育の上で重要な要素を含んでいるのではないかと気づくことができた。

■授業

前半はルワンダ語の授業、後半はルワンダダンスの実践を行った。ルワンダ語英会話は、4つのグループに分かれルワンダ人一人ひとりが教師の立場で教えるという形式をとったが、その結果生徒一人一人がルワンダ人メンバーと多く対話をする機会を持てたと思う。



(活動の様子)



(まなばるの生徒の皆さんと)

ハンセン病から 「差別・偏見」を考える

担当者: 渡邊 伶

企画概要

日時: 2016年8月13日(土)

場所: 国立ハンセン病資料館

参加者: 日本ルワンダ学生会議メンバー

協力: IDEA ジャパン代表 森元美代治様

企画目的

1. ハンセン病とその歴史、社会的に抱える課題について理解を深める。
2. 現在でも存在する、ハンセン病患者に対する差別・偏見について知り、それらが形成された理由を日本人、ルワンダ人両メンバーで、議論、考察する。

活動報告

ハンセン病ガイダンスビデオの視聴、元患者の森元美代治さんとの対話、ハンセン病資料館の見学を実施した。以下、その概要を記載する。

【ガイダンスビデオ】

ハンセン病ガイダンスビデオは、国立ハンセン病資料館が作成している、40分程度のビデオで、

ハンセン病の歴史やハンセン病患者の受けてきた苦悩が描かれている。

ハンセン病は、らい菌が原因となる感染症で、今では完治する病気である。しかし、その見た目や、社会の無知、誤解等によって、差別や偏見の対象となり、療養所に隔離されてきた。昭和28年に、らい予防法が施行されてから、社会の差別や偏見がさらに強くなり、それは、らい予防法が廃止された現在でも残っている。

【森元美代治さんとの対話】

森元さんは、中学3年の際にハンセン病と診断され、以降療養所で長い間暮らしておられた。一度は、大学に入り、就職もしましたがハンセン病が再発し、再度多摩全生園に入園された。

その後は、ハンセン病に関しての経験を通じた「生きること」について、国内外で多数講演されています。ビデオガイダンスで得た知識を元に、参加者が森元さんに質問をし、森元さんのご経験、差別や偏見に対しての考えをお伺いした。

【ハンセン病資料館見学】

展示エリアは、「ハンセン病の歴史」「癩療養所」「生き抜いた証」に分かれており、それぞれ当時の文献や映像、状況の再現模型が展示されている。

以下、それぞれのエリアの概要である。

「ハンセン病の歴史」

患者収容が始まった経緯・隔離の強化・らい予

防法廃止の流れ等

「癩療養所」

療養所の衣食住・癩の治療・療養所内の秩序維持・療養所の中の学校・社会の偏見

「生き抜いた証」

不治から可治へ・医療の進路・日本のハンセン病療養所の今・海外のハンセン病・

共存、共生を目指して

感想

■日本人メンバーA

ハンセン病について詳しく知る技術のなかった時代に、隔離などの政策がとられたことは、もしかしたら仕方がないことなのかもしれない。けれど、技術が発展し、知識を得ても尚、以前と同じような対応を続けたことは許されることではない。けれど日本人、日本政府が偏見によって、人権を犯す可能性、犯している可能性があるのかもしれないと思う。一度根付いた偏見を取り除くことは大変であるかもしれないが、私たちはそのことについて常に考えていかなければいけないと思った。

■日本人メンバーB

既に完治しているにも関わらず、後遺症のために社会で自立することが難しかったり、まだ人々の目が“偏見・差別の目”であったりすることが原因だと知り、法が廃止されたからといって解決する話ではないことを改めて感じた。

■ルワンダ人メンバーA

私は、差別や偏見は“遠い未来”消えると思う。

しかし、そのためにはハンセン病に対する教育や気づきが不可欠です。だから私自身、ハンセン病についてもっと詳しく知る必要がある。

■ルワンダ人メンバーB

私は今までルワンダでハンセン病患者の人に会ったことはない。本やインターネットで見たことが会った程度だった。ハンセン病のビデオを視聴し、日本での差別や偏見にひどくショックを受けた。

私はルワンダでのハンセン病のことをあまり知らないが、日本のように、差別や偏見を受けているのであれば、ひどくショックである。ルワンダに帰って、リサーチしてみようと思う。

企画者感想

ルワンダとハンセン病。一見、繋がりのないように思えるこの企画の実施に思い至ったのには、きっかけとなったある出来事がある。2015年11月13日フランスで起きたパリの同時多発テロである。130名を超える死者数を出したこの出来事に、当日の私は”なんとも言えぬ感情“を抱いていた。

“共生“について日本ルワンダ学生会議で考えてきて、かつ大学のゼミでも勉強してきてはいたが、いざ、ここまで大規模なテロを目の当たりにして、人はわかりあうことはできないのか、共生は難しいのか、など無力感を感じていた。(もちろん、フランスの事件は規模が大きかったもので、テロは世界各地で起きてしまっている)移民をしてきた人と、元々その国にいる人、もちろん経済的な面等もあるのだと思うが、

そもそもそれ以前に分断されているのではないか。お互いの状況、お互いの想いを知らぬまま、分断が起きているのではないか。その要因の一つは、一度できてしまっている移民の人たちに対する“偏見“があり、それが取り除かれないままであるのではないか、そこから本企画のテーマである”偏見・差別はどのように作られるのか“”一度できてしまった偏見・差別を取り除くことは困難なのか“を考え始めた。(もちろん、移民問題には様々な要因があり、一つの視点からでは解決を図ることは難しい)そんなことを考えていた際に、思い出したのがハンセン病であった。昔からその見た目などによって、差別や偏見を受けていたのが、らい予防法によって「認定」され、「強化」されてしまった。そしてその偏見は治療法が確定された現在でも残ってしまっている。ハンセン病を通して、差別や偏見について考えたい、またジェノサイド時に民族対立を抱えていたルワンダ人と考えたい、そう思い企画に至った。実際に企画をしてみて感じたことは、「恐れ」と「無知」である。「無知」という言葉が強いが、要は「知らないこと」である。得体の知れないものを見た際に、一般的に抱く感情は「恐れ」ではないか。この「恐れ」自体は、悪いことではなく、一種の防衛本能であろう。問題なのは、その理由もなく「恐れ」が継続してしまうことである。私は、対象物に関する十分な知識を得ることで、それが何か分かり、やっと安心することができると思う。しかし、その「知識を得る」段階に行く前に、恐れを抱いたままになってしまうのではないか。私自身、ハンセン病という名前や、その見た目のみを見ていた際は、「恐れ」を抱いていた。し

かし、たまたま友人にハンセン病を勉強している人がいて、その人から詳しく話を聞くことで、その「恐れ」は消えていった。全ての国民がハンセン病に対する知識を得ることができれば、その偏見や差別はなくなるかもしれない。しかし、それは難しいこと。では、どうすればよいのか。その明確な答えは本企画を通して出すことはできなかった。しかし、大切なのは考え続けること、忘れないこと。綺麗事のようにになってしまうが、私は考え続ける。



(お話しして頂いた森元さんと)

【参考】

ハンセン病資料館 HP (<http://www.hansen-dis.jp/02exb/standing> 2016年9月18日アクセス)

水族館から学ぶ

生物多様性

担当者:柳田瑞季

企画概要

日時:8月14日(日)

場所:しながわ水族館

参加者:日本ルワンダ学生会議メンバー

企画目的

1. ルワンダ人は希望訪問箇所のひとつとして水族館を挙げており、生物多様性に興味を寄せている様子であった。様々な海洋生物を観察しその生態を学ぶと共に、自然環境に対する意識をより高めるきっかけとする。
2. 種の保存や環境問題の周知に取り組む施設としての水族館の意義について考える。日本人側も、ルワンダ人と感想や意見を共有する中で、生き物を守るために人間がすべき役割について改めて考える。

企画経緯

ルワンダは内陸国であり、四方を海に囲まれた日本と比較すると海洋生物があまり身近ではない。だが、近年起こっている海洋汚染問題とそれに伴う生き物の減少の問題は、人類全てが向き合うべきものである。ルワンダ人に、普段の生活では見ることのない生き物に触れ

てもらい、共に生物多様性について考えたいと思ったのが企画を提案した理由だ。日本には150以上の水族館や動物園があり、それぞれが希少動物の保護を目的とした様々な取り組みを行っている。しながわ水族館もそのひとつであり、生き物たちが生息地外でも生きていける環境を整えると共に人々に生物多様性についての学習の場を提供している。クラゲの展示や世界の珍しい魚の飼育を行っており、絶滅危惧種に指定されている魚の繁殖に成功した実績もある。また、当水族館は今年3月からタッチパネル式のデジタルサイネージの運用を始めており、フロア案内や生き物の解説の多言語配信を行っている。ルワンダ人と共に、楽しみながら環境について学ぶ場として最適なのではないかと考えた。

活動報告

当日は朝10時過ぎに大井町駅に集合し、無料送迎バスで水族館へと向かった。まず始めに一日のたまかなスケジュールを説明し、一時解散し自由行動とした。1時間の自由行動では、ルワンダ人一人ずつに日本人メンバー数人が付き、共に生き物やショーの鑑賞をした。ルワンダ人は、普段目にする事のない海洋生物の生態に非常に興味を持っていた様子で、熱心に水槽の中を見つめていた。

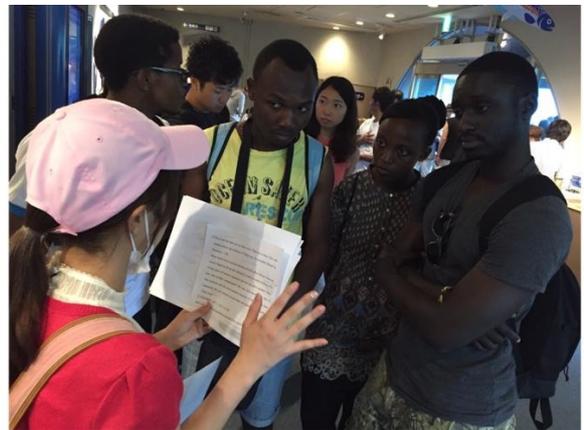
自由行動の後に再度集合し、「生物多様性を実感する」という企画目的にふさわしい展示を紹介し、その場でイラストを用いた簡単な解説を行った。最初に案内したのは「東京湾の干潟と荒磯」というコーナーである。ここでは、

東京湾沿岸を模した水槽に実際に湾に生息するカニやゴカイ等の生物が飼育されている。干潟の埋め立てによって生物たちの棲み処が汚染された歴史を紹介し、現在は自治体の努力によって環境が改善されていること、そして小さな生物の命を守るためには我々人間一人ひとりが環境保護への意識を高めなければならないということを説明した。続いて、絶滅危惧種に指定されているムサシトミヨの水槽の前へと案内し、水族館施設が持つ重要な役割について解説を行った。水族館や動物園が持つのは、娯楽施設としての一面だけではない。種の保存や環境教育を重要な役目の一つとして掲げている。ルワンダンは、自分の国にはない水族館や動物園といった施設の持つ存在意義について、特に関心を抱いている様子であった。解説するコーナーとして最後に選んだのは、「共生水槽」である。この水槽では、インギンチャクとクマノミ、テッポウエビとハゼが文字通り共に助け合いながら生きている。異なる種同士が生活を共にし、互いを守りながら生活している様子は、「生物多様性」を学ぶにふさわしいものであったのではと考える。

その後、再び自由見学時間を設け、最後は名物であるイルカショーを鑑賞した。施設を存分に楽しみ、そして多くのことを学んだ後、それぞれの意見を共有するためディスカッションを行った。その際、施設を訪れた感想を述べ合うだけでなく、「魚たちを本来の生息地から離れさせ、人間の管理の下で生活させていることについてどう考えるか」という観点からも話し合った。ルワンダン、日本人双方から出た意見は、「人間が生き物の生活環境を管理する

ほうが、自然にいるよりも安全に生活できるため、『種の保存』の点においては有意義なのではないか」というものである。だが、ある日本人メンバーが「突然見知らぬ環境に連れてこられ、好きでもない相手と結婚して子孫を残さなければならなくなった魚の気持ちを考えると可哀想に感じる」と意見を述べたところ、一人のルワンダンは「魚は人間のように夢などを持っている訳ではなく、生きること、子孫を残すことしか考えていないはずだ」と反論していたのがとても興味深かった。

この水族館企画を通し、小さな生物の命の大切さに目を向け、また水族館や動物園といった施設の存在意義を共有することができたのではないかと考える。ルワンダンからの新鮮な意見や感想によって、企画はより充実したものとなった。



(活動の様子)

企画者感想

この企画を考えた当初は、単なる観光になってしまうのではないかと危惧が自分の中に

あり、またメンバーからもエンターテインメント性を重視しすぎなのではないかという指摘を何度か受けた。そのため、水族館という一般的には娯楽施設と呼ばれるスポットをいかに「学びの場」に変えるかが、企画を練る上での重要なポイントとなった。ただ魚を鑑賞するだけでなく、「生物多様性」という観点から共に学びを深めるのはどうか、というのはメンバーからの助言の1つであった。また、調べる内に水族館や動物園施設の重要性が提言されているということを知り、このことも企画の重要なテーマに据えようと思いついた。

直前まで準備を終えられなかったこと、更に前日に体調を崩したことでメンバーには多くの心配と迷惑をかけてしまったが、無事に終えることができ安心した。そして何よりも、企画を心から楽しんでくれ、ディスカッションでも積極的に意見を出してくれたルワンダメンバーのおかげでより充実した1日にすることができ、本当に感謝している。



(しながわ水族館にて)

SONY

～ハイテクの最先端を見る・聞く・学ぶ～

担当者：鍵渡紀彰

企画概要

日時：8月15日（月）

場所：ソニービルディング（東京都中央区銀座5-3-1）、ソニーコンピューターサイエンス研究所（東京都品川区東五反田3-14-13 高輪ミュージズビル）

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

企画目的

招聘したルワンダ人メンバーが希望していたソニーの事業についての歴史、そしてルワンダが国をあげて伸ばそうとしている情報技術についてそこで働く人に直接話を聞き自分の目で見ることで学び、その業界で働くことについて考える。日本が海外に誇れる商品なので、日本人メンバーがソニー・ソニーの技術について理解を深めることも重要である。

活動報告

企画の前段階からルワンダ人メンバーがソニーを訪問するにあたりソニーの歴史、製品、会社情報などについて調べてきてプ

レゼンテーションという形で事前学習を行った。



（プレゼンテーションの様子）

当日の午前中はソニーの最新商品の技術を体験できるソニービルを訪問した。ルワンダでは現在、インターネットやITの分野を成長させる政策や方針がとられており、ルワンダ人学生も日本の情報技術の最先端に行くソニーの製品に関心を示していた。特にショールーム内にあった照明も兼ねたスピーカー、卓上プロジェクターなど私たち日本人でさえ知らないような画期的な新製品が特に彼らの関心の対象であった。

午後は実際にソニーの新製品開発等のための研究施設であるソニーコンピューターサイエンス研究所を訪問し、研究開発の目的・意義、研究所の効率的な運営システムやこれからの情報産業の展望まで、研究者としての実体験を交えながらお話しいただいた。西川さんをはじめ実際に研究をしている研究者の方の話を伺う機会はルワンダ人メンバーには今までほとんどなかったようで、様々な質問が投げかけられたことからソ

ニーに代表される情報産業への関心の高さが窺える。また、特別に研究所内をツアー形式で見せていただき、あるルワンダ人メンバーはルワンダの研究施設と比較し、日本の研究所の進んでいる設備、運営システムを自国の研究所にも導入して活かしていきたいと語っていた。



(活動の様子)



(3Dメガネをかけるルワンダ人メンバー)

第3章

学生会議 概要.....	51
--------------	----

日本側プレゼンテーション

ユマニチュード	52
豊かな高齢社会	55
障害と出生前診断.....	57
リーダーシップ	59

ルワンダ側プレゼンテーション

WOMEN IN RWANDA POLITICS	61
Immigration and Residence in Rwanda.....	64
THE MIGHTY DRUM	66
Rwanda	68

学生会議 概要

ABOUT STUDENT CONFERENCE

実施日

2016年8月3日、6日、7日

活動内容

日本・ルワンダ両国の学生がそれぞれ興味・関心がある分野や社会問題などからトピックを決め、プレゼンテーションを行い、そのトピックに関連したディスカッションや意見交換を行う。

活動目的

団体の活動理念である相互理解を念頭に、同じ学生という対等な立場から、様々なテーマに就て深く考え、互いの意見を尊重しつつディスカッションをすることで、互いの国についてより理解を深める。

活動成果

1. 互いの国に対する深い理解。
2. 異なるバックグラウンドを持つ学生同士の、異なる価値観や考え方との出会い。
3. 団体の将来について、日本側・ルワンダ側双方の真剣な議論。

ユマニチュード

発表者:岩垣梨花

発表日時:8月3日(水)

プレゼンテーション概要

近年、認知症の新しいケア方法として注目を浴びているフランス発の「ユマニチュード」。その具体的な技法を紹介するとともに、高齢化に伴う認知症高齢者の増加に直面している日本の現状、そして認知症高齢者の存在が社会でまだまだ表面化していないルワンダの現状について、両国の学生がお互いの経験に基づきながら意見交流を行った。

実施目的

2012年の調査では、65歳高齢者のうち、認知症を発症している人は約462万人であると言われている。これは高齢者の4人に1人が認知症症状を発症している計算である。また政府の推計では、2025年には認知症高齢者が700万人まで増加すると発表されている。超高齢化社会をひた走る日本に住む私たちが、認知症患者のケアは大きな社会課題といえるだろう。

ルワンダの福祉制度について不明瞭な部分をルワンダ学生に説明してもらうことで、理解を深めることも一つの目的である。

両国の社会が抱えているにも関わらず、つい見落としてしまいがちな社会課題について、改めて深く考える時間を設けることで、

社会福祉の普遍性に気づき、両国共通の社会問題に関心を持つきっかけになると考え、本テーマを選択した。

プレゼンテーション詳細

1.イントロダクションゲーム

学生会議初日であったことからアイスブレイクの意図も含めて、認知症特有の症状について理解を深めるゲームを行った。

ゲームはまず、隣の席の人とペアを作る。そして一人一枚ずつ動作の指示が書かれた紙を引く。ペアのうち一人は指示された通りの動作を行い、もう一人は動作を行っている相手に対して1分間の自己紹介を行う。指示動作は「同じことを何度も繰り返す」「相手を叩く(優しく!)」「暴言を吐く」「部屋を動き回る」「相手の言葉に関心を持たない」など。これらはすべて認知症特有の症状である。



(ゲームを行う学生会議メンバーのプレイズ)

その後、ゲームの感想を自由にシェアしてもらう。

2. 認知症についてと周辺症状

認知症は脳の障がいによって引き起こされる病気であり、その症状は「今まで関心を持っていたことに関心を持たなくなる」「同じことを何度もいう」「睡眠障がい」「不安障がい」「深夜徘徊」「暴言・暴行・威嚇・嘔みつき」等である。このような症状から介護者はストレスをためるようになり、結果的に身体拘束や虐待など、介護問題を引き起こすことにも繋がる。

3. ユマニチュード

このような認知症高齢者の症状を改善する方法として確立されたのが、ユマニチュード技法である。ユマニチュードは1970年代にフランスの哲学者ジェネストによって確立され、優しさを感情に訴えかける技法であると言われる。ユマニチュードは「目を見つめる」「触れる」「話す」「立って歩く」の4つ基本動作を基礎としており、150以上の具体的な技法が存在する。ユマニチュードを実践することによって症状が劇的に改善する例が見られることから、「魔法のよう」と紹介される場合も多い。

ディスカッション

メンバー各自が自分の実体験に基づいた意見を共有する時間となった。

・ルワンダで認知症のおばあさんに出会ったことがある。彼女は僕に「こんにちは。どこから来たの？なにをしているの？」と挨拶をした後、トイレに向かった。戻ってきた彼女は僕に再び同じ質問を投げかけた。「こんにち

は。どこから来たの？なにをしているの？」彼女は同じことを何度も繰り返していた。それでいて彼女は幸せそうに見えた。僕は彼女と何度も同じ話をした。彼女とは友達になった。

(Blaise)

・以前、こんな家族に出会ったことがある。その家族は、自分の母親について理解していなかった。何度も同じことを繰り返す彼女に、ある人は失礼な態度で接していた。またある人は彼女のことを笑った。家族も親戚も、彼女の態度を理解していなかった。でも今ならわかる。彼女は病気だったのだ。今、私はその家族が彼女のことをきちんと理解する必要があると考えている。(Nadia)

・ルワンダでは老人ホームのような施設はなく、高齢者は家族が面倒を見ている。

(Blaise)

発表者感想

同世代の人に大学で社会福祉を専攻していると話すと、頻繁に返ってくるフレーズがある。「福祉？介護を勉強しているの？偉いね。」

この言葉を聞くと私はいつも、「福祉＝介護＝自分には関係ない」という方程式が若者の意識の中にどっしりと構えているように感じる。その度に言葉を返したくなる。「福祉はあなたにも関わっているものだよ。自分事として捉えてみない？」と。

超高齢化社会に突入する現代において、若者である私たちが高齢者を、税金を通じて金銭的に支え、介護を通じて肉体的にも支

えていく必要があることはまぎれもない現実である。社会に生きる限り、この現実から目を背けることはできない。

またディスカッションを通して知ったのは、日本の特別養護老人ホームなどのような高齢者が生活をする施設はなく、介護は基本的に家族が全てを見ているという現実だった。福祉制度の発達も十分であるとは言い難い。

ユマニチュードは認知症高齢者に対するケア技法であるが、決して介護ではないと思う。これは人に対するときに必要な、ごく一般的なコミュニケーション方法なのではないかと考える。

ディスカッションで一番印象的だったのは、政策について話すのではなく、メンバーそれぞれが実体験に基づいた意見を自分の言葉で正直に語ってくれたことだ。中には涙を流すメンバーもいた。ディスカッションというよりは喋り場ようになってしまったが、自分の素直な気持ちを語り、福祉を自分事として捉えてもらう機会となったのなら、本学生会議は成功であったと言えるだろう。

What is the Humanity?

- ▶ One technique of Elderly care
- ▶ Especially for Dementia
- (1970's) Emerged in France

優しさを感情に訴えかける
Method of appealing to kindness for patient

About 150
philosophical technique

「Miracle technique」



Geneste

(プレゼンテーション資料)

豊かな高齢社会

担当者: 林陸

発表日時: 8月6日(土)

プレゼンテーション概要

老いとは何か。老い×身体と心、老い×叡智、老い×パーソナリティーの3つにわけて老いについて考え、それぞれの思い描く老いのビジョンを少しでも明確にする。

実施目的

さまざまなイメージが持たれる『高齢社会』だが、それは往々にして悪いイメージであろう。1年後や5年後の夢・目標は明確だが、どんな老後を過ごしたいといったプランを、漠然でも描いている人は多くない。なんとなく嫌で、今はあまり考えようと思わない。これが老いに対する一般的な思いではないだろうか。老いについてしっかりと知識を、いい側面も含めて増やしてもらいたいというのが今回学生会議にこのテーマを持ち込んだ理由である。また、老いについての考え、ひいては死生観は大きくその人のパーソナリティーを反映している。このテーマで意見交換をすることは日本人学生とルワンダ人学生の理解にも直接つながると考え、情報のインプットよりも、それを基にしたお互いの意見交換を重視した。

プレゼンテーション詳細

■老い×心と身体

歳を取ると若い時のように動けなくなる。これこそ私たちが考える「老い」だが、老いは身体だけでなく心にも影響を及ぼす。例えば、泌尿器官の衰えにより高齢者はトイレが近くなる。人によっては介護が必要にもなるが、その介護が毎回間に合うとは限らない—失禁である。自分自身で排泄をできるかどうかというのは、人間の尊厳を保持する重要な要因であり、失禁が在宅介護をあきらめる契機になることも多い。このように、身体的不自由は心理的不自由にも大きく関わる。つまり心も老い得るのである。

■老い×叡智

IQ、EQなど様々な方法で知能を測ることができるが、知能は老いとともに低下するといわれている。たしかに記憶力などは低下するが、おばあちゃんの知恵袋と言われるように年を取るからこそ得られる知識もある。つまり数量化される知能とはカギ括弧付きの「知能」でしかない。

■老い×パーソナリティー

心理学者トルンスタムの老年超越理論によると、ほぼ60歳以上の人の中に、老年的超越と呼ばれる性質を備える者が現れる。その性質は例えば「表面的な人間関係の軽視」から「善悪二元論からの超越」「生と死の概念の変化」まで幅広くみられる。このように先に挙げた身体的な老いが及ぼす心理的影

響以外にも、年を取るそれ自体が個人の心理、パーソナリティに大きく影響を及ぼす。

ディスカッション

テーマは下記の3つである。

Topic1. 「老い」といえば何が思い浮かぶか

この質問はアイスブレイク程度のものと捉えていたが、日本人とルワンダ人で回答に大きな違いがみられた。日本人メンバーはほとんどが「弱い」「死」「孤独」「病気」「ボケ」などネガティブなワードのみを挙げていた一方、ルワンダ人メンバーは「親切」「経験」「成熟」等ポジティブなワードも挙がっていた。ルワンダでは高齢者がそもそも少なく、皆家族に囲まれて暮らしているのであまりネガティブなイメージを持たないのだろうと思われる。

Topic2. 50年後の生活はどのようなものか

回答自体に日本人とルワンダ人の間に大きな違いは見られなかった。しかし日本人の数人は働きたい、一人または配偶者と暮らしていると答えた人もいるが、ルワンダ人は皆退職し、子供や孫を含めた大家族で暮らしたいと答えていた。これは現在の日本、ルワンダの高齢者の現状をまさにうつしている結果といえるであろう。

Topic3. 叡智あると思う人の名前とその理由

老い×叡智にて数量化される知能とはカギ括弧付きの「知能」でしかないと言ったが、結局知能、叡智とは主観的なものである。そこで、それぞれの思う「叡智」を皆に挙げてもらった。

これは性別でも国籍でもくくられず、まさに十人十色の回答であった。理由まで掘り下げると「多くのものを知ってるから」「革新的なアイデアを持ってる」「人の立場に立てる」などこれもまた人それぞれである。

発表者感想

誰もが避けられない「老い」。それも人生の短くない期間を占める高齢期。今後も寿命は延び続けるといわれており、人生の質(Quality Of Life)を高めるには高齢期の充実がさらに重要性を増す。そんな高齢期をいかに充実させるか。今回のディスカッションを通じて私はルワンダ人から少しそのヒントを貰ったような気がする。確かに金銭的に豊かに暮らしたいのであれば60歳以降でも働くのが良いし、現実的に孫世代と同居するのも難しいかもしれない。しかし、そんな私たち日本人が思い描く「老い」は負のイメージがつきまどっているのではないか！「知能」と同じく、豊かな高齢期に特定の定義はないが、自分にとっての豊かさを考え、その豊かさを追求したい。



(プレゼンテーションの様子)

障害と出生前診断

発表者: 吉田萌子

発表日時: 8月6日(土)

プレゼンテーション概要

あなたの子どもが出生前診断によって障害があると判明した場合、あなたは生むだろうか？ 障害を自分の身近な存在に捉えることで、障害について考える。

実施目的

平成 28 年 4 月 1 日障害者差別解消法が施行されたように、障害者に対する偏見を取り除こうという考えが広まっている。しかし、出生前診断によって胎児に障害があるとわかった場合ほとんどの人が中絶しているのが現状だ。自分の身に置き換えた時にどのような判断を下すか考えることで、自分の心の奥底にある障害に対する偏見に気づく機会とするため、本プレゼンを行う。

プレゼンテーション詳細

今年 7 月に起きた相模原障害者施設殺傷事件で、19 人の障害者が亡くなり、26 人が重軽傷を負った。逮捕後犯人は「障害者を殺すことでみんなが幸せになる」と言った。

この事件に関してあなたはどのように感じ、何を思っただろうか。多くの人はこの事件を受け「障害者差別だ」「なんてひどいことを」「ありえない」と言った。確かにこの事件はあ

ってはならないことであり、障害者に対する差別である。

しかし、自分の身に置き換えたとき同じことを言えるだろうか。近年医学の進歩により、胎児の障害の有無を確認できる「出生前診断」が普及してきている。あなたの子どもに障害があると判明した場合、あなたはどのような決断をするだろうか。議論で「出生前診断」をテーマとしたとき、多くの人は障害をもっているからといって中絶するのは良くないという。これは学校や世間が、ただ単に「差別はだめだ」と教えるからであろう。しかし現状はどうだろう。胎児に障害があると判明した母親のうち 97%は中絶しているのだ。

障害者殺傷事件と出生前診断による中絶はある意味同じことである。97%という数字は、障害に対する隠れた偏見・気づかぬ偏見を表している。自分の身近な存在として障害を捉えたとき、本当の「障害」を理解する。理解して初めて差別・偏見は無くなるのではないだろうか。

カナダを例にあげる。カナダではパラリンピックを街中の電光掲示板で放送し、多数の国民が応援する。そんなカナダではバリアフリーが進んでおり、障害者に優しい国と言われている。日本はどうであろう。オリンピックの放送が終了するとあたかも全てが終了したかのようにオリンピック特番が始まり、パラリンピックの放送はほとんどしない。これは日本人の障害に対する関心の低さを表している。障害に関心を持つことが、障害の理解につながり、偏見は無くなっていくだろう。

ディスカッション

テーマ「出生前診断によりあなたの子どもに障害があるとわかった場合あなたはどうか？」

- ・生まれてきた子どもがかわいそう、苦勞するから生まないほうが良い。(両国メンバー)
- ・生れてきた子どもをかわいそうと判断するのは私たちのエゴだ。(日本人メンバー)
- ・ルワンダはクリスチャンだから障害があるからといって中絶はできない。レイプ、近親相姦、母体に命の危険があるときでさらに医者が認めなければ中絶はできない。だから私も中絶はしないが、もし可能ならばするかもしれない。(ルワンダ人メンバー)

発表者感想

タイムリーな事件を取り扱ったため、身近な問題として捉えることができたのではないだろうか。

本会議前、日本人メンバーのみでプレゼンを行った際、ルワンダ人はクリスチャンであるため、このようなディスカッションを行っても「中絶はだめだ」の一言で終わってしまうのではないかという指摘を受けた。それ以上の議論に発展しないのではないかと心配したが、実際の議論では、宗教に沿った考えや更には宗教を超えた意見を聞くことができた。お互いの倫理観を共有したことで、自分たちの偏った考えを見つめ直す機会になった。

答えのない問いを扱ったため自由な議論

は行えたが、何を学んだかぼんやりとしてしまった。明確なテーマを設けることも大切だと実感した。



(ディスカッションの様子)

リーダーシップ

発表者:水口あすか

発表日時:8月7日(日)

プレゼンテーション概要

日本メンバー、ルワンダメンバー共に自分がリーダーシップを発揮した経験を共有し、リーダーシップに何が重要と考えるかディスカッションする。それぞれがリーダーについて普段考えていることを共有する時間にした。

実施目的

私自身が本団体の代表として活動する中で、何度もリーダーシップについて考えることが多かった。そのため、他のメンバーは、リーダーシップについてどのような考えを持っているのか興味があったため。また、色々な役職がありメンバー一人一人がリーダーになる機会が多い団体であるため、それぞれのモチベーションを知ることが今後の活動においても生かされると思ったため。

ディスカッション

初めに、これまでに自分がリーダーシップを発揮してきた経験を共有した。ルワンダ大学のダンスサークルのリーダーを務めているメンバー、所属するクラブの活動でリーダーシップを発揮した経験を話したメンバーなど、メンバーの JRYC 以外の活動についても聞くことができた。その後、デレク・シヴァーズの「社会運動はどうやって起こすか」という映像

を見ての感想を共有し、最後にそれぞれの考えるリーダーシップについて意見交換した。

発表者感想

慌ただしいスケジュールの中だったので、リラックスも兼ねて自分のことについて話す学生会議とした。少数のグループでディスカッションを行ったためそれぞれの距離も近く大変盛り上がっていた。リーダーと言うと、すぐにカガメ大統領の話始めるルワンダメンバーを見てカガメ大統領が偉大なリーダーであることを再確認した。また、自分たちがアフリカのリーダーになると話している姿に今後のルワンダの更なる発展が楽しみだと思った。今回は、プレゼンも簡単なものだったので、次回は、よりアカデミックなトピックで学生会議を行いたいと思った。

参加者感想

■日本人メンバーA

リーダーシップに必要なものと聞いて決定力や本人の魅力など色々なものが出たが、ルワンダがカガメ大統領について沢山のことを話していたのが印象的だった。ルワンダについて調べる時はジェノサイドそのものばかりに注目しがちだが、カガメ大統領についても勉強してみたいと思った。

■日本人メンバーB

グループディスカッションで優先順位や仕事量を考えながら「続ける」ことが何より難しく大切な事ではないかと共通認識が生まれた。

■ルワンダ人メンバーA

リーダーシップとは周りを巻き込んでムーブメントを作ることでもあり、ムーブメントに参加して一緒に作ることもあると思った。始める人も、それをフォローする人もみんながリーダーだと考えた。

■ルワンダ人メンバーB

リーダーシップには、必要なものや問題を認識すること、また正しい選択をすることが欠かせないと考える。

WOMEN

IN RWANDA POLITICS

発表者: Jean Berchmans IMANISHIMWE

(訳: 美崎絢香訳)

発表日時: 8月3日(水)

プレゼンテーション要旨

ルワンダにおける女性の地位について説明する。また、ジェノサイド後のルワンダ再建について説明する。

プレゼンテーション詳細

1. ルワンダ議会イントロダクション

ルワンダは世界で最も議会での女性代表が多い。統治以外でもよく代表していて、ルワンダの政治課題である強い男女平等について追及している。

ルワンダで、教育は女性ルールに対しての意見に影響する重要なことである。ルワンダでは社会的経済発展のために不可欠な女性の影響やリーダーシップを議論する男性、女性がいます。議会では女性が圧倒的、市民選挙である。憲法の割り当てで女性のため取っておかれた議席は80席のうち24席だが、選挙者はいつも女性に多く投票した。

2. どのように女性はルワンダを再建したのか

1994年のジェノサイドでのルワンダ発

展に対する、無数にある話はどのように女性が国を変えたかである。

ジェノサイドにかかわったほとんどが男性で、多くの男性が近隣の国に逃げたため、ジェノサイド後の人口の70%は女性だった。家族が生き残るために立ち向かい女性は向上した。女性は再建するためにまず建物を掃除してから行動した。

耕作してビジネスを始め、国の至る所に、彼女らはジェノサイド後の苦痛(言い表せない暴力の数々)の余波に安定を創造した。そして、女性は復興のカギとなるGACACA裁判を行った。女性は国の管理人や裁判官、重要参考人として務め、2012年までに、200万人近くの犯人がGACACAの裁判所に来た。

3. 新しい憲法

2003年に国民投票で承認されたルワンダのための新しい憲法を起草することで、仕事の12つのうち3つをつかみ取った。非形式的と形式的を兼ねそろえたリーダーシップのある女性の向上は励みに反映している。任務ではGMO(性別監視事務所:ジェンダーモニタリングオフィス)だけでなく政府でも女性のために30%の割り当てを認められた。

4. 村議会から議会まで

5段階のシステムは責任ある政府の地位の、国内の社会的リーダーを動かすため劇的に効果的なリーダーシップ開発計画を試した。

議席の 30%は女性のために取られていて、合議制度は取られた地位の中の低い水準から議席を供給した。すぐに、最も高いプロフィールと最も多くの経験のある女性は議席のない地位の男性と競い勝ち始めた。

本日、64%の議席は女性によってつかまれ、ルワンダの議会は女性代表で世界へ導く。

5. 現在のルワンダ

民主主義に対し、むらのある移り変りがあるにも関わらず、ルワンダはアフリカで最も安定した国の 1 つのようにジェノサイド後の 20 年間までに認められている。著しく腐敗がない。わずか 10 年で平均寿命が 48 から 58 歳に上がり、5 歳未満の子どもたちの死は半分に減った。義務教育プログラムは、等しい数で初等・中等学校に男の子、女の子が入れた。女性は今、自分自身で財産を相続することができ、ビジネスを含む、国のすべての分野で活動的なリーダーである。国家任意やプログラムは女性に対しての暴力を含む暴力を減らしている。

6. ルワンダの力強い女性の例

ルワンダの女性は、議会の議席の 64%という、世界新記録を作った。

例 1 Louise Mushikiwabo

彼女は 2009 年からルワンダの協同組合や海外事情の大臣として務めたルワンダの政治家。代弁者としても務め、以前は

情報大臣。

例 2 Aloysia Cyanzayire

彼女は現在代理人(行政機関の監視)。

他、カガメ大統領について。



(プレゼンテーション資料①)



(プレゼンテーション資料②)

参加者感想

■日本人メンバーA

ルワンダの政治では女性がリーダーとされているという意見に賛成。多くの先進諸国はまだこの問題で苦しんでいる。

日本も政治でより多くの女性起用する心がけをするべき。しかし、男性は議席を置くことが難しいと恐れているため、多くの政治家は

日本でこの制度を行うことに反対している。
私は私たちがどのようにこの状況を変えることができるかはまだわからない。

■日本人メンバーB

日本政府はルワンダのように組織する方法を学ぶべきだと思う。しかし、ルワンダと日本の状況はかなり異なるためそれも難しい。

■ルワンダ人メンバーA

自分の国のことに関して学び、このプレゼンテーションはためになった。ルワンダの政治においての、女性の地位を知ることができた。

■ルワンダ人メンバーB

ルワンダ人なのでこの話題をよく知っていた。そして、男女平等と女性権利拡大は、今のルワンダで注目されている話題だ。

Immigration and Residence in Rwanda

担当者:Nadia NIYONIZEYE

(訳: 栗原千華)

発表日時:8月6日(土)

プレゼンテーション要旨

ルワンダのビザシステムを7種類の観光ビザと2種類の居住ビザに分けて説明する。

実施目的

現在移民問題が大きな話題となっているので、ルワンダの新しい移民法を紹介しルワンダにおけるビザにはどんなものがあるか日本人に知ってもらうため。

プレゼンテーション詳細

- ① 現在のルワンダの街並み、人々の生活を紹介。
- ② ルワンダの移民法の説明…1999年と2011年の移民法を比較し、新しい移民法ではEAC(East African Community)やCEPG(Communaute Economique des Pays de Grand Lacs)の連携が加えられた。
- ③ 観光ビザの紹介…グループ観光客のビザ、会議のためのビザ、仕事探しをする人のためのビザ、ビジネスビザ、ルワンダで仕事を起こす人のビザ、医療治療を求める人のビザ、そして Bridging visa

がある。Bridging visa は居住許可を持つ人には居住する権利とそこで働く権利を持つことを許可したものだ。

- ④ 居住許可の紹介…一時的な居住と永住の許可に分かれる。また、一時的な居住には、休暇の間働くことを望む外国人のための許可や退職した人のためのビザがある。



(プレゼンテーションの様子)

ディスカッション

日本にはない Bridging visa について話し合った。ルワンダのオープンマインドな政策に対し、日本もそのようなシステムを積極的に取り入れていくべきという意見が多かった。



(ディスカッションの様子)

参加者感想

■日本人メンバーA

Bridging visa のシステムは日本にはないから興味深かった。

■日本人メンバーB

もし多くの人が **bridging visa** を持ってルワンダに来たら、安全性について心配だ。最初の動画はルワンダという国について知るのに役立った。

■ルワンダ人メンバーA

EU や東アフリカのコミュニティーのような緊密に結びついたコミュニティーを持つことは重要だ。また、**Bridging visa** は少数の技術を持たない人々にとって社会的セーフティネットの役割を果たすだろうと思った。

THE MIGHTY DRUM

発表者: Blaise P. SHYAKA

(訳: 安居綾香)

発表日時: 8月6日(土)

プレゼンテーション要旨

ルワンダの王国時代に遡り、ルワンダにとって「太鼓」がどのような存在で、どのように扱われてきたのか説明する。

実施目的

1. ルワンダ王国時代について考える機会とし、王よりも権力を持っていたものについて知ってもらいたかった。
2. 多くの日本人は Agaseke だけがルワンダの伝統的な道具であると考えているため、他にも素敵な伝統産物があることを紹介したかった。

プレゼンテーション詳細

1. イントロダクション

古くから各国では国を象徴するものが定められており、多くのアフリカの王国においても象徴品は宮殿で引き継がれてきた。ルワンダ王国においては「太鼓」が国を象徴するものであった。太鼓には3種類あり、それぞれの役割は異なっている。

2. 王家の神聖なドラム

王家に伝わるドラムは王よりも偉大でルワン

ダ王国で最も大切なものとされていた。王はこのドラムのために命を捧げる覚悟を持っていたというほどである。また、ドラムであるが、楽器としての役割はなく、音が鳴らされることは決してなかった。代わりに他の太鼓が音を鳴らし、神聖な太鼓を讃えた。

神聖な太鼓は歴史上 RWOGA と KALINGA という2種類しか作られていない。当時、「太鼓を奪うこと=領土支配」であったため、2つの太鼓は紛争の中で消滅した。RWOGA は 1477 年に NSIBURA によって壊された。そこで、1510 年に NZURUGA Ndoli 王によって KALINGA が作られた。しかし、1896 年の二人の王子の間で RUCUNSHU 戦争が起こり、負けた方の王子が KALINGA と共に放火自殺した。

3. 祝福のドラム

王家の神聖なドラムとは異なり、主に祝い事場で実際に音を鳴らした。また、王の巡幸のエスコートや目覚ましのアラーム、宴の楽器として活躍した。

4. 儀式のドラム

先祖の霊を祀る儀式や Umuganura という収穫祭、運河のお祝い、害虫退治などに使われた宗教的また儀礼的な場で使用された。



(プレゼンテーション資料①)



(プレゼンテーション資料②)

ディスカッション

国を代表するものとは何かについて中心に議論した。国家や国旗の他に日本では「三種の神器」があり、ルワンダにおける太鼓と同じような感覚であるのではないかという意見が出た。太鼓と同じで「鏡・玉・剣」は歴代の天皇が継承してきたものである。ルワンダ王国において太鼓が大切にされてきたことを日本人メンバー全員がはじめて知り、「三種の神器」についてもルワンダメンバーに紹介できた時間になった。日本とルワンダは遠く離れているにもかかわらず、国を象徴するも

のを継承していくという考え方に共通性を見つけた。

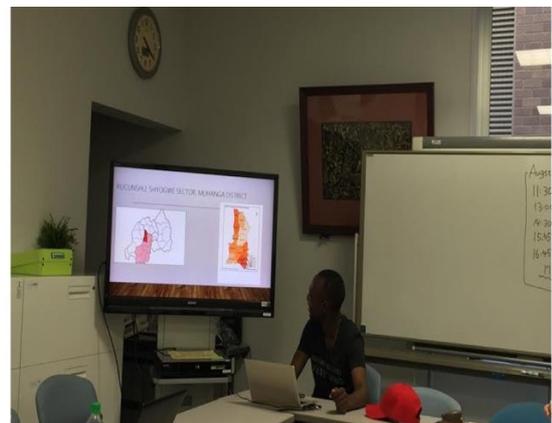
参加者感想

■日本人メンバー

太鼓が王以上に権威があり、大切にされていたこと、また、ルワンダの意味が「拡大する」というのをはじめて知って驚いた。そして、日本における三種の神器とルワンダにおける太鼓が国の象徴という点から繋がって大変興味深かった。

■ルワンダ人メンバー

ルワンダ王国時代の歴史を日本人メンバーに知ってもらった良いプレゼンだった。このように互いの国の歴史についてこれからも紹介し合いたい。



(プレゼンテーションの様子)

Rwanda

発表者: Léandre BERWA

(訳: 西野由花)

発表日時: 8月7日(日)

プレゼンテーション要旨

日本とは全く異なる歴史、文化を持つ国ルワンダへの導入として日本人への基礎知識を持ってもらう。

実施目的

ルワンダの政治・経済・文化などについて、より広く日本人に知ってもらうため。また、ルワンダと日本を比較する。

プレゼンテーション詳細

■ルワンダの政治

共和国であるルワンダの政治は分権的であり、女性の議会への参加率は6割を超え、自由、平等、人権の保障を主に掲げている。大統領はポール・カガメ氏であり、ルワンダ政治の中心を担う。

教育面では、9年間の基礎教育があり、これが終了すると高校進学への資格を与えられる。入学率は95%である。

近年コーヒーや茶の貿易により貧困層や経済格差の減少が近年見られている。

■ルワンダの経済

ルワンダ経済の中心となっているのは自然資源や農業(33% in 2012)、そして観光(43.6% GDP in 2010)であり、ルワンダにおけるGDPの割合の多くを占める。

この経済成長によって、ルワンダの貧困層は57%から45%へと減少した。

ルワンダで栽培されている作物は、コーヒー、茶、バナナ、豆などである。家畜は牛、羊、豚、鶏、うさぎなどである。

■ルワンダの文化

ルワンダの人々は一つの言語、文化遺産を共有し、毎月末の土曜日にはウムガンダと呼ばれるほぼ全国民の参加する奉仕活動が行われている。その他、ルワンダには伝統的なダンス、食事、飲み物など独自の文化を守っている。



(プレゼンテーション資料①)



(プレゼンテーション資料②)

参加者感想

■日本人メンバーA

ルワンダの教育現場が想像以上に発展していることに驚いた。アフリカのほとんどの国は就学率が低く、さらに「女性は家業」という文化が根強い。ルワンダは男女ともに就学率・識字率が高いということがわかった。また、英語教育に関しては、日本よりも進んでいるという印象を受けた。日本も小学校から英語教育に力を入れるべきだと感じた。

■日本人メンバーB

ルワンダにおいて、女性の社会的地位が高いことがわかった。これは日本も目指すべき姿であると感じた。女性の産休・産後の社会復帰について聞いたところ、女性が守られる制度が整っており、女性に優しい社会であると思った。

第4章

参加者感想

板谷美沙	日本大学経済学部 4年.....	71
岩垣梨花	早稲田大学人間科学部 4年.....	73
宇田川藍佳	国際基督教大学教養学部 2年.....	75
栞原千華	同志社大学法学部 3年.....	77
田中瑞幹	同志社大学政策学部 3年.....	79
堤谷季里	早稲田大学人間科学部 2年.....	80
西野由花	青山学院大学国際政治経済学部 2年.....	81
林 陸	上智大学経済学部 2年.....	82
美崎絢香	同志社大学商学部 2年.....	85
水口あすか	東京女子大学現代教養学部 2年.....	86
安居綾香	同志社大学グローバル地域文化学部 4年.....	88
柳田瑞季	上智大学文学部 2年.....	90
山崎 建	早稲田大学社会科学部 3年.....	91
吉田萌子	早稲田大学人間科学部 2年.....	94
渡邊 伶	早稲田大学教育学部 4年.....	95
Jean Berchmans IMANISHIMWE	ルワンダ国立大学薬学部.....	99
Nadia NIYONIZEYE	ルワンダ国立大学理工学部.....	102
Blaise P. SHYAKA	ルワンダ国立大学理工学部.....	106
Léandre BERWA	ルワンダ国立大学理工学部.....	113

日本ルワンダ学生会議での活動を通して

日本大学経済学部 4 年

板谷美沙

今回の第 15 回本会議は、私にとって 5 回目の、また、大学生活における最後の本会議となりました。そのため、ここでの感想文は今回の招致活動のみならず、私の 4 年間の日本ルワンダ学生会議を包括してのものを書かせていただきたいと思います。

この本会議中、今までの自身の日本ルワンダ学生会議での活動を振り返って様々なことを考えていました。日本ルワンダ学生会議に所属して 1 年目の頃は、じゃるわ（日本ルワンダ学生会議の略称）はやらなければならないことが多く、正直退団しようかと考えていました。やるべきことが多いのは今も変わらずで、本会議前には様々な時間を割いてじゃるわの作業を行なければならなくなります。それでも私がこの団体に居続けたのはなんだろう。そんなことをこの本会議中に考えていました。私のじゃるわ活動には大きなターニングポイントが 2 つあったかと思います。1 つめは退団しようという考えが消えた時です。そもそも退団しようという考えが消えたのはいつ頃だったかかと振り返ってみると、2 年生になって、新体制になりじゃるわとの密度が濃くなっていった頃からのように思います。週 1 回のミーティングに加え、土日にも勉強会を開催し生活のほとんどがじゃるわだったかのように思います。しかし、メンバーに会って話をしたり、プレゼンテーションでルワンダについて学んだり、先輩のプレゼンテーションを聞きながら自分のプレゼンテーションのために技術を学ぼうとしたり、たくさんの時間をじゃるわで過ごすことによってもっと知りたい、もっとできるようになりたい、認められたい。と思うようになりました。そのなかでも認められたいという承認欲求が私の活動を 1 番に支えていたと思います。優秀な先輩方に囲まれて、そんな人たちのようになりたかったし、そんな人たちからすごいって思ってもらいたかったのだと思います。少し、自分の遍歴をたどることになりますが、高校生の頃、私は県内でもトップクラスの進学校に通っており、もちろんそのことに自信と誇りを持っていました。しかし、高校に合格できた安心感と慢心から高校生になってからというもの勉強を怠ってしまいました。その結果、当たり前なのですが納得のいく大学に行くことができませんでした。その時から自分の中に強い劣等感を抱くようになり、認められたいという承認欲求が非常に強くなっていったのだと思います。そんな中で優秀の人から認められるということで自分に自信を持ちたかったのだろうと思います。正直、ルワンダについて勉強してもちろん好きな国だし行ってみたいという気持ち

もありました。しかし、ルワンダである理由は私の中でそこまで大きくなかったように思います。私のじゃるわでの活動を支えていたのは、どちらかというこの環境の中で自分を成長させて自信を持ちたかったということだと思います。もう1つの要因として挙げられるのは純粋にじゃるわが私の中で居場所になったことだと思います。メンバーとたくさん会うようになって、段々と打ち解けていき、メンバーに会うのが楽しみになっていたというのも退団を考えなくなった大きな理由だったと思います。そこからは承認欲求に加えて、元々負けず嫌いな性格もあって、自分の役割でできなかったことなどの反省をバネにもう一度挑戦したい。という気持ちで続けてきました。その中で先輩に「もい（じゃるわ内でのあだ名）も成長したね〜！」と言ってもらえた時はすごくうれしかったです。

もう1つのターニングポイントが訪れたのは3年の春休み、ルワンダ渡航だったと思います。2年生の頃にルワンダ渡航を予定していたのですがエボラ出血熱が西アフリカで流行して、親の許可が下りず泣く泣く断念しました。それまで渡航者ミーティングにも毎回出てルワンダ渡航に備えていたのに、なんで私が行けなくなるの。と少しすねて通常ミーティングに行かないなんてこともありました。

そんなことを経てようやく3年の春にルワンダ渡航を実現することができました。そこで初めて「対等な関係」について考えるようになりました。それまでは招致事業にしか参加したことがなく日本人学生側が様々な準備をして彼らを出迎えていました。（もちろんルワンダ学生側もプレゼンや勉強会などをやっているのですが。）なのでどちらかという日本人メンバーが一生懸命に頑張っているところばかり見てきて、正直ルワンダ人との対等な関係であると感じることは少なかった、というよりそもそも考えていなかったように思います。（前述したようにルワンダとの関係性より自分が認められたいという気持ちが大きかったため。）

しかし、ルワンダ渡航でルワンダ人学生メンバーにたくさんお世話になり、彼らも毎年私たちと同じように準備して3週間一緒にいてくれて様々なケアをしてくれて、、、彼らも同じように多くの時間を割いて私たち日本人学生を出迎えてくれている。そのことにひどく感動し、この時に対等な関係を実感しました。まだ、文化交流という活動がそこまで浸透していないルワンダにおいて、たくさんの時間を割いてこの活動を動かしてくれているのだということは、私たちの活動にそれだけの価値を見出してくれているということなのだろうと思います。そこからこの活動を続けていきたいという思いが形を変えてより強くなったと思います。ルワンダ渡航でたくさんお世話になった分、彼らにとって実りある招致活動にしたい。そんな恩返しに近いような気持ちで動くようになりました。もう1つはルワンダで友達になった彼ら彼女らに会えるのが嬉しい。というものが原動力でした。実際は就職活動であまり準備に携わることはできなかったのですが。今回の招致で驚

いたことは初めて彼らの帰り際に涙しました。正直に言うと私は少しドライなところがあってあまり友達とのお別れに泣いたりしないです。笑もうなかなか会えなくなってしまうということがすごく寂しかったです。こんな気持ちになるのだなと純粋に驚きました。距離にして1万2千キロメートルほどありますが、確実に人と人とのつながりを見ることができたように思います。このような経験や思いでじゃるわの活動を続けていくことができました。

話が長くなりましたが、この活動を通じて自己成長ができたことは間違いありませんし、国を超えた人と人とのつながりに純粋に感動しました。私たちの活動理念である「相互理解」は微力ではありますが、偏見を持たない人材育成にひいては世界平和に役立っているのではないかと感じました。就職活動においても、このような文化交流の促進を行う事業に携わりたいと思い今の内定先に決めました。たくさんの方の事を学ばせていただいた日本ルワンダ学生会議には本当に感謝の言葉しかありません。今後もここで学んだことを大事に立派な社会人になれるように努力していきたいと思えます。



7 年分

早稲田大学人間科学部 4 年

岩垣梨花

2009 年のある真冬の日。家に帰ると見慣れた居間のソファに、見慣れぬ外国人が寝ころんでいた。彼らは私に笑顔でこう問いかけた。「おかえり。高校は楽しかった?」。その日から始まった一週間の不思議な共同生活。文化の違いに驚きながらも、かすかに垣間見る日本人との共通性に心躍り、その時間を目いっぱい楽しんだ。別れ際、泣きながら彼らと「また会おう。今度はルワンダで。」と再会の日を誓った。これが、私が人生で初めてルワンダに触れた記憶である。

光陰矢の如しとはよく言ったもので、ピチピチのJKだった私も、気づけば「5女」という全くありがたくない烙印を押される学年になってしまった。(ちなみに早稲田では5女は「屍」と呼ばれる) この間、留学を経験したりと、JRYCの招致事業になかなか関わることが出来ないでいたが、今回現役最後の招致事業として「アイデンティティ企画」を担当することになった。本会議では何かとイベントを担当する機会が多かったのだが、総決算となる今年もイベント運営に関わらせてもらうことが出来たのは、もはや縁なのではないかと感じている。

アイデンティティ企画は当初、恐ろしいほどの暗雲の中をさまよっていた。栃木で寺社仏閣について学ぶというスタンスで始動したものの、メンバーの中で納得がいかない部分が噴出し、企画始動後にテーマを大改編したこと。途中離脱してしまったメンバー。自分自身も就職活動真っ只中であったため、不安の中をひた走っていた。しかしその中において、「親バカ」ならぬ「先輩バカ」というのかもしれないが、とにかく2年生が大いに活躍してくれた。初めての招致事業で分からないことだらけの中、時には先輩を頼ってくれ、時には自分自身で考えあぐねて出したアイデアをどンドンぶつけてくれたり、仕事をてきぱきとこなしていた。招致直前に諸事情で海外から帰国できなくなってしまったメンバーは、不安いっぱいであるはずにも関わらず、旅行先から自分が何をすべきかを冷静に判断して行動していた。度胸がすわっているなあ、と改めて感心したものだ。そしてコーディネーターは苦しみもがきながらも、全力で本会議にぶつかっていた。2年生が中心となって盛り上げた本会議は、なんだか今まで関わってきたものとは随分と違って、それでいて面白かった。

最後に本会議で一番印象的だったエピソードで締めくりたいと思う。藤元氏写真展イベントの日。イベント終了後、片付けをしながらナディアが、LGBT写真を食い入るように見つめていた。私はその眼差しがあまりにも強く印象的で、「お、これは報告書のどこかに使えるぞ。」と軽い気持ちでナディアに写真を撮らせて欲しいと頼んだ。ところが彼女の答えは「NO. Don't take a picture.」とても鋭い声だった。いつもあんなに自撮り大好きな彼女が、なぜ頑なに拒否するのか疑問で、思わず「どうして？」と聞き返した。彼女は「私がゲイ写真を見ていることを他のルワンダ人に知られたら大変よ。」ルワンダではキリスト教の慣習から、LGBTに否定的な考えの人が多。これは前日の勉強会でもルワンダン達が何度も繰り返し話していたことだし、藤元さんの講演会でも強調されていたことだった。アイデンティティ企画を通して、そんなルワンダンの考えに疑問符を投げかけられたらと意気込んでいただけに、少しショックだった。しかし、ナディアはもう一つ、言葉を続けた。

「ルワンダはじきに変わるわ。今の日本が15年前の日本と全然違うように。きっと10年後のルワンダは、LGBTの人達も受け入れられる社会になってるはずよ。」私は「本当に？」と聞き返した。彼女は自信たっぷりに「Yes」と答えた。その瞳は澄んでいた。あくまでた

った一人、ルワンダの友人の考えにすぎないかもしれないが、私には10年後、そのような社会が来る気がしてならない。ルワンダが22年前のジェノサイドがあったルワンダと同じでないように、これからも大きく変わり続けていくだろう。変化を続けるルワンダで、今回の招致を通して出会った大切な友人達が生き生きと暮らしていることを想像すると、まだ見ぬ未来にワクワクしている自分がいた。私はやっぱりルワンダが好きなんだなあ、とワクワクする胸に語りかけた。

この7年間で触れた沢山のルワンダを胸に、そしてまだ見ぬ未来のルワンダに想像を膨らませながら、これから社会へと歩いていく。



私のみたルワンダと私がルワンダに対してできたこと

国際基督教大学教養学部2年

宇田川藍佳

この夏、同じくらいの時間の人生を、ルワンダという国で送ってきた人々に出会った。そして友人となった。その情報量は限定されるものの、ルワンダについての知識を得ることはできる、いまの日本。しかし、ルワンダに行ったことのない私にとって、それはルワンダという国を「目の当たりにする」初めての機会であった。そして、それは同時に、日本という国を新しい眼鏡で眺めることでもあった。本稿では、わたしの「みた」ルワンダと日本、そしてJRYCの活動意義について考えてみたい。

まず、ルワンダ人学生はジェノサイドの「記憶」を語るができるということ。私はルワンダ側学生とかかわるにあたって一つのルールを設けていた。それはすなわち「興味を持ったことは、何でも尋ねる」というもので、ルワンダ人の「タブー」を、(まずそれが存在するのか、またそれはなんであるのか)知らない私はこのような覚悟を持つ必要があると思ったのである。このとき、私はジェノサイドを念頭に置いていた。もしかしたら、彼らはジェノサイドについて興味本位で尋ねられることを嫌がるかもしれない？しかし、その臆病

な予想はあっさり裏切られ、彼らはむしろ、ジェノサイドの「記憶」を語ることに積極的でさえあったと思う。しかし、なぜ彼らは「記憶」を語ることができるのか？彼らはジェノサイドの末期、もしくは直後に生まれた世代であり、体験的知識はないはずだからである。

「どこでどのようにジェノサイドについて学んだの？」私の問いに対して、彼らはそれを学校で学んだとは言わなかった。ルワンダ政府が設けるジェノサイドを記念する週間の前後で、地域ごとに集まって、経験者の話を聞き、議論を交わすのだという。同時に、彼らはルワンダの経済成長による豊かさを強調したがったし、どのようにジェノサイドを乗り越えてきたのかについて語りたがったのだが、それでもルワンダ学生のこの一面には面食らった。というのも、(ルワンダにおけるジェノサイドの記憶というものを日本における戦争の記憶というものに対応させるとすれば、) 私が知る限り、日本では戦争の個人的な記憶というものが地域レベルでシェアされる機会はそこまで多くないからである。私のとなりのとなりに住んでいたおばあちゃんと、戦争について話す機会は、少なくとも私にはなかった。これは、日本でいま戦争を「記憶」として語ることの難しさと直結しているように私は思う。日本では現在戦争の「記憶」の風化が叫ばれ、主に被爆者を中心に「語り継ぎ」の活動が目されている。しかし、同時に、戦争を知らない首相が戦争を語り、憲法解釈を変えた。そして国民はそんな内閣を未だに支持する。それに対して、ルワンダの歴史との向き合い方、そして将来の国を担う若者になにを求めるか、その志を私は彼らのなかに見たような気がした。

この夏はまた、入団してからの間常に疑問を抱きながらも答えられずにいた問いにひとつの答えを見つけられたとも思っている。それはすなわち「わたしがいま日本で JRYC の活動をする社会的意味とはなにか?」。ずっと私は、物理的にも心理的にも遠く離れたルワンダという国、そしてそこでおこったジェノサイドに興味があったのだが、しかしこのことは私が大学生としていまの日本社会でこの活動をする意味ではないような気がしていた。それだから一年間何度やめようと思ったか知れないのだが、しかし、今では JRYC での活動は、ルワンダに対して学生の私ができた最善のかかわり方であったと感じている。つまり、JRYC はルワンダの貧困を改善したり、ルワンダコーヒーを日本で売ったりしているわけではないけれど、ルワンダの次世代を担う同世代の学生と会話し生活することそれ自体が、大学での学びの実践であり、学生としての助け合いのかたちなのだと思う。例えば、私が企画のリーダーを務めた LGBT についてともに考える企画では、予想はしていたがルワンダ学生は LGBT という言葉さえ知らなかった。そして控えめではあるが自分は彼らを認めることはできないという発言が多かった。大学でセクシュアリティに関する授業をとってきた私にとってそれは衝撃的でさえあった。企画を通して彼らのうちの数名は性的マイノリティの持つ問題を社会全体の問題であるというように考え始めたが、しかし数名はそ

うではなかった。自らに深く根差す価値観は簡単には変わらないし、絶対的に正しい意見などない。しかし、私はそれでいいのかなあと思っている。彼らがルワンダに戻って、電車にのるとき、友人と話すとき、彼らが隣にいる人のことを新たな視点から思いやることができたら、十分だと思う。そして、彼らが日本でした経験を友人と話してくれたら、私が大学で学び考えたことは彼らのなかで生きてくれる。それが大学で学問をする学生がお互いに助け合い、相互理解のその先に進むためのひとつの道であると思う。

話しあうことからすべてが動き出すということを肌で感じた夏であった。

初めての本会議

同志社大学法学部 3年

栗原千華

私は5日間しか本会議に参加できませんでしたが、その中で初めて関東メンバーやルワンダ人と対面することができ、一緒に活動しているという実感をつかむことが出来ました。

私が今回の本会議の中で一番印象に残った活動は、LGBT 企画です。今世界中で LGBT に関する問題が話題になっているが、私はこれまで身近に感じたことが無かったため真剣に考えたことはありませんでした。しかし、勉強会やダイバーシティセンターアイリスの訪問、そして藤元敬二さんとのトークセッションで LGBT に関する知識が増え、考え方も変わりました。

勉強会では、ルワンダ人の LGBT に対する考え方を知ることができ、交流の意義を感じました。ルワンダでは日本と違い LGBT がキリスト教という宗教と深く関わっている現状から、個人だけでなく国全体が関心の薄い問題であるという印象を得ました。実際、LGBT という言葉を初めて聞くというルワンダ人学生もいて、ルワンダでも性の問題で苦しんでいる人がいるはずなのに国民の認識がない状況ではどのような思いでいるのだろうと疑問がわきました。また同時にルワンダ政府の対応についても興味がわきました。

そのような中で訪れた渋谷区のダイバーシティセンターアイリスでは、日本の行政の LGBT に関しての取り組みやまだ全国ではあまり進んでいないことを知り、ルワンダとの類似点を見つけることが出来ました。このような比較ができたのは勉強会での意見交換の

おかげだと感じました。また、ルワンダ人の視点からの質問は自分が考えもしなかったことなので新たな見方も知ることができました。

そして、藤元敬二さんとのトークセッションではアフリカの現状をじかに聞くことができ、勉強会での疑問を解消することが出来ました。一般のお客さんにも聞いていただく機会が得れたことは、この問題に対する関心を広めるきっかけになったのではないかと思います。同時に多くの人にルワンダという国についても興味を持ってもらえる機会にもなったと思います。

このように LGBT 企画ではいろいろな側面から考えることができたので理解が深まりました。ルワンダ人も真剣に LGBT について考えてくれたので内容の濃い企画になったと思います。

本会議で一番重要な学生会議では、様々なトピックでのプレゼンだったので自分の全く知らない話題に関して意見を持つことは難しかったです。しかし、ルワンダ人の生の意見や考え方を聞くことで学生会議というものを実際に体験できたことはよかったです。特に興味深かったのは、ルワンダのビザ配給政策での周辺国との関わりについてです。アフリカの政策について丁度学んでいたもので、経済だけでなくビザに関しても協力体制があることには驚きました。このようにネットの情報だけでは詳しく知れないことも実際にアフリカの人から聞いたことは学生会議に参加できてよかったと改めて感じることができました。また、ルワンダ人と初めて交流しましたが、みんな明るく自分の意見をしっかり持っている姿はいい刺激になりました。

初めての本会議では本当に多くの体験をすることができ、有意義な時間を過ごすことが出来ました。もっと英語を勉強しとけばよかったなどの後悔もありますが、これからもルワンダ人との交流をしたいという気持ちがさらに増す本会議になりました。



ハンセン病から考える今後の社会

同志社大学政策学部 3 年

田中瑞幹

ハンセン病…今ではほとんど聞くことのない病気である。しかし、その裏側で現在も病気による差別に苦しんでいる人がいるのも事実だ。そのような現状を体験者の方から聞けるという機会を持てたことは非常に貴重であった。

ハンセン病の歴史は大きく分けて3つある。1つ目は、「自由を奪われる」である。明治以降、様々な法律が制定され、患者は一般社会から隔離された。特に、1953年に制定された「らい予防法」は差別を拡大したとされている。2つ目は「普通の暮らしを求める」である。差別を受け避難されてきた患者たちは、療養所内で自立したコミュニティを形成した。患者たち自身で社会を作り始めたのだ。その結果、療養所内には様々な設備が整えられた。3つ目は「人間回復を目指す」である。1998年7月、熊本地裁に「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟が提訴され、2001年に原告が勝訴した。また、補償に関する法律もでき、国による患者への謝罪も行われた。しかし、世間に根付いたハンセン病への偏見は未だ消えてはいない。人々の偏見をいかに取り除き、後世に語り継いでいくことが重要である。

一方で、このような差別や偏見はハンセン病に限ったことではないだろう。例えば、障害者や在日外国人、女性などである。特に障害者に関しては、幼少時の教育段階から別々に教育されるため、健常者は自分と異なる容姿や性格の人間を受け入れ難いという現象が生まれる。そして、その結果が7月26日に発生した「相模原障害者施設殺傷事件」である。まさに、ハンセン病と同じ現象だ。

多文化社会として有名なカナダの大きな高校では、障害者と健常者が生活を共にするという環境が整えられている。すぐにそう言った政策を打ち出すことは難しいかもしれないが、週に1度でも交流する機会を設けることができれば改善に向かうのではないだろうか。このように、ハンセン病による差別・偏見を通して、今後の日本社会のあり方が見えてくる。誰もが人間であり、誰もが生きる権利を持っている。その権利を他者が妨害するような社会であるべきではない。ハンセン病企画を通じてそのように感じた。

初めての本会議

早稲田大学人間科学部 2 年

堤谷季里

つい 1 年前まではルワンダという国自体知らなかったが、この団体を知り活動していく中でルワンダ、アフリカにどんどん興味を持つようになった。私の今回の本会議の意欲としては、自分にとって未知だからこそもっとルワンダの事を知りたい、ルワンダと交流したい、まずはルワンダについてたくさん知りたい一心だった。また、団体の活動理念である「相互理解」についても活動していく中で考えていければと考えていた。

準備の段階ではまだ本会議がどのようなものなのかも漠然としていて、なかなかイメージができなく、不安な事がたくさんあった。しかし、いざルワンダメンバーと会ってみると、みんなとても気さくに話しかけてくださって、不安は一気になくなり、「楽しい！」という気持ちの方が大きくなった。キニヤルワンダ語を教えてもらったり、日常生活や文化の違いなど素朴な疑問にも答えてもらい、とても感謝している。また、ルワンダメンバーはみなとても勉強に対する意欲が高く、自分の担当した議題について議論が盛り上がり嬉しかったし、他のメンバーの議題についても、自分もより一層学習できたと感じた。

しかし、今回の本会議は初めてだった事もあり、準備の段階や本会議中でもごたついてしまう事があった。企画書を書き、みんなにアドバイスのもらいながらまた企画書を改善していく。納得のいく企画を練ったら次は実行に移し、各関係者に連絡を取る。イベントを作り上げるその工程自体が初めてで、戸惑う事も多々あったが、学生のうちにこれを経験できた事はとても嬉しい事です。その際先輩方にたくさんお世話になり、ありがとうございました。また、今回の本会議で会計を務めさせていただき、これもまた分からない事ばかりで多々ご迷惑おかけしたが、メンバーの協力のおかげで何とかやり遂げる事ができた。会計を担当した事でルワンダメンバーとも話す機会が多く、それも仲を深める手助けになったと感じている。

今回の本会議を終えて、以前より格別にルワンダの事を知る事ができた。同じ議題に対しても日本側、ルワンダ側、双方の考え方を共有できたことで、知識を得ることができた。でもまだまだ足りないと感じている。団体に入ってからすぐに本会議の準備が始まったこともあり、ルワンダに関する勉強があまりできていなかったのも、今後頑張っていくつもりだ。また、日常会話はある程度できても、学生会議中に英語がわからなくなることがあり、幾度か悔しい思いをしたので、英語力もアップさせたい。さらに、勉強を進めていく事で団

体理念の「相互理解」、そして自分がこの団体で何をしたいのか、について探求していきたい。

最後になりますが、お世話になりました先輩方、企画に協力いただいた方々、団体メンバーに心から感謝申し上げます。



日本招致を終えて

青山学院大学国際政治経済学部 2年

西野由花

今回の日本招致は、私にとって初日本ルワンダ学生会議で初めての本会議だった。手探り状態のままに企画を担当し、先方とアポイントを取り、ルワンダ側メンバーとやり取りをし、そしてあっという間に本会議がスタートしていた。初めて出会ったルワンダ側メンバーへの最初の印象は良い笑顔！ということだ。日本という慣れない土地にもかかわらず、笑顔で私たちを迎え、初日から牛丼に挑戦する彼、彼女たちのエネルギーは素晴らしく、遅まきながらこの会議は絶対に成功させなければいけないと覚悟した。

招致企画で、意思の疎通の楽しさももどかしさも感じ、企画に喜んでくれればこちらも満足感が出るし、トラブルが起きて慌てることもあった。どうすれば彼らに今の日本を教えられるのか、どうすれば私たちの生活を知ってもらえるのか、相互理解とは何か、考え続けた16日間だったと思う。

その中で印象に残るのは、彼らの日本というものに対する貪欲な姿勢だ。日本の街中にあ

るあらゆるものに対してあれは何？これはどうして？日本語でこれはどういう風に言うの？と尋ねてくる子供もかくやというこのような姿勢はそのまま日本を知り、受け入れてくれようとする姿勢なのだと思うと、こちらも説明に力が入る。「ホントニ？」と習ったばかりの日本語で驚きを示してくれたり、「オハヨウゴザイマス」と毎朝日本語で言われればこちらも「Muraho（こんにちは）！」と返したくなる。次は私が、ルワンダで彼らに質問攻めをするのだろう。

私はこの日本招致の中でルワンダの友人たちが一つでも「何だこれは?!」と思い、心に留めてくれるものがあれば、それが相互理解のきっかけの種として日本とルワンダの間に根付くのではないかと思った。

こんなにも日本に、日本人である私たちに対して好意的な意識を持つ人ばかりが世界にいるのではないことは分かっているし、お互いに憎しみという感情を相手に抱く関係を持つ人々が世界にはいることも知っている。けれど、こうして、相手の中で何か自分の心に引っかかるものが見つけれられたなら、私たちはそれをきっかけに本で調べたり、テレビのニュースを気にしたり、少しずつ相手を自分の中に取り込んでいけるのではないだろうか。願わくは、たくさんの「何だこれは?!」を感じたり、感じさせたりする、そんな会議を次は目指したい。

相互理解 2 年目

上智大学経済学部 2 年

林 陸

「あなたが私をもっと知っていれば、あなたがあなた自身をもっと知っていれば、このような悲劇は起こらなかつただろう」日本ルワンダ学生会議のメンバーならば誰でも知っているこの言葉は 22 年前のジェノサイドの実際の現場となった教会の壁に描かれている。植民地時代に宗主国ベルギーから恣意的に定められたツチ族、フツ族という民族分断は長い植民地時代を通じて、民族のみならずそれぞれの個人の心も分断してしまった。宗主国への不満が一揆や革命を引き起こさないように少数派のツチ族による間接統治をさせ、それにより

不満が民族間で生まれた。第二次世界大戦が終了し、国として独立した後も対立の火種は途絶えず、いつしか愛すべき隣人を憎むべき隣人として捉えるようになったのであろうか、1994年、20世紀最悪のジェノサイドと言われるルワンダ虐殺が起こった。お互いがお互いをより理解していれば、民族という無機的な扱いをせずにひとりひとりを個人として仲良くすれば、こんなことは起こらなかったのではないか。長くなってしまったがこれが、先の教会の言葉に対する日本ルワンダ学生会議の解釈である。そのため、私たちは「相互理解」という理念を掲げてこの活動をしている。

昨年の5月、大学1年生だった私は当時の代表からこの話を聞き、非常に共感した。父親がいわゆる嫌な考えを持った人であるということも理由の一つだったかもしれない。それ以来、十人十色の思いを抱いて活動しているメンバーに触れ、それぞれがそれぞれの相互理解を模索していた。私も自分なりの相互理解を探してきた。去年は一部の企画のみの参加だったこともあり、学生会議で議論してお互いの意見をぶつけ合うイコール相互理解ではないかと思っていた。もちろん今でも団体のメインの活動である本会議が相互理解につながることはないとは思っていない、ただあくまで相互理解の一部であるというだけだ。

今年の本会議を終え、振り返ると自分の中での相互理解が変化を見せた。特に大きな影響を与えたのはより長く過ごしたルワンダ人メンバーとの時間と、群馬企画で観光協会副会長小野修一様から伺った多文化共生についてのお話しである。昨年よりもルワンダ人メンバーと過ごす時間が増えたのは彼らをより「理解」する手助けになったと感じる。その時間がすべて議論、コミュニケーションに費やされる必要はない。一緒にテレビゲーム(ウイニングイレブンはかなり白熱した)で遊んだり、ご飯を作ったり、買い物をしたり。言語を通じたコミュニケーションでなくても仕草や癖、振る舞いも相互理解の大きな要因の一つとなりうる。当たり前のことではあるのだが、共に過ごす時間が長い程より相手を理解することができるという事を、身をもって実感した。

話は変わるが、昨年の招致活動後初の海外旅行で約4週間、バックパッカーとして1人でミャンマーに行った。日本語はもちろん、英語も伝わらないことのほうが多い国で、何かあったときに頼れる同行者すらいない。少なくとも英語である程度のコミュニケーションが取れることは必要条件であった。私の英語力は、この旅行を通じて変化したと思う。ミャンマーからの帰国後も、外国人の友人と頻りに話したり英語で開講されている授業を受講したりするなど、出来るだけ英語に触れられる環境に身を置いた。手前味噌な話で恐縮だが、こうした努力が今回の本会議で一定実を結んだと私は感じている。担当している群馬企画では企画での通訳を任せられることもあり、ディスカッションも自分の意見をより明確に主張でき、相手の意見をより正確に理解できるようになった。心なしか学生会議や企画以外の場面、プライベートな会話、日常的な会話もより楽しめた。

これまで私にとっての今回の第15回本会議を相互理解、英語力の2つの側面で振り返ってきたがどちらもまだ今回で完成形だとは全く思っていない。英語面に関してはまだ相手の言っていることをしっかりと理解できていない部分もあった。英語がもう少しできるようになれば、より込み入ったディスカッションや高いレベルの通訳ができるようになり、この学生会議は自分にとっても団体にとってもより充実した経験になると思う。そして、昨年から考え続けた相互理解もまだ自分にとって腑に落ちるレベルで理解できていない。去年より少しクリアになった、来年は今年よりも少しクリアに捉える。もしかしたら相互理解とはそんなものなのかもしれない。はっきりとした答えなんてなく、人それぞれ、しかもその人個人でも時期によって理解が変わってくる。答えがいつまでも一つに定まらないその曖昧さに耐え、楽しむのが相互理解を追求しているこの団体の醍醐味なのではないか。私にはそう思えてならない。

最後になったが、この場を借りて今回お世話になったすべての方々にお礼を申し上げたい。大泉町の歴史をお教えいただき企画のコンテンツ作りまで携わってくださった大泉町観光協会副会長小野修一様、通常は公開していない工場内を私たちに見学させてくださった丘山産業株式会社の米澤洋司様、多方面のアポ取り・コネクション作りのお手伝いいただき、多くの差し入れ下見時には丸一日つきっきりで案内していただいた丘山商事株式会社取締役業務部長米澤孝史様、企画段階から当日まで手厚く企画の細々なお手伝いまでしていただいた大泉町観光協会事務スタッフ富樫ジュリアナ様を初めとして、群馬企画はたったの4日間であったが様々な方のお世話になった。東京企画を含めた全日程では無論さらに多くの方々のご協力をいただいた。このような皆様のご厚意に感謝し、また支えられていることを忘れずこれからの活動をすすめていきたい。



学生会議に参加して

同志社大学商学部 2年

美崎絢香

初めてルワンダと合同で行う学生会議にちゃんとかかわれるかどうか最初は不安に感じていた。そのうえ、今回の第15回学生会議のオープニングイベントであるルワンダカフェを担当していたので不安も倍増していた。

ルワンダカフェは一般の方も交えてのルワンダとの交流会のため各テーブル上でのトークが盛り上がるかどうか、ルワンダのプレゼンテーションは大丈夫なのかなど不安は感じていたものの、いざ始まってみれば参加者の皆様が楽しそうに会話し、各テーブルでのトークが静かにならずに盛り上がっていたので良かったと安心した。プレゼンテーションについても無事行うことができたので良かった。結果的に、ルワンダ参加者の皆様がとても楽しんでくださったようで、この企画を担当できてよかったし、オープニングイベントとして、次の企画にきちんとつなげる形で終わることができたと感じている。

学生会議の中で中でも印象的だったものはLGBT企画である。その中でも、ルワンダのLGBTのとらえ方、藤元敬二さんのトークセッションが印象的であった。なぜ、印象的だったのか。ルワンダのLGBTへのとらえ方については、LGBTである人への感覚を、日本では別の世界の人というとらえ方が数多くある中(あくまでも個人的な感覚)で彼らはあまり意識せずに生活しているという風を感じ、日本とルワンダの価値観の違いを感じたからである。藤元さんのトークセッションについて印象的だった理由は二つある。一つ目は、普段の生活内では聞くことのできない貴重なお話を聞いたこと。二つ目は、藤元敬二さんの人柄がとてもよく、トークセッション自体が和やかであったことである。ルワンダのLGBTについての話は、普段聞くことは絶対に聞くことができないだろう。そんな話を写真を交えてお聞きすることができたためなお、印象に残るものだった。また藤元さんの人柄についても堅苦しくならず、居心地のよい環境でトークセッションが行われていたので、個人的にルワンダについて伝わりやすいトークセッションでとてもいい企画だったと感じている。

今回での次回に向けて変えていきたいという反省点は、自分の英語力の足りなさである。英語力が足りないがゆえに、ルワンダが用意してくれたプレゼンテーションの内容をきちんと理解することができなかつた上にプレゼンテーション後のディスカッションにも参加できなかったことを残念に感じている。また、普段ルワンダと会話するときも思うよう

に自分の言いたい言葉がでてこず、なにを話したらいいかわからなくなり、ルワンダを前にして会話ができなかったことはルワンダにも迷惑をかけていたのではと反省しているうえ、自分自身も会話できないことへのふがいなさを感じていた。

最後まで参加することはできなくて残念だったが、短い期間の参加でも学生会議内で、多くのことを学べた。また、普段知ることができないルワンダのことを知ることができ短いながらも本当に充実した時間を過ごせた。

相互理解と信頼

東京女子大学人間科学科 2 年

水口あすか

「ありがとう」本会議を振り返ってまず出てくる言葉は感謝ではなく、「ありがとう」という言葉だ。私にとってこんなにも長期間一つのことに集中し、考え、悩んだことは初めての経験だった。

昨年の 5 月に入会した日本ルワンダ学生会議（以下、JRYC）。1 年前の 8 月に日本で行われた本会議で初めてルワンダ人メンバーに会った。どうやって話しかけよう（ドキドキ）、学生会議も先輩方に自分のプレゼンを何度も何度も見て頂き、ディスカッション中もなかなか英語が出てこず緊張でいっぱい、自分のことを考えることで精一杯だったことを今でもよく覚えている。そして、今年の 2 月、ルワンダで行われた本会議に参加した。ルワンダ側、日本側の参加者の中で最年少だった私は常に周りのメンバーに甘えていた。いつも先輩メンバーが気にかけてくれて、淡々と自分のやるべきことのみをして、自分は周りの迷惑にならぬよう自分のことだけを心配していた。しかし、ある時、「先輩方がいなくなったら、今後の JRYC はどうなるんだろう。今の私は、せっかくルワンダにいるのもったいないことをしている。いつも自分を守るばかりで、他の人のためには何もできていない。」急に本会議中にも関わらず、その次の本会議のことが心配になった。その一方で、ルワンダメンバーのホスピタリティに感動し、ルワンダの綺麗な風景に圧倒され、フレンドリーなルワンダ人に親近感を覚え、どんどんルワンダが大好きになった。「次に日本に来るメンバーにも日本で日本の良さをたくさん知って欲しい、また彼らに会いたい。」色んな想いの中、

私は、ルワンダにいる時に、第15回本会議のコーディネーターを務めたいと決心した。

実際に、コーディネーターとして動き出したのは4月。時間が限られる中で、予算を組んだり、企画書を詰めたり、やるべきことは膨大にあるのにそれらをスマートにできない自分に苛立ちを感じたり、メンバーの半数以上にとって初めての本会議である中でどうやってみんなの想いを形にしようかと悩んだりしていた。しかし、他のメンバーや JRYC を応援してくださる方々のお蔭で無事に4人のルワンダ人メンバーを招聘し本会議を行うことができた。自分自身の反省や書きたいことは沢山あるが、今回は「相互理解」と「信頼」について書きたい。

「相互理解」。コーディネーターとして活動する中で何度も考えた。しかし、一番感じたことは相互理解にはまず自分のことを知る必要があるということだ。私はこれまで、リーダーになる機会はよくあった。しかし、和を意識し、空気を読みすぎるあまりリーダーになると遠慮しすぎるとよく周りに言われた。今回もこのことを指摘され、自分の嫌な部分と向き合う毎日だった。また、なかなかメンバーのモチベーションも上がらず良い雰囲気ではなかった。しかし、このままでは、後悔しか残らないと気づき、多少の凶々しさもありながら、私らしく明るく元気に毎回のミーティングを行うように心がけた。すると、団体の雰囲気も少しずつ変化しみんなが第15回本会議に向かっていこうという動きができた。この時に学んだことは、相互理解する中で、まずは自分自身と向き合うこと、また周りを変えるためにはまずは自分が変わろうとすることが大事だということだ。

群馬企画ではホテル生活が続いていたこと、朝早くから夜遅くまで企画があったこと、暑すぎる気候のせいもあり、日本人メンバー、ルワンダ人メンバーみんながいらいらしていた。しかし、しっかりコミュニケーションをとったり、ルワンダ人メンバーからダンスを習い一緒に踊ったりしているうちに自然と心身共に力が抜けた。学生会議等でお互いの意見や考えの違いを知ることもちろん大事だが、たわいもない会話、何気ない交流を通して距離がより近くなった。結局は人だな～と思った。日本は他の国以上に〇〇人、〇〇人といったように国籍の壁があるように感じる。このような意識が、世界的に見ても驚くほど低い難民の受け入れや、多文化共生社会の問題につながっていると思う。国籍の枠を超え、その人を〇〇人ではなく、〇〇さんと見ることが当たり前になると色んな事が変わってくるのではないかと思った。今回の本会議を振り返り、間違いなく言えることは「相互理解」について真摯に向き合い考えることが日本社会には必要であるということだ。だからこそ、相互理解を理念に活動している私たちはもっともっと私たちの活動に対して発信していく責任があると思う。

「信頼」。相互理解が進むことで、次は相互信頼に繋がっていくことを実感した。今回のルワンダ側のコーディネーターNadia は、私がルワンダでの本会議の際にホームステイを

させて頂いたメンバーでもある。ルワンダでの本会議の中も彼女と誰よりも話していたこともあり、彼女が日本に来ると知った時は非常に嬉しかった。コーディネーターとしての仕事も早く、私は彼女のことを信頼していた。時差を考えずに何度も確認の電話がかかってきたこともあるが、本会議に関係ないことまで話し、相談できる私にとってお姉さんの存在だった。スケジュール変更に対しても、Nadia なら大丈夫だろうと心配することも少なかった。本会議中にも、持ち前の明るさで盛り上げてくれた。Nadia がコンビだったからこそ大きなトラブルもなく第 15 回本会議を終えることができた。空港でのお別れの際に、ぎゅーっとハグをした時には涙が止まらなかった。心配性の私が、心配すること以上に相手を信頼することの大切さを学ぶことができた。

この本会議を振り返り、JRYC は、メンバー一人一人にとっての成長の場だと改めて確認することができた。JRYC の良さをもっともっと発信したいと心から思った。また、このような素晴らしい団体に所属していることを誇りに思った。

最後に、メンバーの皆さん、コーディネーターとして至らぬ点ばかりでしたが、このような経験をさせて下さり感謝の気持ちでいっぱいです。いつもありがとうございます。また、日頃から日本ルワンダ学生会議の活動を、ご理解ご支援して下さる全ての方々に改めて御礼申し上げます。今後とも日本ルワンダ学生会議をよろしくお願い致します。

Murakoze cyane

同志社大学グローバル地域文化学部 4 年

安居綾香

3 年半前、ジェノサイドなんて何も知らなかった。聞いたこともなかった。日本ルワンダ学生会議の多くのメンバーは平和について考えたいと加入する人がほとんどのように思う。大学に入学し、アフリカ、飢餓、貧困といったキーワードに強い関心があるもののどの学生団体の理念にもピンとこなかった。そのようなとき、ある先輩から日本ルワンダ学生会議を紹介していただいた。正直最初は「よくわからない国」と交流する団体に不安を覚えていたが、「相互理解」という理念は私の心にズキューンと刺さった。私がしたいこ

とはこれだ！と思った。そしてルワンダについて知れば知るほど興味が湧いてきたのだ。そして第14回本会議ではついにルワンダに渡航することができた。

そのような私にとって、第15回は最後の本会議だった。渡航に参加し、ルワンダを自身の目で見て感じて、ルワンダ側のメンバー全員と仲を深めたことで、私のルワンダ愛は大きくなった。(帰国後はついつい街でルワンダコーヒーを探してしまうほど。)そして、渡航から今回までルワンダメンバーと毎日のように連絡を取り合い、第15回がとても楽しみだった。今までの招致では、はじめましてから始まり、仲良くなるまでにある程度の時間がかかったが、今回は感動の再会のハグから始まった。そのため、企画内外問わず、はじめから深い話をすることができた今回は、より信頼・絆を深められたように思う。

先にも述べたように私は「アフリカ」に随分ぼんやりしたイメージを抱いていた。しかし、日本ルワンダ学生会議の活動を通し、ルワンダだけではなくアフリカの多様性も考えるようになった。もちろん日本とルワンダの両国を対比することが多いが、次第にルワンダに焦点を合わせてその他の国と対比させて考えるようにもなった。そのような中で、一つの国を知れば知るほど物事への見方が変わるおもしろさを実感した。そして、本会議を重ねるごとに積み上げられる「違い」の数々が私の価値観を広げてくれたように思う。その「違い」がときには怒りや悲しみ、戸惑いを与えることもあったが、多くは刺激と笑顔を与えてくれた。こんなにも「違い」がおもしろいということをこの団体が教えてくれたのである。

しっかりもののメンバーに感化されながら活動できた3年半は私にとってかけがえのない時間になった。また、途中ひとりぼっちだった関西にも心強い後輩メンバーが加入してくれたため、残りの半年間は彼女たちと少しでも関西地域でルワンダに関心を持ってもらえるように活動に取り組みたい。そして、来年以降は社会人としてビジネスの場で「相互理解」を自身の理念として日本とルワンダをはじめとする国々を繋げようと思う。

最後に、日本ルワンダ学生会議をいつも支えてくださっている方々、ルワンダ渡航を許してくれた両親、ルワンダメンバー、日本メンバーに心からの **Murakoze cyane** (ありがとうございます) を伝えたい。

招致で得た学び

上智大学文学部 2年

柳田瑞季

先入観や固定観念。自分の中に無自覚の内に根付いていたこれらを取り払うことが、今回の招致に参加するにあたって心の中に掲げていたテーマでした。

日本から遠く離れたアフリカの国、ルワンダに対するわたしのイメージは良いものばかりではなく、参加するまでは多少の差別意識を持っていたことは否定できません。団体に所属してから文献等でルワンダについて学ぶようになったものの、その知識はまだ乏しく、無知がゆえに勝手なイメージばかりが先行していたように感じます。そのため、直前まで期待や楽しみといった感情より不安が勝っている状態でした。しかし、その不安はルワンダ人たちと会った瞬間、即座に消えました。8日目の群馬企画から途中参加したわたしを彼らは温かく迎え入れ、積極的に話しかけに来てくれたのです。日本の社会状況や若者事情、そしてわたし自身のことにも興味を持ってくれ、移動中や休憩時間に様々な質問を投げかけてきました。彼らとコミュニケーションを取る中で驚かされたのは、とにかく頭の回転が速く、こちらの言うことに対し常にユーモアを交えた適格な返答をしてくれたことでした。それまで自分は、アフリカの国や人々に対し「発展途上」や「明るく陽気だが少し怖い」といった印象しか持っていなかったため、彼らの頭の良さに触れたことは大変刺激的でした。学業には殊更熱心に取り組んでいる様子で、ルワンダの更なる発展を心から願っており、日本からその術を多く吸収しようとしている姿からは逆に学ばされるが多かったように感じます。

群馬企画の中で、とても印象的だった光景があります。それは、**No border** とまなばるを訪れた際、子どもたちが初めて出会うルワンダンに対し全く怖がる様子を見せず、すぐに打ち解け仲良く遊んでいた様子です。言葉も通じず、肌の色も違う彼らを見て小さな子どもたちがどのような反応をするのか最初は心配していましたが、楽しそうに遊ぶ姿を見てそのような心配は無用であったと感じました。「黒人と会ったら怖がるのが当然」と考えていた、それこそがわたしの中の固定観念だったのかもしれませんが。このような固定観念は、限られた環境でしか生活せず、異文化についての情報は媒体を介してのみ享受してこなかったことで形成されたものだと思います。ある国や人々に対するイメージが固定される前から、様々な文化に直接触れコミュニケーションを図ることで、見知らぬものへの差別や偏見意識は生まれなくなるのではないかと考えました。

自身の都合により全日程に参加することはできませんでしたが、非常に学びの多い充実した日々を過ごすことができました。担当した水族館企画では、多くのメンバーからアドバイスや気遣いをさせていただき本当に感謝しております。この夏の出会いと経験を通して、自分の中で確実に何かが変わりました。ある物事に対して固まったイメージを抱くことをやめ、これからは広い視野で周りを見渡しそして様々な人と関わっていこうと思います。



再会、絆、集大成

早稲田大学社会科学部 3年

山崎 建

今回の本会議は私にとっては 3 回目の日本招致であった。初めて日本招致に参加したのは 1 年生の冬 (第 12 回本会議)、入会してからわずか二か月後のことであった。二回目の招致は去年の夏 (第 13 回本会議)、次回はルワンダ渡航に参加すると決意した本会議であった。そして今年 2 月のルワンダ渡航 (第 14 回本会議)。現在のルワンダを実際に見て、聞いて、感じることで自分の中の世界が広がった。かけがえのない時間だった。

今回の本会議に参加したルワンダ人は、私たち日本人がルワンダ渡航中、ほとんどの時間

を私達と共に過ごし、また私たちに多くのことを教えてくれたメンバーである。「今度は私達の番、彼らを招致し、日本で様々な経験をしてもらいたい。彼らと相互理解をより深めたい。」このような思いを抱いていた私にとって、第 15 回本会議には特別な思い入れがあった。今回の招致活動において、私は昨年の本会議のように個人で企画を担当するのではなく、東京企画全体のリーダーとして参加した。私たち日本人がルワンダを訪れたとき、彼らは私達日本人の意見を尊重してくれた。訪れたい、実践したいと思った企画のほとんどをルワンダで実現することができた。

私達がルワンダを訪れたときと同じくらい、それ以上に彼らにとって日本に滞在するというのは貴重な機会である。準備段階からとにかく彼らルワンダ人の希望に応え、学びの多い時間にしたいと考え準備を進めてきた。結果として、彼らが訪問を熱望していた Sony と水族館に企画として訪問することができたことは非常に嬉しく思う。

第 15 回本会議は東京都、群馬県の二都県において約 2 週間にわたり開催されたが、私はほぼ毎日参加することができた。これまで参加した 2 回の日本招致では、個人的な海外渡航と日程が重なり途中で抜けてしまっていたが、今回の日本招致は彼らと 2 週間、濃密な時間を過ごすことができた。参加することのできた 2 週間すべての日が充実したものであり、日本人の私も十二分に楽しみ、学ぶことができた。

第 15 回本会議は私にとって、彼らルワンダ人との絆を再認識することのできる招致であった。成田空港で彼らの到着を待っている間、私は 2 月にルワンダのキガリ国際空港に降り立った時のことを思い出した。あの時、少し緊張したぎこちない笑顔で「Welcome to Rwanda!」と言いながら彼らは私を迎えてくれた。お互いに緊張していたのは最初だけだった。渡航中に彼らとは色々な話をした。現在のルワンダ事情やお互いの勉強している分野のことはもちろん、他愛もない話でゲラゲラ笑ったりもした。ただただ楽しかった。大切な親友をルワンダで見つけることができた。最終日、空港で分かれる際には悲しい、寂しいとはあまり感じなかった。日本で待っている、また半年後に日本で会おうと約束していたからだ。そして今回その約束が実現した。彼らが空港の到着ゲートから姿を見せたときは言葉にしがたい感動と嬉しさが込み上げてきた。「Welcome to Japan!」と言いながら私は彼らを迎えることができた。久しぶりの再会に喜びを感じつつもいよいよ始まった本会議に対して気を引き締めた空港での初日であった。

今回の本会議で、私はホームステイを受け入れることができた。普段から海外旅行に行っていること、ルワンダが安全な国であることを伝えていたので、ルワンダ渡航をする際は快諾してくれた両親はホームステイの受け入れも快諾してくれた。英語が話せないから大変だと嘆いていた両親だったが、それ以上に楽しみにしているのが伝わってきた。彼らルワンダ人をホームステイさせることはルワンダ渡航の際に彼らと約束していた。ホームステイ

の時間は私の家族にとっても非常に有意義な時間であった。私は父の影響で幼いころから少林寺拳法を習っていたのだが、彼らにはルワンダ渡航の際にそのことを伝えていたので、父から少林寺拳法を教わるのを楽しみにしていたようだ。また、母は空手の有段者であり、ルワンダで一時期空手を習っていたメンバーと一緒に練習していた。両親も彼らルワンダ人も通訳なしでは言葉は通じない。しかしこの時、両親とルワンダ人は言語の違いなど関係なく、相互理解に近づくことができたと確信している。他にも、彼らは少林寺拳法の道衣（どうぎ）を試着したり、ルワンダの伝統的なダンスを披露してくれたりした。両親と一緒にルワンダ語、日本語の勉強もしていた。彼らルワンダ人に日本を学ぶ貴重な機会を提供してくれた両親には感謝している。またホームステイを通じて、私がこれまで続けてきた活動について両親には改めて知ってもらい良い機会となった。

2都県をまわり、ホームステイも受け入れた2週間は濃密ではあったもののあっという間だった。最終日は夜遅くの飛行機で彼らは帰国の予定だったのだが、空港に着いてから彼らとの別れの時が近づいていることをようやく実感した。涙が止まらなかった。話したいこと、伝えたいことはまだまだたくさんあったと思うが伝えきれなかった。彼ら一人ひとりから別れ際に言われた言葉は一生忘れないだろう。来年また個人的にルワンダに行く、ということとを彼らと約束した。きっと約束は果たせると思う。

第15回本会議は、私にとって日本ルワンダ学生会議での活動の集大成であった。参加できたことを心の底から嬉しく思う。「相互理解」というゴールの見えない目標をこれまで模索し続けてきたが、その中で多くのことを学び得ることができた。この団体で学んだことは今後も様々な場で活かすことができると確信している。またこの団体で活動したことで何よりルワンダが好きになった。

最後に、日頃より弊団体を支えてくださっている皆様に厚く御礼申し上げます。これからも弊団体を温かく見守っていただければ幸いです。

ルワンダンに出会って

早稲田大学人間科学部 2 年

吉田萌子

今回の本会議は私にとって初めての招致活動であった。今年二月、私は日本ルワンダ学生会議に入った。この団体に入ったきっかけは、「ルワンダ」という未知の国に妙に興味を抱いたからである。私にとってルワンダという国は、「歴史の教科書に出てくる国」という印象でしかなかった。それも、「世界の数ある紛争を数行で書き表したうちの一つ」であった。実際に団体に入って活動を始めても、日々のミーティングや招致の準備でルワンダンとは連絡をとっていたが、私はまだルワンダという国を、ルワンダンを、どこか遠くの存在に感じていた。初めてルワンダンにあった日、これまでの私のルワンダのイメージが変わった。私の中のイメージは、1994 年に起きた虐殺の暗い歴史のみであった。しかし、実際に話してみると私達と変わらぬ学生であり、正直「アフリカなのに」と思った。団体理念として、偏見をなくそうという言葉聞き続けきたが、私も知らず知らずのうちに、アフリカという謎のフィルターを通してルワンダを見ていたのだと実感した。

私は今回の本会議で性的マイノリティについて考える企画を担当した。招致前、アフリカにおける LGBT、ルワンダにおける LGBT について、インターネットを通して調べた。調べていく中で、多くのアフリカ諸国で LGBT の人々が容認されておらず、様々な処罰を受けているということを知った。また社会的・政治的に LGBT についての議論が行われていることがわかった。では、ルワンダではどうであろう？いろいろなサイトを見たが、ルワンダにおける LGBT に関する情報はないに等しかった。実際にルワンダ人学生に聞いてみたが、LGBT という言葉さえ認知されていなかった。性的マイノリティに対し社会的差別・暴力が行われ、それに対して論争が繰り広げられてる国々がたくさんある中、ルワンダでは議論すら行われていない。これに私は危機感を覚えた。無関心こそ最大の罪である。招致前に、ルワンダンが性的マイノリティに対してあまり関心がないこと、宗教的に許されていないことを知り、私はこの企画そのものが成功するか心配であった。「私には関係ない」「宗教的にだめよ」の一言で片付けられるのではないかと不安だった。企画当日、ルワンダンの LGBT に対する反応は軽薄であった。軽薄というより、触れてはいけない話に触れるような感じであった。しかし、LGBT の印象や思うことを、宗教や文化を越えて本音で話し合ううちに、ルワンダンが LGBT に対し、積極的に聞いてくるようになった。「日本の LGBT に対する法律はどうなっているの？」「パートナーシップ条例ってなに？」ルワンダンからの質問は

止まなかった。ルワンダが LGBT に対する理解を深めてくれたかはわからない。だが、以前より関心を深めてくれたことは確信している。

世界どこにいても連絡をとり合うことのできる情報社会。確かにルワンダとはオンラインでも会話することはできる。だが、実際に行って、会って、聞いて、話すことに勝る情報はないであろう。私は今回の招致で初めてルワンダに会い、様々な面で価値観が変わった。また、私の中の当たり前がルワンダにとって必ずしも当たり前ではなく、世界が広がった。同じ年代の彼らと大学生の今出会えたことは、私の中の常識を覆すとても貴重で刺激的な時間であった。

理解『しようとする』こと

早稲田大学教育学部 4 年

渡邊伶

大学 2 年の春に日本ルワンダ学生会議に関わり始め早くも 2 年半。
右も左もわからず始まったルワンダ渡航、その後 3 回の日本招致の経験。
日本招致の 1 回目 (12 回) は佐賀企画のリーダーとして、2 回目 (13 回) は、コーディネーターとして、そして今回 (15 回) は一企画者として、それぞれ微妙に立場は異なり、もちろん得られた経験も異なります。招致自体のテーマも、12 回がルワンダの未来 (ICT と観光)、13 回が平和と発展 (負の歴史の伝承と発展の弊害) と考えがいのあるものでした。
「教育における ICT の役割」、「ルワンダの観光業を発展させるためには」
「負の歴史をどのように伝えれば良いのか」「発展とは良いものなのか」
上記は各企画のテーマの例ですが、どれも簡単に答えの出るものではなく、また日本人ルワンダ人、日本人の間ルワンダ人の間でも考え方の異なるものばかりです。
日本とルワンダ共通の「答えの無い問い」を、それぞれの国・個人の視点から考える、これこそが日本ルワンダ学生会議の面白いところだと個人的には思います。
15 回のテーマは「共生」(招致全体の企画段階から関わっていたわけでは無いので予測半分ですが) で、まさしく現代社会を反映しています。今回も「答えの無い問い」に対して、各々

が考え抜いた結果が、本報告書の各ページに記載されていますので、ぜひご覧ください。(一体誰目線だ、という感じが笑)

さて、今回の報告書で、本会議の感想を書くのが最後ということで、誠に勝手ながら、今まで2年半の活動の総括的なものを記載させていただきます。

15回本会議の感想では無いことをご了承ください。

私が日本ルワンダ学生会議に関わり始めた理由は、実は特別なことは特にはありませんでした。①早稲田活動していたから②アフリカ面白そうだから③ルワンダ(というかアフリカ)に行きたかったから、以上です。大学2年当時、国際協力に関心があった私は、国際協力に関わることのできる団体を探していました。その際に、たまたま目に留まったのが日本ルワンダ学生会議で、上記の理由で特に何も考えずに関わり始めました。(なので、実は“相互理解”という考えに心の底から深く共感したから、というわけでも無いのです) 実はこの時、この年の夏にバングラデシュのグラミン銀行に短期のインターンシップに参加することが決まっていました。グラミン銀行とは、ノーベル平和賞も受賞したムハマド・ユヌス氏の創設した銀行で、貧困世帯の村民に少額の融資(マイクロクレジット)を行う取り組みのことです。高校の政治経済の資料集でみて、私が国際協力に関わりたと思ったきっかけであり、同時に一度は行ってみたいと思っていた場所です。グラミン銀行だけではなく、日本ルワンダ学生会議にも関わり始めたのは、ルワンダに行きたかったため。大学1年の際、本を読み、授業を聞くことが中心で、あまり対外的に活動をしてこなかったこともあり、大学2年ではひたすら外に出て経験をしたい、できれば途上国に長めに滞在する経験を少しでも多くしたいと思っていたからです。(つまり上記に挙げた理由で③が一番強かったということです) ここまで読み、お気付きの人もいらっしゃるかもしれませんが、私は“アフリカ”や“ルワンダ”に対して特別の思い出があり、活動に関わったわけではありません。もちろん活動を通じて、“ルワンダ”や“アフリカ”のことを好きになりましたし、思い出の強い国になりました。しかし、日本ルワンダ学生会議の多くの諸先輩方のように、“ルワンダ”や“アフリカ”に関わる仕事を志したり、実際に就活の際に意識したわけではありませんでした。私が様々な体験をして、知識を得て、最終的に関心を持ち、今も今後も関わり続けていくと決めた分野は、“教育”や“労働”など、人の一生の生き方に関わるものであり、国際協力ではありませんでした(もちろん、将来的に海外の人たち向けに何かする可能性はあり、その場合国際協力とも言えます。個人的にあまり、国内・国外で分けるのはあまり好きではなく、教育や労働に関して、たまたま国内対象でしているというイメージです)では、日本ルワンダ学生会議での経験が無駄だったのか、と言われるとそうではありません。日本ルワンダ学生会議の活動で私が学んだことは、それこそ「相互理解」でした。宗教も文化も異なる人同士、議論した際には違った意見が出るし、また議論の場でもなくとも、日本滞在期

間に一緒に過ごす寝食の時間を通して、ひしひしと感ずることです。

話は変わりますが、昨年8月に実施した13回本会議の後、約半年間私は日本ルワンダ学生会議を離れていました。「辞める」と宣言したわけでもなく、単に距離を取っていました。それは、大学2年時に関わり始めて以来、大学生活の中心にあった日本ルワンダ学生会議を離れて、本当に自分がしたいことを見つめ直す時間を取りたかったからです。前述したように、「ルワンダや”アフリカ”に特別な感情がない私が、なぜ団体に関わっていたのか、そして今後関わり続けるべきなのか、思考を巡らせていたのです。この期間、私は学習塾でアルバイトをしたり、大学2年時から関わっている学習支援団体の活動に深く関わったり、ご縁があって、教育系の非営利法人を立ち上げて活動することになったりなど、運良く自分の興味のある“分野”に思いきり関わらせていただく機会に恵まれて、大変だったものの、やりがいもあり、楽しい時間を過ごしていました。正直、団体に再び戻って来ることはあまり考えていなかったです。しかし、結局15回本会議に関わることになり、企画をもたせていただくことになりました。(今中心に活躍しているメンバーには中途半端な関わりで、色々にご迷惑をかけてしまい申し訳なかったです…)その理由は、「相互理解」をもう一度真剣に考えたいと思ったからです。その経緯は、フランスで起きた同時多発テロ事件(ハンセン病企画のページに記載しましたのでご参照ください)でした。もう一つ、今自分が関わっている教育の分野でも、「相互理解」の大切さを感じていたことも理由です。例えば、教育を行う人と教育を受ける人の「ズレ」(お互いの「背景」を理解しないまま、教育という行為を実施している)、また、自身の受けてきた教育(これは学校教育だけではなく、家庭教育も含む)が意図せず強く影響されてしまい、いざ仕事やまたは就職の際に、不幸なことが起きてしまうということ。やや抽象的な表現になってしまいましたが、これは教育に限らず、「社会変革」に関わる政治家や、起業家など、多くの人にも言えることなのではないかと思えます。現在日本国外問わず、とても多くの人が「社会を変えたい」と意気込み、様々な施策を実施しています。もちろん、主導して積極的に施策を続けることはとても大事なことです。しかし、トップダウンで大きな声をあげたからといって、制度を整えたからといって、本当に社会が良い方向に動いていくとは限りません(もちろん、良い方向に働く場合もあります)社会は人の集まりです。そしてその人は一人一人異なる考え方や文化、宗教を持っています。万人にとって利益となる施策は難しく、だからこそ、ある人にとっては、良い施策が、ある人にとっては良くない施策になる。そこを調整しようとせずに、分かった気になり、こちらだけの考えを押し付けても、社会は良い方向には動いてはいかないのではないかと思います。(もちろん、多くの人がそうしている、と批判を述べているわけでは決してありません)調整するためには、人がそれぞれ、そのような背景を持つに至った理由を丁寧に聞いていき、理解「しようとする」姿勢が必要で、とても時間と労力のかかることです。ちな

みに、私は来年大学を卒業し、就職をして社会にでますが、上記の様々な人の考えや背景を聞く仕事から始める予定です。社会にある様々な「声」を聞いたからといって、何か変わるわけでもないかもしれません。ただ、今後生きていく上で、土台になる大事なことなのではないかなと信じています。

さて、長くなってしまいましたが、これで私が書きたかったことを全て書くことができました。

最後に、本企画の実施にあたり、ご協力いただいた皆様、初参加の人が多く、右も左も分からないまま企画を進め、成功に導いたメンバー、本当にありがとうございました。近年、アフリカに対する注目は高まり、また「共生」について問い直される機会は増えていくでしょう。日本ルワンダ学生会議の持つ役割は益々大きくなります。日本ルワンダ学生会議を、今後もお声援をいただけますと幸いです。



REFLECTION ON THE JRYC 15th CONFERENCE IN JAPAN

Jean Berchmans IMANISHIMWE

My name is Jean Berchmas IMANISHIMWE; I'm a Pharmacy 5th grade student in the College of Medicine and Health Sciences of the University of Rwanda. I have got a chance to attend a 15th JRYC conference from August 1st up to 16th August 2016. The conference comprised of many and various projects. We made presentations, we made study meetings, and we went for sight-seeing events. I was very surprised, and impressed by the Japanese society.

During the conference, we had time to discuss about various topics. We discussed on social, self-development, and cultural topics. These presentations were very efficient. The most interesting part was group discussion. Group discussions helped us to understand the topics, and bring on the table diverse ideas.

In this conference, the most surprising and interesting project was LGBT event. I was very surprised by the fact that Japanese society tolerate Sexual minorities. In the LGBT event, we had two days to exchange and discuss more about sexual minorities. In Africa, sexual minorities are a shame and a taboo in the society. In some countries like Uganda and Kenya, LGBT people are killed sometimes. In Rwanda, the society doesn't welcome people with sexual minorities, even though the government has severe laws punishing any kind of discrimination. It has been a great experience to learn from the Japanese Society about sexual minorities acceptance.

We have also had sightseeing events. We have been able to move to different parts of Tokyo, and in Gunma. I was surprised by the fact that Japanese society does not welcome very well foreigners, who work in Japanese companies. However, I have appreciated the initiative of Okayama industries of employing foreigners, and promote mutual respect, and understanding between Japanese workers and other non-Japanese workers.

I have also appreciated SONY projects. SONY Corporation focuses much on research and development. They invest much money in R&D department. They have many

projects which intend to change the lives of many in this world. For instance, the battery they made, which help some Africans living in rural areas to have access to electricity using solar panels, and for a very cheap price. I have really appreciated the way SONY is caring much about climate conservation. SONY building is covered by many solar panels which provide them with electricity to use. This shows how it is very supportive to renewable energies.

The project which made me sad is the Hansen's disease museum. It reminds me of the Tutsi Genocide of 1994. The detention centers did inhuman actions. The world should join hands to prevent other actions like these to happen again. It is in this regard that I would like to thank the IDEA initiative for their support to the patients and victims of Hansen's disease.



In Japan, I have liked the way they prepare their food. Many African citizens suffer much from hunger, while they have food. Many African dishes are not rich in nutrients, and this results in malnutrition for African kids. But Japanese people produce their food with added value, and sold in convenient stores for a low price, and with good quality. I have really liked this.

Lastly, I really liked Japanese people. They are very kind, and very hard working. I really thank Japanese people for their hospitality, and their guidance in this JRYC 15th conference. I recommend the continuity of JRYC activities. I also recommend communication between JRYC alumni and current members. **Arigato Gozaimasu!!!**



第 15 回本会議リフレクション

ルワンダ国立大学理工学部

Jean Berchmans IMANISHIMWE(訳: 堤谷季里)

私は Jean Berchmas IMANISHIMWE と申します。ルワンダ大学に通っていて、薬学部 5 年生です。今回、2016 年 8 月 1 日から 16 日まで、日本ルワンダ学生会議の第 15 回本会議に参加させていただきました。この本会議は沢山の、そして様々な企画で構成されています。プレゼンテーションや学生会議、そして観光もしました。私は日本社会に、とても驚き、そして感銘を受けました。

本会議中、私たちは様々なトピックについて議論しました。例えば、社会、自己啓発、そして文化についてなどです。これらのプレゼンテーションは優れていて、どれも素晴らしかったです。一番楽しかったのはグループディスカッションです。グループディスカッションをすることで、トピックについて理解しやすくなったし、多種多様な意見を聞くことができました。

今回の会議のトピックで一番興味深く、驚いたのは、LGBT についてでした。私は日本の社会が性的少数者を寛容に受け入れているという事実にとっても驚きました。LGBT についての企画は 2 日間設けられ、性的少数者について互いの意見を交換したり、議論したりしました。アフリカでは、性的少数者とは不名誉な事で、社会の中でタブーとされている事が多いです。ウガンダやケニアのような国では、LGBT の人々が殺された事例もいくつかあります。ルワンダでも、たとえ政府がいかなる差別においても厳しい法律を作っている、社会が性的少数者を受け入れているとは決して言えません。そのため、日本の社会が性的少数者に寛容である事から学ぶことで、とても良い経験になりました。

観光もさせていただきました。東京、群馬の様々な場所へ行くことができました。私が驚いたのは、日本社会が、日本の会社に勤める外国人に対してあまり寛容でないことです。しかし、群馬の丘山産業では、日本人労働者と外国人労働者が互いに尊敬し合い、理解し合っていることが分かりました。

ソニーについての企画も参加できて感謝しています。ソニーコーポレーションは、研究と発展にとっても焦点をおいていました。彼らは R&D にものすごくお金を投資していました。世界のたくさんの人々の生活を変えることを意図する企画がたくさんありました。一つ例をあげると、アフリカの田舎の地域で生活する人々が太陽光を使って電子機器を使えるようなバッテリーを、安く提供することです。ソニーが環境維持にとっても気を使っていること

にも感銘を受けました。本社ビルはたくさんの太陽光パネルで覆われていて、彼らはそこから得た電気を使っています。太陽光がどれだけ新しいエネルギー資源を支えているかが、分かりました。

悲しかったのは、ハンセン病資料館に行った時でした。ジェノサイドを思い出したからです。収容所では冷酷な行為が行われていました。このような事がもう二度と起こらないように、世界は手を組むべきです。ハンセン病患者や被害者へのサポートをしている機関、IDEAさんに、感謝したいと思います。

日本では、食事の安全についても素晴らしいと思いました。アフリカの市民は、ハンバーガーから被害を受けることもあります。アフリカの料理は栄養が十分でないことも多いし、その結果、子供たちが栄養失調にかかることもあります。一方日本人は栄養価の高い食事を作り、それをコンビニエンスストアで、質が良く、安いものを販売しています。私はこれがとても気に入りました。

最後に、私は日本人がすごく好きです。とても優しく、とても勤勉です。日本人の親切のもてなす精神、そして第15回本会議の手引きに、とても感謝しています。私は日本ルワンダ学生会議の活動を推奨します。そして、現役メンバーと卒業生の皆様のつながりについても推奨します。”Arigato Gozaimasu!!!”

The 15th Conference Reflection Report

Done by Nadia NIYONIZEYE

Coordinator of JRYC in the University of Rwanda

Huye Campus

Japan Rwanda Youth Cooperation (JRYC) was initiated since 2006. The aim is exchange in education and culture between both University students in Japan and in Rwanda this leading to mutual understanding between these young students in both countries.

The 15th conference was held in Japan (Tokyo and Gunma Prefectures). The Major projects were: LGBT, Multicultural society, Sony industry, Leprosy Facility and Aquarium.

I was inspired by the courage and determination that drive JRJC member - Japan side in making things happen for instance inviting, hosting and covering all expenses of JRJC members – Rwanda side during the conference. I liked that JRJC member’s presentation and interaction in the conference grew our values and knowledge about both countries different aspects. I discovered new way working and relaxing such as Sento, Karaoke: in Japanese way and Sightseeing. That was fascinating to me.

Knowing one’s sexual orientation and having the right to choose one’s sexual status are the key points that LGBT people (like in Shibuya) want other people to accept and respect. This project showed me how human being tends to focus on the society norms and customs regardless of the violation of human rights. Any person has to be valued as a human being and respected according to the human right instead of violating one’s right using personal sexual status as a mean.

I learned the history of international people in Japan (Okayama industry, Tourism association and NPO). There is still a long way to go by Japanese to reach multicultural society because Japanese have a unique culture of there own which in fact is a success and they want it to stay as original as it is. The strategy of empowering the Japanese citizen more than foreigner in Japan is a strategy my own country Rwanda should apply (empowering Rwandese in important job position than foreigners).



Learning how human being were deprived of their humanity by other people because they were sick (leprosy patient at the leprosy facility), that was the saddest heart-felt moment I accoutered in the whole conference. This was similar to the Genocide against Tutsi which happened in Rwanda where Rwandese were killed by other Rwandese because of their ethnic group and deprived of their humanity. The leprosy patients were quarantined, treated inhumanely and left to rot in the quarantine facilities. Therefore

young generation need to be taught about such history, in order to make sure they learn about humanely approach they should undertake in any similar case.

Interacting with kids at Manapal and NPO-no borders was overwhelming to me because I strongly like kids and that showed me the life style of younger ones in Japan. It was my first time in an aquarium (Japan with first aquarium linked memories, this will forever stay in my mind) and the Dolphins and Sea lion shows (waaaauuuu) the best shows ever. I was moved by the passion our Rwandese colleague had while presenting about Sony products and the sadness and need of being the voice to handicaps that our Japanese colleague had while presenting about handicaps.

In sum up, Thanks to the whole JRYC-Japan side team-working and support during the 15th conference. The variety in the projects and sightseeing activities has a nice transition from one another, that was pretty amazing and well planned.

Arigatogozaimasita !

第 15 回本会議リフレクションレポート

ルワンダ国立大学理工学部

Nadia NIYONIZEYE (訳：林 陸)

日本ルワンダ学生会議 (JRYC) は 2006 年に設立された。この団体の目的は日本とルワンダの両方の大学生間の教育と文化の交流を通じて、両国のこれらの若い学生間の相互理解の促進である。

第 15 回会議は、日本 (東京、群馬県) で開催された。主なプロジェクトは LGBT、多文化社会、ソニー、ハンセン病施設や水族館であった。

私たちをこの会議に招待し、受け入れ、およびすべての活動の費用の負担をした日本側の

勇気と決意に非常に心を動かされた。会議を通して両国のさまざまな側面についての価値観や知識を育んだ JRYC メンバーのプレゼンテーションやメンバーとの対話が好きだった。銭湯やカラオケのように日本人の娯楽も新しく発見した。それは私にとっても魅力的なものでした。

自分の性的指向を知り、自分の性的なステータスを選択する権利を有する（渋谷区のように）ことは LGBT の人々が他の人が受け入れられ、尊重されるための重要なカギである。このプロジェクトで私は、人権の侵害に関係なく、人々は社会規範や習慣を重視する傾向があるということを知った。個人の性的志向を利用して人権を侵害するのではなく、何人も人権にのっとなって、人間として評価され、尊敬されなければならない。

私は、国際的な日本人の人々（丘山産業、大泉町観光協会、NPO 法人）の歴史を学んだ。日本人は長年継承し、将来もその原型を保っていたいと考えている独特の文化を持っているので、多文化社会に到達するために、日本で行くには長い道のりがまだあるだろう。日本では外国人よりも日本人により力を与える（より重要な仕事の地位、役職を保証する）戦略をとっており、この戦略は私たちの国、ルワンダでも適用すべき戦略である。

ハンセン病患者はその病気ゆえに他の人に自分の人間性を奪われてしまう、その経緯を学んだのが、その学習は全体の会議を通してもっとも心が悲しさを感じた瞬間であった。これは、ルワンダにおけるジェノサイドツチ族が他の民族グループのルワンダ人によって殺され、彼らの人間性を奪われた事件と同様であると感じた。ハンセン病患者は避けられ、非人道的な扱いを受け、検疫施設に隔離させられた。そのため、若い世代はこのような歴史について学び、また似たような事態が起こった時に取るべき人道的アプローチを学ぶ必要がある。

まなばる NPO 法人ノーボーダーズにての子供との交流は私にとって圧倒的であった。私は小さな子供が大好きで、日本の子供の生活様式を知ることができた。そして今回私は今までにないイルカやアシカのショーを水族館で経験した。私の人生の中で初めての水族館の記憶は日本と結びつき、永遠に私の心にとどまるであろう。ソニー製品についてのプレゼンテーションをしている際にルワンダ人メンバーが抱いていた情熱と、障がい者についてのプレゼンの際に日本人メンバーが抱いていた悲しみと障がい者への声となる必要性の主張に感動した。

第 15 回会議中にしてくれた JRYC 日本側チーム全員の仕事、サポートに感謝する。数多くのプロジェクトや観光はかなり驚くべき、よく計画されたそれぞれの特徴があった。

A REFLECTION

ON THE 15th JRYC CONFERENCE

Blaise Pascal SHYAKA

My name is Blaise Pascal SHYAKA. I am a student in level 4 Biotechnology, in the University of Rwanda. I am very interested in Japan, and it is the main reason that I joined Japan-Rwanda Youth Cooperation (JRYC). I have attended the 15th JRYC conference, and I stayed for two weeks in Japan. Over the course of two weeks, I have learned much from Japan, and Japanese people.

In this report, I'm going to talk briefly about the experiences I have had in Japan, and give recommendations to what should be done in the next JRYC Conferences. In Japan, I have had social and religious experiences, and an additional perspective of what real development is.

My first experience in Japan is Organization. Japanese society is very organized. To explain this, I'm going to give one main descriptive example. In the subways of Tokyo, it's very crowded, because train is the main transport mean. I was expecting a horrific jam on conveyor belts, but I found a different result. People who are in no rush lay to the left side of the conveyor belt, while those rushing pass to the right side. This results in a very effective system, preventing jams on conveyor belts. Surprisingly, there is no written rule suggesting this kind of system. This shows the extent to which Japanese society is organized. This has been a life-changing experience for me. I wish we could have the same kind of organization in the Rwandan society.

The Japanese society is very respectful. The youngster respect the elder, and vice-versa. This mutual respect results in a peaceful society, and mutual understanding among the citizens. In other societies, the youngsters respect the elders, but it's rare to find an elder respecting a youngster. This Japanese specialty has been a transforming experience for me. Respecting others is a value which promotes unity among the citizens. I'm convinced that If we had this value of mutual respect in Rwanda, we couldn't have faced Genocide

in 1994. We Rwandans should learn much from this Japanese value.

Japanese people also take responsibilities too seriously. By my personal observation over the course of two weeks in Japan, when Japanese is assigned a task, he/she wants to make the task 100% successful, and works hard for it. This spirit of striving for perfection has attracted my attention. I kept asking myself why all Japanese people are like that? I found part of the answer from the Japanese education system: *the deduction system*. Japanese children are taught that success is only achieved when they get 100% marks. Otherwise, they have failed. This creates a perfection spirit to the kids. It means that kids educated in this system will seek to perform their responsibilities perfectly, to achieve 100% success.

In many other countries including Rwanda, it is a different case. All we care about is performing better than others. Our education system trains us to be better than others. If you have 65% score, and nobody else has had such score they congratulate you. This affects the way we think, especially the way we act. If the task done is 65% successful, and nobody else has got the same score, then the task is well done. If It was in Japan, you would still have to get 35% more score. Rwanda as developing country, I think we should learn from this system. We should be taught to perform our responsibilities perfectly to develop fast our countries, and achieve sustainable development. This is a transforming experience that I have got from Japan.

Moreover, I have learned much from the religion perspective in Japan. Shintoism and Buddhism are the most popular religions in Japan. Japanese traditional religion is Shinto. Even though many Japanese claim to not belong to Shinto religion, but 80% of Japanese attend Shinto shrines. This kind of religious belief doesn't affect negatively a society. Instead, this traditional religion creates a unified Japanese population. There's a different case in Rwanda. Many Rwandans are Christians, and Christianity affects much the way many Rwandans live. For instance, Adventists can never work on Saturday, and Instead of focusing on similarities of religions, some people focus much on the religious differences. This shows how much a religion can influence Rwandan society. I have really appreciated how Japanese people perceive a religion. I still read much about the Japanese Shintoism.

In Japan, I have got another important experience about development versus standard of living. Personally, I think that real development is the ease with which a population of a country can satisfy their needs. The development of a country should go with the standard of living of its population. The Japanese society has a high standard of living. After the world war two, Japan rebuilt itself, and its economy skyrocketed. As Japanese economy increased, the standard of living of its population also increased. In contrast, the economies of developing countries increase, but generally, the standard of living of their population does not go up. This results in a very large economic gap between the rich and the poor. Developing countries in Africa should learn from the development of Japan. African governments should not only focus on the economic growth rate, but also on the well-being, and the standard living of their population.

Another experience that I have got from Japan is sustainability. Many of the infrastructures in Japan were built very long ago, but they are still useful until now. This shows the extent to which the Japanese government conceived and implemented sustainable projects. For instance, the construction of railways in Japan was started in 1872, but until now, trains are the main public mean of transport. Africa is poor in infrastructures, and Currently, African Governments invest a lot of money in infrastructures, but their sustainability remains a crucial problem. Sustainability is a value that developing countries, especially Rwanda should emphasize.

I have also learned in Japan that in case of complex situations, people should not be desperate, and expect help from outside the country; instead, they should focus on finding solutions to their problems. Japan is in the middle of tectonic plates. It is very exposed to very strong earthquakes, tsunamis, and other natural disasters. But Japanese society tried to find solutions to their own problems. Japan now has flexible buildings to resist strong earthquakes. Weather forecasting services are also very well equipped and accurate, and the way to inform people is very efficient, and fast. Emergency services are also very advanced. What surprised me the most, is how Tokyo regulates floods using an underground regulating reservoir.

The most touching and heartbreaking thing that I experienced in Japan, is the tragic

history of Hansen's disease patients. This was a very sad history. Many people were discriminated, deprived of their rights to have families, and killed in a very pitiful way. After this project, I directly searched the case of Rwanda. However, in Rwanda, leprosy is a very rare disease, and in the Rwandan history, leprosy has never been an epidemic disease like in Japan. We should join hands through the international cooperation to prevent such a thing to happen again in any country.

In fact, I have much to talk about when it comes to giving a reflection on the experiences that I have got from Japan. In this report, I have tried to briefly highlight key experiences. I am very grateful to everyone who has contributed to the organization of JRYC 15th Conference. I have appreciated everything during my Stay in Japan. Every bit of a second spent in Japan taught me something new. I love Japan, Japanese lifestyle, culture, working system, and especially Japanese people. Japanese people are very kind, helpful, smart, and excited to learn new things.

The motto of JRYC is mutual understanding. During my stay in Japan, I have got a basic understanding of how Japanese society lives. I not only learnt about it, but I have integrated some of the Japanese values in my daily life. I recommend the continuity and sustainability of JRYC. I also recommend the increase in number of projects to carry out in Japan as well as in Rwanda, if possible.

Otsukalesamadeshita for organizing a perfect 15th JRYCConference.

ARIGATO GOZAIMASHITA!!!



第 15 回本会議リフレクション

ルワンダ国立大学理工学部

Blaise Pascal SHYAKA (訳：山崎建)

今回、第 15 回本会議に参加し、約 2 週間日本に滞在したが、私は滞在中に日本、日本人から多くのことを学ぶことができた。

まず初めに感じたのが、日本の社会は非常に組織化されているということだ。これには一つの例が挙げられる。東京の地下鉄に乗ったときのことだ。東京都内の地下鉄の駅は非常に込み合っていた。電車が日本人にとって主要な移動手段であることが理由だろう。私は駅内、特にエスカレーター付近は混雑し、利用者の規律が乱れ、駅内は混乱するだろうと思っていた。しかし結果は予想とは異なったものであった。それほど急いでいないように思われる人々はエスカレーターの左側に立ち、急いでいるであろう人々は右側を移動していた。これはエスカレーター付近における混雑解消のための非常に効果的なシステムであると感じた。驚くべきことに、このルールについては駅構内のどこにも書かれていないのである。日本が非常に組織化された国であるということを今回の例から感じる事ができた。ルワンダ社会も日本と同じように組織化された社会となる日が来ることを切に願っている。

2 つ目に感じたことは、日本社会は非常に礼儀を重んじる社会であるということである。若者は年長者を敬い、逆もまた同様である。日本の平和社会はこの相互尊重、市民同士の相互理解の結果だと言えるだろう。他の社会では、若者が年長者を敬う姿勢は見受けられるが、年長者が若者を敬うということは稀であるように思われる。この日本社会特有の文化は私の常識を覆す経験となった。他者を敬うことは、市民社会の結束に繋がる。もしルワンダ社会が他者を敬う重要性を認識していたならば、1994 年にジェノサイドは起きなかつたらうと私は確信している。私たちルワンダ人は、日本社会の相互尊重の文化から学ぶべきことが多々あるだろう。

日本人は非常に責任感があるということも日本滞在中に感じた。日本人が仕事を割り当てられたとき、彼、彼女はたとえその仕事が非常に困難なものであっても必ず 100%の達成を望む。この努力を怠らない姿勢に私は非常に感銘を受けた。なぜ日本人はこれほどまでに責任感が強く、努力を怠らないのか。これは日本の教育システムが理由の一つではないかと私は思う。日本の子供たちは、成功とは 100%の達成を指すといった教育を受けている。日本人は、子供の時の失敗の経験によって、100%仕事をこなすことの重要性を学ぶのだろう。一方で、ルワンダを含む他の国々の人々は異なった感覚を抱いている。他の人より優れた働

きをすれば良いという考え方である。私たちは仕事をこなす際、他の人より優れていることを目指すべきだという教育を受けている。もし私が 65%の達成度で仕事を終えたとしても、他の人々が 65%以下の働きしかなかったのであれば、私はよくやったと称賛されるだろう。しかし、日本であれば残り 35%の仕事をこなさなければいけないと言われるのは明白である。ルワンダのような発展途上国は、日本のような完璧に仕事を達成することの重要性を教育に取り入れるべきである。私たちは請け負った仕事を完璧にこなし、持続可能なルワンダの発展を目指していくことが必要であると感じた。

日本の宗教観からも私は多くのことを学ぶことができた。神道と仏教は日本の主要な宗教であり、神道は日本の伝統的な宗教である。日本人の多くは神道を信仰しているわけではないと言うが、約 80%の日本人が神社にお参りに行ったことがあるという。この日本の宗教観は日本人に決して悪い影響を与えているわけではない、むしろ日本人の結束を高めていると言えるだろう。ルワンダでは状況が異なる。ルワンダ人の多くはキリスト教徒である。キリスト教信仰はルワンダ国民の生活に大きな影響を与えている。例えば、セブンスデー・アドベンティスト教会（キリスト教の一派）の信徒は日曜日に仕事は決してしない。ルワンダ社会においてキリスト教がいかに影響を持っているかがわかる顕著な例である。日本人が宗教、特に神道をどのように受け入れているかを知ることができて非常に嬉しく思う。まだまだ神道について学ばなければいけないことが多々あると感じた。

日本滞在中、私は発展に対する人々の生活水準についても重要なことを学ぶことができた。私は、本当の意味での発展とは人々が必要なものに困らない状態を伴うものだと思っている。発展途上国は人々の生活の質向上も含めた発展を目指していくべきである。日本の社会は人々の生活水準が非常に高いレベルにある。第二次世界大戦終了後、日本は自身で時刻を立て直し、経済は急成長を遂げた。日本の経済が成長するにつれて、人々の生活水準も高まっていった。それとは対照的に、発展途上国の経済が成長しても、国民の生活水準は低い状態のままである。結果として、富裕層と貧困層の間の経済格差がより深まってしまっただ。アフリカの発展途上国は日本の経済成長の過程を学び、参考にすべきである。またアフリカ諸国の政府は、経済成長率のみを考えるのではなく、国民の幸福や生活水準に焦点をあてた発展を目指していくべきであると私は考える。

耐久性の重要性について学べたことも、私にとっては貴重な経験であった。多くの日本のインフラ設備はかなり前に建設、設置されたものであるにもかかわらず、今も使用され続け人々の生活を支えている。日本政府は持続可能なインフラ設備の設計を考え出し、実行に移してきた。日本の鉄道建設が例として挙げられるだろう。日本の鉄道建設は 1872 年に始まったが、今もなお日本人の主要公共交通機関として利用され続けている。アフリカはインフラ設備に乏しい。現在、アフリカ諸国の政府はインフラ整備に多くの投資を行っている。し

かしインフラ設備の耐久性に決定的な問題が存在するのである。インフラ設備における耐久性、持続性は発展途上国、特にルワンダでは非常に重要なものであるということを強調したい。

日本は地形的、地質構造的に強い地震、大きな津波また他の自然災害に見舞われやすい環境下にある。しかし日本の社会はそうした問題に対する解決策を模索し、見出しているように思われる。現在の日本には耐震性に優れたビルが多く存在する。天気予報は非常に高度であり、正確だ。人々に適切な情報を迅速に提供することができている。緊急時に対する対策が非常に発展しているという印象を受けた。なかでも特に私が驚いたのは、東京都では洪水を防ぐための貯水池が地下に設置されているということだ。

私が最も心を動かされ、また心が痛んだ経験は、ハンセン病患者の方々の歴史について学ぶ企画に参加したときのことである。これは非常に悲しく辛い歴史である。ハンセン病患者の多くは差別、迫害され、同じ人間として生きる権利をはく奪された。家族を持つという権利さえも痛ましい方法で断たれたのだ。ハンセン病に関する企画終了後、私はすぐにルワンダにおけるハンセン病の歴史について調べた。ルワンダにおいて、ハンセン病は非常に発症数の少ない病気であり、日本のように流行はしなかったようだ。私たちは国際的な協力のもと、日本におけるハンセン病の歴史のような悲劇が世界のどこの国においても再び起こらないように手を取り合っていかなければならない。

正直なところ、この報告書にはまとめきれないくらい多くのことを私は日本に滞在して学ぶことができた。第15回本会議に携わり、支えてくれたすべての方々に心から感謝したい。一秒一秒、すべての時間が私に新たなことを教えてくれた。私は日本が、日本のライフスタイル、文化、労働形態、そしてなにより日本人が大好きだ。日本人は非常に優しく、親切で、聡明で新たなことを学ぶことをやめない。

日本ルワンダ学生会議の活動理念は相互理解である。日本滞在中、私は日本人がどのような社会で生きているのか、根柢の部分を理解することができた。また、私はただ学ぶだけではなく、日本人の価値観や生活様式などを実践することもできた。日本ルワンダ学生会議の活動が今後も継続し、ますます発展していくことを切に願っている。

JRYC 15th Conference Reflection

Léandre BERWA

I am Rwandese and I am a university student majoring in Electronics and Telecommunication Engineering. It was my first time to travel out of Africa and I was so fortunate that my very first experience out of Africa was in such a great nation Japan is.

I was so impressed that Japan is still culturally original especially in terms of the language, which is not the case for most of the African countries. In their way to development they are taking the Western Countries (America and Europe) as their model and they are like trying to copy everything from the Western countries. They are trying to live the western way and forget their traditional ways, they are speaking western language and forgetting about their mother languages. I personally feel so bad for that and I really admired that Japan is genuine and I wish the world, especially African countries could be the same.

I also really appreciated that Japanese are so strict and organized in every little thing they do especially in public. The way everybody is walking on his/her left on the sidewalks and on stairways, the way everybody stand on his/her left on escalators and leave a way for people in hurry on the right. So walking in public ways is always so smooth.

During the LGBT project, I realized that Japan is slightly different to Rwanda in terms of tolerance in regards to LGBT activities and LGBT people. There are many people who can confess to be LGBT in Japan which is not the case in Rwanda. LGBT is a very sensible topic in Rwanda, it is ridiculous and shameful to be an LGBT. However there is no open discrimination against LGBT people.

Japan is not so open to foreigners and to study about multicultural society in Japan we moved to Gunma prefecture which holds the big percentage of foreigners in Japan. We visited two children centers: NPO No Borders and the Manapal School. I really enjoyed passing time with the children, we played some games together and had conversations

with them and with their responsible. At Manapal School we taught them our traditional dances and some basic conversations in Kinyarwanda (our mother language). I was amazed and surprised by how they were so eager to know and experience our culture though it was even the first time to most of them to see a black person.



In Gunma, we also visited Okayama Industry Co. Ltd. which manufactures chairs for Shinkansen trains. The industry has a high percentage of foreigners as employees and to me they represent the kind of harmony and success that can exist when Japanese and foreigners work together. I was so impressed we could see one of the best technologies in chair making and I liked the way the industry value both high technology and low technology which is one of the reasons of their success.

I think you cannot talk about multicultural society in Japan without mentioning Oizimi town, the Little Brazil. I was so impressed by the presence of many non-Japanese symbols, many Brazilian flag, at some places you would say you are suddenly out of Japan. However I was a bit saddened that there are many security and social troubles in the city compared to other parts of Japan and all the credits goes to the foreigners. That is a failure of multiculturalism.

Back in Tokyo, visiting the National Hansen's disease Museum in Higashimurayama City, we learned about the miserable situation of people affected by Hansen's disease in the past where they were isolated in the sanatoria. We met with Mr. Miyoji Morimoto a formal Hansen's disease patient. Here I learnt one important lesson: everybody deserves care and appropriate treatment, nobody deserves isolation and discrimination. No matter how dangerous their disease is, isolation can only come to stop the contamination to other people, but not for discrimination, and when qualified doctors confirm that they are cured, they should be immediately reintegrated in the society.

The Shinagawa aquarium was one of the most impressive experiences of the conference.

There is no aquarium in Rwanda and I was so impressed by how people design a world for sea life among themselves. I was first worried about the condition of the fishes, whether they are comfortable to live constantly under human watch and manipulation, but I was explained how everything is put in place to simulate their normal lives in the seas and I was a bit relieved. I liked a lot that aquarium serves for both education and for conservation because I could learn about the Tokyo bay and the Musashi Tomiyo species. I appreciated a lot the effort put in place to preserve the endangered species. In Rwanda, nature conservation is also taken much care on, but animals are protected in their wild places, in national parks and lakes where they are normally comfortable living.

And lastly came the most interesting project to me: Sony Corporation. I am so enthusiastic about technology and in my studies and explorations I came across this amazing brand and I was convinced that it is the best electronics manufacturer, not only because of the good devices they make now but also because of the history and how much Sony contributed to our World. We visited the Sony Building and Sony Computer Science Laboratories, Inc. where we were so privileged to be welcomed and discuss with a Sony Service Planer, Sony CSL Research Marketing Planer and Sony CSL Chief Producer/Senior Manager. They made for us interesting presentations with which I got to know more about Sony. Through Mr. Yoshimura (Sony CSL Chief Producer/Senior Manager)'s presentation we discovered that Sony had some projects in Africa and I asked about the criteria they based on to choose the country they made their projects in. I was wondering why not in Rwanda and now we are doing our best to connect him to people responsible of such projects in Rwanda so that maybe the next time they think of making a project in Africa they may choose Rwanda.

I felt so honored and so happy to be discussing Sony affairs with Sony people through the many questions I always had about my favorite company but never had anyone to ask them to. I have been always disappointed that despite the good quality of devices, Sony is not so popular and is not doing very well in terms of selling, this is especially for the electronics industry.

We found out that one of the mistakes Sony have been doing is being too good than the World deserves, I mean they sometimes bring to the market devices and technologies before the World is ready for them. This is the case of the late virtual reality headset (picture below), AIBO robots in 1999 to 2005 and just recently the 4k display on the

Xperia Z5 Premium. These products didn't sell well just because they were too good than the World expected. So Sony should take much more care on the timing of their products and selling or advertising.

Through the conference, we also had student conferences which were so fruitful and so informative in terms of new knowledge and new conceptions of realities we knew about. These conferences especially sharpen our mutual understanding and our culture exchange. In one of the conferences, named Rwanda café other people not JRYC members were invited and we made presentations to them about Rwanda. I was so happy and impressed by seeing people having interest in my country.

Another really interesting part of the conference was homestays. We had two homestays in Chiba Prefecture. We experienced normal Japanese life. I was so touched by the kindness and the welcoming of the parents, we shared meals together discussing about Japan and Rwanda. We shared gifts and experienced the different cultures together through Rwandan traditional dances and Japanese martial arts.

During the homestays, we noticed the solar energy system they use in the home and the interesting part is that they sell back the unused power to the energy company. It is really interesting and we are looking on how to implement it in Rwanda. It can help solving the energy problem in Africa, given we have sun constantly all the seasons, so there could be much unused power that could be transferred where it is needed.



I did not only enjoy the projects, the student conferences and the homestays, I also enjoyed just all time passed with other JRYC members. All the discussions, all the questions we were asking each other, all the jokes, all the serious and all the funny moments. "You people are just amazing, you are one of my best friends!" That is my thought about Japanese members.

In final consideration, I had a tremendously amazing experience. I learned and experienced a lot of new things and I passed time with irreplaceable people. I am so grateful to everyone who contributed anything to make this 15th conference a success. I cannot express enough how much I am grateful to JRYC Japanese members for their organization and the sacrifices for the conference. I will also always appreciate our funders.

第 15 回本会議リフレクション

国立ルワンダ大学理工学部

Léandre BERWA (訳：吉田萌子)

私は電子工学・遠距離通信工学を専攻しているルワンダ人学生です。今回の会議でアフリカを出たのが初めてで、それがすばらしい国、日本であった事はとても幸運でした。

私は日本が特に言語の面で、依然として文化的に独創的であることに非常に感銘を受けました。アフリカ諸国のほとんどではそうではありません。開発の過程で、多くのアフリカの国々は欧米諸国をモデルにしています。彼らは西洋らしい方法で生きようとしていて、独自の伝統的な方法を忘れて、西洋の言語を話して母国語を忘れていています。私はそれを残念に思っていて、日本はすばらしいと思いました。そして、世界、特にアフリカ諸国が日本と同じようになることを願っています。

日本人は、特に公共の場において小さなことでも厳格に組織されていることを評価します。誰もが歩道や階段の左に歩いたり、エスカレーターで左に立って、急いでいる人を右に通したりしますそのため、公共の道を歩くとき、いつもとてもスムーズでした。

LGBT プロジェクトでは、日本は LGBT 活動や LGBT の人々に対する寛容さという点で、ルワンダと若干異なっていることに気がきました。ルワンダとは違い、日本では LGBT と公言できる人もいます。ルワンダの LGBT は非常に繊細な話題で、LGBT であることはばかげていて恥ずかしい事とされています。ただ、LGBT の人々に対する公な差別はありません。

日本は外国人に対してあまり寛容でない。日本の多文化社会について学ぶために、私は外国人が多く働く、群馬県を訪れました。私たちは2つの子供センターを訪れました。NPO 法

人 No-Borders とまなばるです。私たちは一緒にいくつかのゲームをして、子供たちとの時間をとても楽しみました。

まなばるでは、私たちの伝統的な踊りや Kinyarwanda（母語）の基本的な会話を教えました。ほとんどの人に黒人を見ることは初めてだったにも関わらず、彼らが私たちの文化を知り、経験する事にとっても熱心だったので、私はびっくりしました。

群馬では、新幹線の椅子を製造する岡山工業（株）も訪問しました。その会社は、従業員として働く外国人の割合が高く、日本人と外国人が一緒に働くときに生まれる調和と成功を代表していると私は感じました。私は非常に感銘を受け、椅子製造において最高の技術の1つを見ることができました。そして、彼らがハイテクノロジーとローテクノロジーの両方に価値をおいている点が好きでした。彼らの成功の理由の1つであると思います。

リトルブラジルとも呼ばれる群馬県大泉町について触れずして、日本の多文化社会について語ることはできないと思います。私は、多くのブラジルの旗があることにとても感銘を受けました。そこに訪れた人は突然日本から出たような気分になるでしょう。しかし、私は市内の安全問題や社会問題が、日本の他の地域と比較して多く、そしてすべての評判が外国人に行くということに少し悲しみを覚えました。そこが多文化共生の失敗だと思います。

東京に戻って、東村山市国立ハンセン病資料館を訪れて、ハンセン病に罹患した人々の過去の療養所での孤独な状況を知りました。元ハンセン病患者である森元氏に会いました。ここで私は1つの重要な教訓を学びました。誰もが気遣いと適切な治療を受ける権利があります。誰も孤立と差別を受ける権利などありません。彼らの病気がどれほど危険なものであっても、孤立は他人への感染を止めるだけで差別は止めることができず、医師が治癒したことを確認したらすぐに彼らは社会に復帰すべきです。

しながわ水族館は、この会議で最も印象的な体験の一つでした。ルワンダに水族館はありません。私は人々が海洋生物の世界を生息地と似たように設計している事に非常に感銘を受けました。私はまず魚の状態を心配しました。人間の目と操作の下で常に快適に生きることができるのかと不安に思いました。それぞれの生息地の環境に似た環境を作り、魚を管理していると説明を受け、安心しました。東京湾やムサシトミヨの種について学ぶことができ、水族館は教育と保全の両方に役立っていることわかりました。私は、絶滅の危機に瀕している種を保護するために努力を重ねてきたことを高く評価しました。ルワンダでも、自然が大切に保護されていますが、動物は野生の場所で保護しています。

最後に、私にとって最も興味深いソニー企画がやってきました。私はテクノロジーに熱中しており、私はこの驚くべきブランド、ソニーを見つけました。彼らが今作っているデバイスは優れているだけでなく、私たちの世界に貢献しており、私はそれが最高のエレクトロニクスメーカーであることを確信しています。私たちはソニービルとソニーコンピュータサ

イエンスラボラトリーズを訪問し、ソニーサービスプランナー、ソニーCSL リサーチマーケティングプランナー、ソニーCSL チーフプロデューサー/シニアマネージャーに会い、彼らは私がソニーについての興味深い発表をしてくれました。吉村氏（ソニーCSL チーフプロデューサー/シニアマネージャー）の発表を通して、ソニーはアフリカでいくつかのプロジェクトをもっていることがわかりました。彼らのプロジェクトを行う国を選ぶ基準について質問しました。ルワンダでこのようなプロジェクトを担当している人々に彼をつなぐために、私たちは最善を尽したいと思います。今回は、アフリカでのプロジェクトでルワンダを選ぶかもしれません。

私は自分の好きな会社であるソニーについて多くの質問ができ、ソニーの問題について話し合うことができ、とても嬉しかったです。私は、ソニーはエレクトロニクス業界において、良質のデバイスにも関わらず、それほど普及しておらず、販売に関してはあまりうまくやっていないことに悲しく思います。

私たちは、ソニーがやってきた間違いの1つが、世界が評価するよりも優れているということを知った。これは、後半のバーチャルリアリティヘッドセット（下の写真）、1999年から2005年のAIBOロボット、そして最近ではXperia Z5 Premiumの4kディスプレイのケースのことです。これらの製品は、世界が期待していたものよりもあまりにも良かったため、うまく売れませんでした。だからソニーは、製品や販売や広告のタイミングにもっと力を入れるべきだと思いました。

会議を通じて、私たちはまた、新しい知識と新しい概念で、有益な学生会議を開催することができました。これらの会議は、特に私たちの相互理解と文化交流をより明らかにします。会議の一つでは、ルワンダカフェという名前で、JRYCのメンバーではない他の人々を招待し、ルワンダについてのプレゼンテーションを行いました。私はとても幸せで、私の国に興味を持っている人々を見て感動しました。

会議のもう一つの興味深いことはホームステイでした。私たちは日本のノーマルな生活を経験しました。私は両親の親切に感動しました。日本とルワンダについて話し、食事を共にしました。私たちは、ルワンダ伝統舞踊と日本の武術を通じて、贈り物を共有し、異なる文化を経験しました。

ホームステイ中に家庭で使用する太陽エネルギーシステムに気付きました。興味深いのは、未使用の電力をエネルギー会社に販売することです。本当に面白いし、ルワンダでそれをどうやって実行するかについても考えています。季節に合わせて、電力を必要としているところに届けることは、アフリカのエネルギー問題を解決するのに役立ちます。

私は、プロジェクト、学生会議、ホームステイを楽しんだだけでなく、他のJRYCメンバーと一緒に過ごしました。すべての議論、私たちがお互いに尋ねてきたすべての質問、すべ

でのジョーク、すべての真面目で面白い瞬間。「あなたたちはすばらしく、私の親友の一人」私の日本人メンバーに対する思いです。

私はすばらしい経験をしました。私は多くの新しいことを学び、経験しました。そして、私はかけがいのない仲間と共に時間を過ごしました。私はこの15回目の本会議を成功させるために貢献してくださった皆様にとっても感謝しています。JRYCの日本人メンバーにどれほど感謝し、会議のためにどれほどの犠牲を払っているかについて、完全に表現することができません。また、私はいつも助成金団体に感謝しています。

メディア掲載

MEDIA COVERAGE

上毛新聞「ルワンダの学生が大泉視察 多文化共生を理解」2016年8月10日
付朝刊

(第三種郵便物承認)



日系ブラジル人の子どもらと交流する日本ルワンダ学生会議のメンバー(左奥)

ルワンダの学生が大泉視察 多文化共生を理解

日本とルワンダの相互理解を目指す学生団体「日本ルワンダ学生会議」が9日、大泉町を訪れ、ルワンダ国立大の4人を含むメンバー12人が、町内のブラジル人コミュニティを視察、多文化共生などについて理解を深めた。

一行は、ブラジルスーパーや町観光協会を訪問して地域の特色に

各部門トップの4人で展示している。以外で、目標スコアを出品しているのは春

日本とルワンダの相互理解を目指す学生団体「日本ルワンダ学生会議」が9日、大泉町を訪れ、ルワンダ国立大の4人を含むメンバー12人が、町内のブラジル人コミュニティを視察、多文化共生などについて理解を深めた。

同国立大で薬学を学ぶイマニシメ・ヘルクマズさん(24)は、「い

ろんな国の子どもが一緒に遊ぶことで、外国籍児童の学習支援や居場所づくりを行うNPO法人ノーボーグの取り組みを見学した。アフリカからの来客に大喜びの子どもたちもルワンダについて紹介し、一緒に遊んでいた。

「一緒に遊んでいて素直で笑顔で感心している」と笑顔で感心し



後援・助成団体様・ご協力いただいた方々

SUPPORTER

後援

- ・ 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)
- ・ ルワンダ国立大学 (National University of Rwanda)
- ・ アフリカ平和再建委員会 (ARC)

助成金団体様

- ・ 双日国際交流財源
- ・ 三菱 UFJ 国際財団
- ・ 早稲田大学学生課

ご協力いただいた団体・個人の皆様 (順不同)

- ・ 大泉観光協会 副会長 小野修一様、事務スタッフ 富樫ジュリアナ様
- ・ 上毛新聞社 寺島努様
- ・ まなばる 代表 太田琢雄様
- ・ 合同会社ヤマナハチマン 代表社員 山口和也様
- ・ 山名八幡宮様
- ・ ピッコリーノ様
- ・ ミコカフェ様
- ・ NPO 法人国際比較文化研究所様
- ・ 丘山産業株式会社 代表取締役社長 原田良一郎様、経営管理部取締役部長 米澤洋司様
- ・ 丘山商事株式会社 取締役業務部長 米澤孝史様
- ・ NPO 法人 No-borders 様
- ・ 大泉町観光協会様
- ・ IDEA ジャパン 代表 森元美代治様
- ・ 国立ハンセン病資料館様

- ・ ソニーコンピューターサイエンス研究所様 西川翔陽様
- ・ 渋谷男女平等・ダイバーシティセンター アイリス様
- ・ ダイバーシティ早稲田様
- ・ 藤元敬二様
- ・ 参加者の皆様

誠にありがとうございました。

おわりに

「相互理解」。私たちが活動理念として掲げている「相互理解」であるが、それは成果の見えなさゆえにしばしばメンバーを苦しめることがある。ゴールのない私たちの活動の最終着地点はどこにあるのだろうかと考え壁に当たるメンバーも多い。しかし、私はこの最終着地点の見えなさこそが日本ルワンダ学生会議最大の弱みであり強みであるように感じる。ほとんどのメンバーが「相互理解」という言葉に悩まされ自分がここで何をすべきなのか。何をしていれば正しいのかと戸惑い自分の活動の意義を、また、存在に悩み行き詰ってしまう。しかし、私が思うにメンバーの考え、行動、すべては答えになりえる。明確なゴールがない分、自分なりのゴールを設定し、思うままに挑戦していいのだと思う。あいまいと呼べば弱みにもなりえるが、この“自由”は当団体にとっての最大の魅力ではないかと思う。

今回、私にとって渡航後初めてとなる日本招致事業となったわけだが、そこに人と人との確かなつながりを見ることができたように思う。帰り際に発せられるルワンダ人のたどたどしい「またね。」の声は、私には確かにまた会えるということを確認した声に聞こえた。もちろんルワンダ人学生とつながりを持つことが「相互理解」と呼べるかは疑問ではあるが、私にとっての相互理解の形がそれなのだとして理解していただきたい。今回私にとっての相互理解の1つの形を発見し、それを実現できたことを大変うれしく思う。

また、当団体に所属するメンバーにも、今すぐには言わないが、当団体の“自由”差を生かして、自分なりの「相互理解」の形を見つけそれに向かって存分に力を発揮して行ってほしいと思う。

最後に今回第15回本会議を開催するにあたり資金面においてご支援をいただいた財団さま、企業さま、ならびに各都市で惜しみない厚意で協力いただいた企業の方々、現地の方々、最後に、日々活動を見守ってくださる WAVOC やご家族の方々にこの場を借りて心からの感謝の意を表したいと思う。

日本ルワンダ学生会議
日本大学経済学部4年
板谷美沙



ありがとう!

Murakoze!!

日本ルワンダ学生会議 第 15 回本会議活動報告書

2016年11月10日 第初版発行

発行先 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 公認
日本ルワンダ学生会議

編集 吉田萌子

連絡先 japan.rwanda@gmail.com

